

日常系は推理モノより
事件が多い！？

あずきシティ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

主人公 鈴木善治 は高校2年の文芸部員

まあ何事もなくのほほくと過ごしていききたいなんて思っている、それを阻む巨大(?)な陰謀(?)が現れて……

ということで、高校日常系を書いてみました。

日常系はあらゆるベクトルから攻めてくる!!?

でもヤマもオチもない!?!?

そんなのほほくとしながら、たま〜にだけピリツと来るような

でも基本はゆる〜い日常系の開幕です。

(こんな日常過〜したったなあ)

目次

【1話】	部屋は共用!?	1
【2話】	廃部決定	6
【3話】	ダンゴムシ食べたい!	13
【4話】	ツブヤイター	19
【5話】	休憩とか書いてるお城みたいな建物	24
【6話】	シヨツピングモール	30
【7話】	煩惱	36
【8話】	ごめんね	49
【9話】	ハッターリーポッター	55
【10話】	なんとか接点を増やそうと…	65

【11話】	ヒトカラ	71
【12話】	恋する乙女はかわいい。	78
【13話】	妹か?	83
【14話】	おい待てや。	90
【15話】	蓋をしたはずの感情	101
【16話】	隣にいるのは俺じゃない	111
【17話】	新入生歓迎会	117
【18話】	先輩としては情けない	129
【19話】	ウニクロ	139
【20話】	クス過ぎる面	145

【21話】人の幸せを他人が語るべきではない
—— 150

【22話】教師vs主人公
—— 155

【23話】一緒になって廃部を覆してくだ

さいよ！
—— 165

【24話】既成事実を作ったもん勝ち

175

【25話】廃部第2弾候補リスト

181

【26話】夢だった……過去形か……。

186

【27話】♪僕の風、僕の風、僕の風♪

稼げる男に僕はなる♪
—— 193

【28話】デートと言っても差し支えない

—— 204

【29話】ワンチャン
—— 216

【30話】保留
—— 222

【31話】賞金100万円
—— 228

【32話】『やった』っていうのが大事

234

【33話】学校の授業では教えてくれない

タイプの勉強
—— 244

【34話】男の人って一回は浮気する

249

【35話】今のままではいけないと思いま

す。だからこそ今のままではいけないと

思っている。――|――|

【45話】夢――|――|

【36話】やったか……!?!?――|――|

【37話】一杯いくか?――|――|

【38話】文化祭の日がやってきた。

280

【39話】一緒に――|――|

【40話】クズな俺と今カノと元カノ（未

来形）――|――|

【41話】後夜祭――|――|

【42話】近いうちに結論が出る

315

【43話】一旦、保留――|――|

【44話】ゆっくりゆっくり――|――|

327

321

【1話】部室は共用!?

俺はただの高校2年生、鈴木善治だ。

俺の通う高校は文化祭も終わり、樹木は赤く色づき始めた秋本番だ。いよいよ高校生活も折り返し、進路のことも考えなければいかんなあ……。

そうは思いつつも、まあ真剣にはなれない。まだ先だしなあ……。
だらしないと言われそうだが、そう思う同志は多いと思うぞ。

さて、今現在、体育館に全校生徒が集められて学校行事が行われている。どうやら生徒会の選挙らしい。

え？もつと関心を持ってって？確かに3年生が引退し、生徒会の選挙も同期が出ているのだが、それにしたって知らん人だ。だいたい立候補者が少ないし、生徒会長に至っては立候補したのも1人だけ。信任投票だから、どうせ当選だしな。

会長候補が何やら改革がどうのこうのと言っていたが、まあ言うだけだよなあ……。
恐らく、この体育館にいる全校生徒がそう思っているだろう。現実はそのまんまなんだ。どうせ言ってる本人もそうだろう。

しかしまあ……今年の会長候補は女子だし、しかもかわいいな。常に笑顔だし、軽くゆるく巻いた髪がとてもいい。明るい声のトーンも好きだ。

どうせ知らん人だが第一印象が良いだけで投票用紙の信任に○を付けるのも躊躇い
がなくなるといふものだ。

……あれ？あの会長候補ってどつかで会ったこともあるような気はするな……。

まあ同期だし、そりゃ見たことくらいあるか。

生徒会長候補には好印象、他の生徒会役員候補にはまったくの印象は無いまま演説会
は終わり、教室で投票とホームルームがあり、今日の授業は終わりとなった。

この後、選挙の開票作業があるらしい。結果は全員当選で見えているが……。

俺の放課後は、という今日は週に一度の部活だ。部室は移動教室で使われる教室
だ。

部室のドアをガラツと開けると1年生たちの「おはようございます！」と元気な声が
飛んでくる。なんか気恥ずかしいな。軽く会釈しながら部室の隅に行く。

先輩だから堂々としろと言われそうだが、残念ながら俺は彼ら彼女らの先輩ではな
い。ややこしい話だが、種明かしをしよう。

今、元気な挨拶をしてくれたのは演劇部員だ。

そして俺は文芸部員。学校の後輩ではあるが、部活の後輩という訳ではないのだ。

しかし演劇部と文芸部の部室は共用で、礼儀正しい演劇部員たちは俺にも挨拶をして
くれている。そんな状況というわけだ。

もともと演劇部も文芸部も部員が少なく、俺が入学する前は一つの部活で劇団文芸部
だった。

俺としては、何か部活はしなくちゃと微妙な焦りと、社会に出るときに何かしら面接
でも受けることがあったときの話題が欲しい。

しかし精力的な活動はしたくない。

幸いにして、文字を書いて話を作るのは苦手ではなかったし、人数が少ない劇団文芸
部で脚本担当という裏側ポジションでこっそり部活をしようと思つて入部した。

ところが、同期で劇団文芸部に入ろうという人間が多く、いつそのこと演劇部と文芸
部に分離してしまおうということになってしまった。

俺は人前に出るのは苦手だし、書くのを目的に入部したのだから文芸部員になった訳
だが、どういふことか俺以外は全員演劇部員になった。せめて5人くらいは文芸部員に
なつてくれると思つたんだがな……。

以上の経緯と文芸部の活動内容から大々的な部室は不要と判断され、部活としては分

離れたはずの演劇部と文芸部は結局、同じ部室を使うこととなった。

その後、俺一人となった文芸部は週一回だけ活動……と言っても普段は何もすることなく演劇部の観客だ。

文化祭ではさすがに何もしないのももったいないので、小説を書いて同人誌を作った。後はそれを無料配布する。以上、終わり。

そんな部活と言っても良いのか分からないレベルの活動をしてきただけだった。

ま、これはこれでお気軽に部活を続けた実績を手に入れられるしいいか。

そんな軽い考えしかないもんだから、全国津々浦々の真面目にやってる文芸部員の皆様にはお詫び申し上げたい。

そうは思いつつ、今日の部活も演劇部の観客だ。ちなみに今日の演劇部にはもう進路が決まったららしい先輩が遊びに来ていた。

「リキ！お前はもうちよい力抜け!!抑えろ!!」

失礼、先輩は遊びに来たのではなく、熱いご指導をされているようだ。

舞台にひたむきで先輩たちを厳しく指導している。

あんな先輩を見ると、ほんのちよつとだけ羨ましくなるが、まあ俺だったら耐えられないかな。

部活が始まり数十分。生徒会選挙の結果が校内放送で流れた。まさしく予想通り、全員が信任で当選とのことだった。

一応、今日の気になることは終わったし部活は終わりにするか。

俺は荷物を片付けて、真面目に活動する演劇部に挨拶をして部室を後にした。

【2話】 廃部決定

生徒会選挙から1週間、やっぱり何も変わらないなあと思いつつ、再び部活の日がやってきた。週1回の部活だ。

演劇部はなんだか大会が近いらしく、いつもより盛り上がっている。熱血指導していた先輩は今日もお出でのようだ。

「ふーん……で？……それで心に響くと思ってるの？」

かなり厳しい熱血指導だなあ。

ちなみにこの熱血指導している先輩は庄司先輩といい、ぱつと見は、柔らかい物腰と親しみやすいタメ口で、舞台さえ絡まなければすごく優しい男性だ。

女子からもモテるとかなんとか……。

フツメンでも人間、中身がしっかりしてれば良いんだなあ……。

「お、鈴木ー来たか。」

おっと珍しく庄司先輩が俺を呼んでる。こういう時は演劇部の手伝いでも頼まれるもんだが……。

「さつき、上田が来て文芸部の部長に用があるつてよー。生徒会室に來いってー」

「へ？上田？」

思つてもない方向から思つてもない話だな。つてか上田つて誰だ？

俺が頭にハテナマークを飛ばしていると、庄司先輩は若干、蔑んだような目をしながら補足説明してくる。

「1年の時、演劇部にいた上田江美。今は生徒会長の」

あつ、あの生徒会長か！というか演劇部にいたのかよ……。道理でなんか見たことあるような気はしてたんだ。話した覚えとかは、ほとんど無いんだがな。

庄司先輩はあくまで俺が思い出す思い出さないは無視して続けた。

「よく頑張つてたし、なんで辞めたかなあ……。まあそれはともかく、俺は言ったからな。先週から毎日呼び出しに來てたしな。」

生徒会長が毎日、呼び出しに來ていたつて果てしなく嫌な予感しかしないじゃないか……。というか毎日來ていたのを知つてる庄司先輩も毎日來ているということだよな。暇なのかな。いや熱い先輩なんだということにしとこう。

俺は生徒会室に向かうとする。

さすがに、事故とはいえ1週間近く、呼び出しをガン無視していた訳で、事と次第に

よつてはタダじゃ済みそうにないしな。そういえば、そもそも生徒会室つてどこだっけ？ 普段、用がないから場所もあり分かっていない。

とりあえずここだっけ？ というところに行くところ「生徒会室」と札がある。ビンゴみただい。

一応、ノックしてみると中から声が聞こえる。演説会で聞いた明るいトーンの女の子の声だ。

促されて入室すると、会長が一人で待っていた。一応、挨拶してみるか……。

「失礼します。文芸部の鈴木です……」

すると、会長は朗らかに笑いながら明るいトーンで話しかける。

「あははは！ 鈴木くんどうしたの？ そんな他人行儀で？」

「え？」

「部活は違うけど部室は同じだったじゃん！……つてそっかー。ほとんど話すこと無かったもんね〜」

会長というからには堅苦しい人かと思ったが、そうではないらしい。あまりのフレンドリーさに呆気にとられる。

「じゃあ初めまして！ 生徒会長の上田江美です！ よろしくお願いします！」

「ど……ど……ど……」

「同期なんだし、そんな緊張しないで！会長はえらいとかそんなは無いから！はい！リラックス！」

緊張というか、あまりにフレンドリー過ぎて、軽く引いている。

まあ話しかけるだけで事案とか言われるより、よっぽど良いんだがな。

ただ相手は生徒会長だし、こんな世間話をするために呼んだ訳じゃないだろう。

「で、会長」

「会長じゃなくてー出来れば名前が良いかな？」

「じゃあ上田。何で文芸部を生徒会室に呼び出したんだ？」

「ああ、その話ね。」

上田はもうちょい雑談をしたくもあつたみたいだが、残念ながら俺がこれ以上、女の子と話すネタがない。上田は特に残念そうな顔をするわけでもなく、明るいトーンのまま話をし始めた。

「じゃあ本題からね。文芸部は廃部対象になりました！」

はい!?!急になんだって!?!

「まあアレよ。今時働き方改革とかどうとかっていう先生方の事情で、活動内容などから部活として実績とかがない部は廃部にしようみたいな流れなの。」

なるほど、モロで大人の事情なんだな。で、その矛先が俺しか部員のいない文芸部に向いたと。確かに上田からしても大して活動していなかったのは知っているだろうし、仕方ないか。

「分かった。いつで廃部なんだ？」

「そうよね!!?到底受け入れら……え？」

「まあ大人の事情には抗えないよね。で、いつなんだ？もしかして今日いまこの時か？」

「時期は来年度末なんだけど……そうじゃなくて！」

「廃部なんだよな？何が言いたいんだ？」

「悔しくないの？一応、一年半やってきたのよね？」

「悔しいっちゃ悔しい気もしなくはないが……」

「そもそも、廃部は上田の意向だろ？そういうえば演説会でも改革がどうか言ってたし……」

先生からすれば、大人の事情も受け入れて言うことを聞く、いい生徒会長を手に入れたもんだな。そんな風にも思ったが、上田は最初の朗らかな笑顔が消えていた。

「はい!!?廃部が意向なわけないでしょ？私はあくまで言われただけで本当は廃部とかそういうネガティブなのは嫌いな！」

どういうことっちゃん？

「つまり先生方の意向は部活は潰したいし、学校行事も減らしたい。で言うことを聞きそうな私を生徒会長にしたの。」

うおう……急に闇だなあ……。

「ただそんな大人の事情で私たちの青春を邪魔されたくないじゃない？だから表向きは言うことを聞くけど本当は戦いたい！そんな大人の事情に流されたくないの！」

なるほどな……。大人の事情に抗いたい気持ちは分からなくもない。上田の人となりが、まだ100パーセント掴めてはいないが、悪い人では無いみたいだしな。

とはいえ、こんな話を打ち明けられたところで何をすればいいのか分からないのもまた事実だ。直接聞いてみるか。

「……で、俺はどうしろと？」

「来年度末までに廃部にならないような実績を作る。」

「なるほどな……。実績なく廃部なら実績を作れと。」

「簡単でしょ？」

上田はそう言いながら元の明るいトーンに戻っていた。

だが、それって言うのは簡単でも実行するのは難しくないか……。

「じゃあ今日は忙しいところ来てくれてありがとう！頑張ってね!!」

「……頑張ってたってどうやって実績を上げるかは考えてくれないのか！」
「……………」

少し間が空いた後、上田はまるでキラキラな星でも出してるかのように
「てへっ☆」

と満面の笑みを向けた。

すべて忘れられそうな素敵な笑顔だった。俺はそんな上田に見送られ生徒会室を後にした。

って待て！よく考えたらめんどくさい部分は俺に丸投げで上田のリクエストを聞いただけじゃないか！

あれ？

俺もしかしてうまくハメられた？

【3話】ダンゴムシ食べたい!

上田からの廃部宣告から1週間、また部活の日がやってきた。

いつも通り、部室で演劇部員たちの挨拶に小声で返しながら隅っこの文芸部活動スペースに向かう。

文化祭前は一応、小説を書いたりもしているが、今は完全にフリーの時期だ。

部室で座って、大会が近い演劇部を眺めて、帰るだけ。ごくまれに演劇部の台本をチエックしたりすることもあるが、ほぼ活動はしていないに等しい。

取り潰しになるのも納得と言えるほどだし、来年度末に廃部なら俺が在校生の間は関係ないじゃないか。

そんな風に思い、演劇部の練習風景を眺めること約20分。

庄司先輩の熱い指導が入る。

「リキ、だいぶ良くなったな!あとナイスフォロー!」

前に庄司先輩は厳しい熱血指導と言ったが、褒めるときはちゃんと褒めている。ここらへんが、やっぱり信頼されるのだろう。

と、そんな風にのんびりしていると、部室のドアが開いた。

反射的に演劇部員が「おはようございます!」と挨拶をするが、入室してきたのは演劇部員ではなく上田だった。

なんで生徒会の会長さんが部室に? 演劇部に復帰か?

「お邪魔しまーす!」

上田は明るく挨拶しながら、俺の元に来る。え? 目的は俺か?

上田は文芸部活動スペースに来て近くのイスに座る。そして普通に俺に話しかけてきた。

「去年と変わってないな。何もしてないでしょ?」

「まあな。否定は出来ない。」

「確かに先輩がいたわけでもないし、何をどうしたらいいか分からない今時の若者みたになるのも分かるわ」

今時の若者なのはお互い様じゃないか。

「で、上田はここに何しに来たんだよ。」

「鈴木くんに会いに来た!」

「はい!?!」

「つていうのは冗談で、文芸部のことよ。」

ほんの一瞬、動揺してしまった。というか上田は案外、お茶目なんだな。生徒会長と

いう堅苦しい肩書きの人間とは思えない。ちよつと不安なところでもあるが。

「きつと『実績上げる』って言われても何をしたらいいか分からないだろうなあって思つて様子を見に来たのよ」

俺の考えはお見通しかよ。

「で、実績をどうやってあげるかの方法は見つかった?」

うげえ……。そうストレートに聞かれると困るな……。俺表情を見て、答えを聞く前から上田はししゃべり出す。

「やつぱり凶星ね……。確かに1人で考えても何も思いつかないだろうし、大人の事情が相手だから覆すのは難しいって気持ちも分かるわ……。」

俺がそこまでやる気じゃないだけなんだがなあ……。上田はとても好意的に解釈してくれているみたいだが。

「もしかしてなんだけど……。鈴木くんは文芸部で1人だし、そこまで力も入れてないし、卒業と同時の廃部なら、それもアリかなーつとかで考えてる?」

前言撤回。すべて見透かされているみたいだ。

「あははーやつぱりね〜。」

割とクズな面がバレたような気もするのだが、上田は朗らかに笑う。ここまでお見通しの上で乗り込んでくるって……。会長としての器はある人間なんだなあ。

「でも、それじゃダメ。前も言ったけど、大人の事情に抗いたいの。だから来たってわけ。私のわがままだから私も協力する。」

確かに廃部に反対なのは俺より上田の方だな。だからそれを行動で示しているというわけか……。

「悪いけど拒否権は無いわよ?」

どうやら逃げ場はないらしい。まあ上田は信用も出来そうだし、そこまで言うなら俺も廃部にならないように出来るだけ頑張ってみるか。

「で、何をしたらいいんだ?」

「ほら〜それ!鈴木くんは文芸部の部長なんだから自分で考えてみなよ!」

「くっ……もつともなことを……」

いきなり言われても難しいな……。

「じゃあ単純に、廃部にならない部活ってどんなだと思う?」

「うーん……まあ部員がいっぱいあれば無くならない?」

「そうよね〜どこか絶対に廃部にしなければいけないってなったら、部員が100人以上いる吹奏楽部を廃部にしようとはならないよね〜。じゃあ文芸部も部員を増やしてみたら?そうね〜30人も集まれば廃部なんて声上がらなくなるわ!」

「30人で……うちの学校、兼部はアリだし幽霊部員でも在籍してればOKか?」

「あのね……一応、仮にも生徒会長に幽霊部員はアリかなんて聞く?」

「…………ごめん。」

「まあ私からOKとは言わないけど、そもそもあと29人も入部届を書いてくれるアテがあるの?」

確かに言われてみれば怪しい。

「それに幽霊部員が明らかになつたら、それをネタに先生たちが廃部に動くと思うわ…………」

確かに、あり得なくはないな……。つまり部員30人なら活動する部員を30人集めろと……。一応、実は演劇部にゴーストライターはいるんだがなあ……。それで1人…………。あと28人とは、まあ無理な相談だ。

「俺、ダンゴムシ食べたい!」

「そうか…………ダンゴムシか…………って、え?今の庄司先輩?」

「あ、庄司さんの代役みたいね」

上田が解説する。どうやら休んだ部員の代わりに庄司先輩が練習に入ってるらしい。

上田も気になって見てしまうようで、結局この場面の練習風景を10分近くずっと見てしまった。

「つい見ちやつたなあ。文芸部のために来てくれたのにすまん。」

「いいわよ。庄司さんの小学生役なんて見れないしさ。今日はいいもの見させてもらったわ。」

俺は少し申し訳なくなったが、上田は笑いながら流す。ついでに話題も流れてしまった。

「さて、私もそろそろ生徒会長の仕事に戻らなきゃ。じゃあ鈴木くん、文芸部の実績作り考えておきなさいよ。私も手伝うからさ。また次の活動日ね。ばいはい！」

まあ当然っちゃ当然だが、やっぱり考えるのは俺の仕事か……。部員30人なんて出来るのか……。？というか次の活動日も上田は来るつもりなのか……。会長になったからって大変だなあ……。

ん？上田は最後に「生徒会長の仕事に戻らなきゃ」って言ったな。ここにきていたのは生徒会長の仕事としてではないって意味か？それとも単なる言葉のあやか？意外と上田は何も考えていないような気がするし、何も考えていないように見えるだけなのかもしれない……。分からないな……。

【4話】ツブヤイター

前回の部活から1週間が経った。また部活の日がやってきた。

しばらくしたら上田がまた来るだろう。それまでにこの1週間で考えたことを整理しておく。

そもそも文芸部の部員を30人というのが無理な相談だ。こんな得体の知れない部に入る人間が30人もいるなんて思えない。

さらに言うと、俺の持論だけかもしれないが、文章を書くということ、それ自体のハードルが高いのだと思う。

こんなこと言うともた全国の真面目な文芸部に申し訳ないが、俺は何かを書くときに、適当に書いている。確かに部活ではあるが、プロになるつもりなんてない俺はゆるーくでいいと思っているのだ。

だが、この状況を知らない人間からすると敷居が高く感じてしまうのかもしれない。

「おはよーいぎいませーす」

そうこう考えをまとめているうちに、上田が挨拶をしながら部室に入ってきた。

なんかもうナチュラルに部室に溶け込んでるな。まあもともと演劇部員だし、何も違

和感がないというのも大きいが。

さて、せつかく来てくれた上田には申し訳ないが、やっぱり部員を大量に増やすことは難しいことを伝える。

「なるほどね……。確かに部の性質的にもたくさん部員を……つてのは難しいね。」

と、肯定してくる上田。これだけでも珍しく部活のことを真面目に考えた甲斐があるね。

コウテイペンギンの赤ちゃんをモチーフにしたキャラクターが流行るのも納得だ。

ただ、上田は会長らしく、そこから一言付け加える。

「ただずつと一人で活動は寂しいんじゃない？ いろんな意味で」

まあ確かに。上田が入部してくれたら面白そうだし、生徒会長パワーも使えそうだが。

「私は入らないわよー。そもそも部活と掛け持ち出来るほど生徒会長は楽じゃないし。」

そりゃあ残念だ。

「ただ、文芸部を何も知らない人には確かに敷居が高く感じるっていうのは当たってるわね。活動自体はゆる〜くなのか、キビキビやるのか……っていうのは鈴木くんの部なんだから鈴木くんが決めたらいけど、外からまったく何も分らないっていうのは『あ、この部面白そう♪』みたいな興味すら持たれにくいと思うのよね……。」

確かに、それは分かっているんだが……。

「今年は無理にしたって、来年、新入生来て欲しいじゃない?」

まあそりゃ、俺だって先輩って呼ばれ頼られたいみたいな願望も0ではない。

「だったらまず文芸部が何をしているか。宣伝していくところからじゃない?」

なるほど。得体が知れないならまず知らしめようということか。

「何をしているか分からせてあげて、それでも部員が集まらなければ、また違う手も考えましょ。それにこれ以外の方法も同時並行でやるわよ!」

「そうだな……。というか、そもそも論だが、うちの部が何やってるかかってどうやって宣伝するんだ?」

「え〜そこから?!もうしようがないなあ……。スマホ貸して」

なんだかんだ言いながら上田は案外、ノリノリである。

俺からスマホを受け取ると、サクサクと何やら作業する。3分ほどでスマホは返ってきた。

「はい!文芸部のツブヤイターアカウントを作ってあげたわよ!」

「お……。おう……。ツブヤイター?」

「え?まさかツブヤイター知らない?」

「一応、それは知っているが……。やったことはないな……」

「今の世の中、SNSを活用しなきゃ。ツブヤイターならユーザーも多いし、これ以上ない宣伝が出来るわよ」

「は、はあ……」

「これからは部活の日は必ずツブヤイターで活動内容をつぶやきなさい！いい？」

「は、はい……」

半ば強制的に了承してしまった。SNSとかくくにやってないし、なんだか難しいな……。

「今日の分はつぶやいといてあげたから、次からはちゃんと自分で考えてね！あと私の連絡先も入れといたから。」

今日の呟きは代わりにしてくれたのか……。それをお手本にやるつきやないな……。後で確認しておこう。

「じゃあ私は生徒会の仕事に戻るからね！それにテストもあるし、しばらく部活は無しだから、テストも頑張るのよ！じゃあ、また次の部活でね！」

上田はそう挨拶して、部室から出て行った。やっぱりここに来てるのは生徒会長としてではなく上田個人として、という意味なのだろうか……。

ん？テスト……？やべえ忘れてた。部活が2週間休みになる引き換えにとんでもない爆弾が飛んできたな……。まあテストこそ範囲も決まってるし、なせばなるでどうに

かするしかないな。

つと帰る前に今日の眩きを確認してみるか。

頼もしい助っ人と来年度の作戦会議！

次の活動は定期テスト後だよ!! (部長 鈴木)

これ……本名出していくスタイルなんだな……。ご丁寧に俺と上田の手と机の紙だけ写ってマジで会議してる感はある。頼もしい助っ人……なのも、まあその通りだな。

これからは、これに続くように眩くのか……。ハードル高いぜ……。

【5話】休憩とか書いてるお城みたいな建物

さて、何週間かぶりに部活の時間がやってきた。

ん？テストの結果？知らんな。気にしたら負けだろ。

とりあえず、何かをツブヤイターに呟くために何かしら活動をしなればならないが……。

そうは思いつつも俺の関心は演劇部の練習へ。

なにやら庄司先輩とうちのゴーストライターという野郎2人が2人して小学生の女の子を演じているようだ。

「こないだ街で先生見たよ」

「あたしも見た見たよなんか男の人と一緒に歩いてた」

「私が見たときは男の人と2人でお城みたいな建物に入っていったよ」

「なんか休憩とか書いてた」

どうやら2人してアドリブが楽しくなっているらしく、中身が中身だけに先生役の女の子がとても困り果てている。

やがて何かを決心したのか飛び出していく。

「あの男とは別れたわよ!!そんなことより柿本さん!今日は三者面談でしょ?おうちの人にプリントは渡した!」

先生役の子はなんだか吹っ切れたように突入し、話題を豪快に変えた。うまく庄司先輩他1名の悪乗りを自然にぶった切りやがった。

「つて鈴木くんはいつまで演劇部の覗き見してるの?」

うわあ!びっくりした!いきなり上田から声をかけられてついビクツとしてしまった。

「ちよつと!?人の顔を見てそれって失礼なんじゃない!」

「あ……ああすまんすまん!つい……つてかいつ来たんだよ?」

「ついさつき。お城みたいなくのくだりあたりで。真面目に練習してたから静かに入ってきて来たやつだ。そしたら案の定、鈴木くんには気付かれなかったわけね……」

上田は、ほんの最初の方はプンプンと怒っていたが、すぐにいつもの柔らかい雰囲気に戻る。

「まあ、仕方ないわね。劇に人を引き込む力があるのは事実だし。それだけ鈴木くんが夢中だったなら彼らも役者冥利つてヤツだろうからね。でも、文芸部の活動に戻るわよ。」

「はいはい……」

「で、ちよつとコレ見て」

上田は俺に何やら新聞を渡してきた。そして一つの記事を指差す。

「これ、中学の時の友達なんだけどね」

そう紹介され記事を読んでみると、別の高校の制服を着た女子が写っている。内容は、何やら当人が書いた作品が何かの賞を取ったということだった。

「この子ね、文芸部なんだって」

「つまり、俺も何か賞を取れと？」

「その通り、よく出来ました♪」

「おいおい冗談は……」

「まあ何かしらの賞、直樹賞とか芥河賞でも取れば、学校も認めてくれるでしょ♪」

「さすがに直樹賞、芥河賞は無いだろ……」

「でもさ、まず文芸部なんだし何かしら書いて、それを知らしめるために、何かしらに応募をするっていうのは大事じゃない？」

「それは一理ある。」

「あと、根本的な話なんだけど活動が週1回は少ないわよね？さすがに休日やりなさいとまでは言わないけど、せめて週3回くらいは活動した方がいいんじゃない？これは何

か用事があるなら無理にとは言わないけど」

特にバイトとかをしているわけでもないから、特段の用事はない。

上田と会えるのが週に3回になるなら、それも面白そうだと思つた俺を誰が責められよう。

「週3回も大丈夫そうね。じゃあそれでいきましよう。これまで通り私が週1回来てあげるから、毎週新しい作品を用意すること。」

「毎週新しい作品を書けと!?!」

「うん! 長編書くなら6週間で終わらせる事ね!」

「案外、キツイこと言つてないか?」

「そう? もう仕方ないなあ……じゃあ誤字脱字のチェックと、どつかしら新聞か何かへの投稿くらいはしてあげるわ。」

結局、上田に押し切られて俺は毎週新しい作品を書くことに同意してしまつた。

というか部活が週3回でも上田が来てくれるのは、週1回だけなのか……。

ちよつと残念……つて俺は一体、何を期待しているんだか。

「じゃ、私はそろそろ生徒会に戻るから。」

と、上田が退席しようとしたところで庄司先輩がやってきて、止める。

「11月〇〇日はヒマか?」

庄司先輩は突然、上田と俺に同時に予定を聞いてきた。その日は数週間後の日曜日、特に予定は無い。

「俺は特に何も……」

「私も何も無いです!」

「じゃあ演劇部の地区大会があるから、観に来てくれ!場所は……」

庄司先輩は断る暇を与えないまま場所と時間を伝えてきた。

「そういえば去年もそうやって演劇部の舞台を観に行ったなあ……。まあ暇だし今年も観に行くか。」

「庄司さん、退部した私にも声かけるって……」

「舞台は観てもらって初めて成り立つからな。退部とか関係ない。」

「観てもらって初めて成り立つか……」

なるほど。文芸部としての俺は書いたらOKというスタンスで来たが、演劇部員だった上田からしたら、書いたものが読まれて初めてOKというスタンスなんだろうな。

だからここまでSNSを活用したりするアピール術を思いついたりするのかもしれない。

結局、庄司先輩から詳しいことを聞いてから上田は去っていった。

そういえば上田はなんで演劇部を辞めたんだろうな……。見た感じわだかまがりがあるとか人間関係が……という風には見えないし。

気にはなるし庄司先輩なら何か知っていそうだが、そこをズケズケと土足で踏み入れるほど俺は野暮じやないつもりだ。

いつか信頼関係が出来てから上田自身から語ってくれることを期待しよう。

それよりも今は突然、上田から1週間で作るよう言われた新作の創作が最優先だ。

【6話】 ショッピングモール

それから毎週、上田が来るのに合わせて短編小説のようなものを用意する日々が続いた。基本的に放課後や休みの日にスマホや何かのメモ帳にネタやら小説を書いて、それを部活の日に部室のパソコンに打ち込んでいく。それが間に合わないときは、手書きの原稿用紙に書いて上田に渡した。上田が来るのは週1回と言ってはいたが、原稿を受け取ると、じっくり読みたいからとそのまま持ち帰り、次の活動日にそれなりの感想を用意して俺に伝えてくれた。実質、上田と会うのが週2回に増えた格好だ。

必ず読んでくれる人がいて、しかも感想も用意してくれるというある種の安心感と謎の責任感から真面目に創作をしてしまう。

部活の日以外も、何かしら書いていたり考えたりしてるから、ある意味で部活が毎日になったような気分だ。

そんな風になって数週間、ある土曜日の晩に上田から連絡が来た。連絡先を交換しても向こうから何もなかったし俺も何もなかったから、こうして連絡を取るの初めてだな。

「明日の演劇部の地区大会は観に行くの？」

おつと……すっかり忘れていたぜ。ここんと珍しく部活が忙しかったからな。明日は暇だ。幸いにも今書いてる新作は割と順調だし1日サボっても大丈夫だろう。

「観に行くつもり」と返信する。すると上田からまた返信が来た。

「せっかくだから演劇部に差し入れを買いたいんだけど、一人で選ぶと不安だから一緒に行かない？」

お……おう……。いや目的もハッキリしてるし、特に深い意味は無いんだろうなあ。上田は、ちゃっかりしてそうだし、俺の役目は荷物持ちだろう。

俺たちは地区大会の会場になっている高校の近くのショッピングモールで朝待ち合わせることとなった。

「おはよう〜ちゃんと来てるわね〜」

と元気そうに上田は現れた。そういえば上田の私服を見るのは初めてだな。

「まあな。で、差し入れて何を買うんだ？」

「それを決めてもらおうと思って鈴木くんを呼んだの♪」

マジか……。上田って意外とノープランなんだな……。まあ、ショッピングモールなら色々選べるし時間的にも見て回る余裕もありそうだ。

「個別包装の方がいいわよね……」「舞台上で疲れるだろうから甘いモノがいいかしら

……」「タケノコの山とキノコの里ってどっちがいいかしら……」

上田は色々なお菓子を真剣に見比べながら選ぶ。

これを見ている限り、少なくとも上田は何か採めたりして演劇部を辞めたというわけでは無さそうだが……。

ただ円満なら辞める理由が無いような気もするし。なかなか謎だ。

むしろこれを題材に何か書きたいくらいだが……。それを上田に見せるわけにはいかないし、そもそも真相を知らないから書けないな。

しばらく悩んでから、レジに行く。買ったのはチョコレートをラングドシャクツキーで挟んだお菓子だ。甘さは遠慮しないタイプを買ってみた。

「甘いもの好きだったらいけど……」

上田のとても小さな独り言はレジ店員の声にかき消された。

ちなみにお会計はワリカンとなった。俺は同じ部室ということでお世話になってるし俺が買うべきと言い、上田は上田で、そもそも自分が言い出したからと言い結果的にはワリカンになった。大した金額じゃないし別に良かったんだけどなあ。

まあ人にはそれぞれ主義主張もあるしな。

彼氏に「他の男から奢られるな！」とか言われてる可能性だって……。

「そういえば上田って、そもそも彼氏いるのか？なんだか急に心かもやつとしてきたぞ。知りたいような知りたくないような……、まあ今はそれを聞けるほどの仲かどうかはまだ怪しいし、それについてはいったん保留とするか。」

地区大会の会場である女子校に着くと上田は迷う事なく、劇場として使われているホールに向かう。ついて行くか。

「迷わないんだな。」

「まあね、去年に何度か来てるし、勝手知ったるなんとやらよ。」

「差し入れはどうするんだ？」

「私たちは一応、部外者でただのお客さんだから、受付に預けちゃうわ。」

「へへ。」

「そう言うと、ホールに入り受付にいた、他校のどっかの学生に差し入れを渡してテキパキと名前を書いてその紙も渡した。」

「慣れてるな。」

「まあね、去年、受付の手伝いとかもしたしね。あ、ちゃんと差出人は鈴木くんと私にしといたから！」

「そりやどうも。ありがとうな」

「お礼を言うのは私の方よ。今日は付き合ってくれてありがとう。」

「どういたしまして。」

「それじゃ、お芝居見ましょ」

「だな」

ちょうど前の高校が終わり、ホールのドアが開く。俺たちはホールに入り適当な席に陣取り観劇させてもらうことにした。

舞台の感想については文句なく面白かった。それに感動もさせてもらった。家族の話やらアンドロイドの話やら、これは舞台を観た人じゃなきや通じないだろうなあ。「広くてすてきな宇宙じゃないか」というその作品は有名な劇団の脚本らしいから、興味があれば観てみて欲しい。

上田に至っては感動して、涙目になっている。

「泣いてない。泣いてないわよ！ほら、せつかくだし他の高校さんも観ていくわよ」

とド下手なごまかし方をしていた。ホントに元演劇部なのか？と言いたくなるが、まあかわいいからなんだってOKだろう。上田はいつも本当に良い表情を見せてくれる。

もし彼氏がいるのだとしたら、ソイツがうらやましいレベルだ。

ひとしきり、観劇が終わると俺たちは部外者なのでさっさと帰ることにした。上田は自分の高校の成績が気になるし評論も聞きたそうにはしていたが、やがて自分から「まあもう私は部外者か……鈴木くん帰りましょ」と言ってきた。

なんというかここまで、深入りしたがったり実際に首を突っ込む姿を見ていると本当になんかで退部したんだらうなあ……。その理由を俺は上田の口から聞ける日が来るのだろうか……。

帰り道も舞台の感想で盛り上がったが、上田本人の話題になることなく、その日は解散となった。

【7話】煩惱

演劇部の舞台を観に行った以外、特段変わったこともないまま、年の瀬も近づいてきた。

そういえば、俺が色々書いて上田に提出した作品たちはいったいどこに消えたのだろうか。何週間かの間に文化祭で無料配布した同人誌くらいの量にはなるはずだが……人知れずどっかに応募とか投稿をしてくれてるのかもしれないな。

今日で期末テストも終わり、いよいよクリスマス……うちの高校ではクリスマスフェスティバルという名で文化部がかわりばんこに毎日何かやるイベントがある。具体的には冬休み前の最後の一週間の放課後に軽音楽部、演劇部、ギター部、合唱部、吹奏楽部と日替わりで何かしら発表や演奏をしているのだ。文化祭は当番ともあつて全部見ることが出来ない代わりにこのクリスマスフェスティバルはじっくり楽しませてもらうつもりだ。

さて、そんな風に今年もラストスパート、期末テストも終わった今日はゆっくり羽を伸ばしたかったが、上田から連絡が入りそうもいかなかった。

「今日は部活してくださいー！テストもあつたし今週は原稿も出来てなくても大丈夫だから

ら」

さて、上田は何を考えているのだろう。本命はクリスマスフェスティバルに文芸部も参加しろ！のような気がするな。生徒会長の力を使えばクリスマスフェスティバルにもう一つ、ねじ込むことも出来そうな気がするし。

あ、そうか……。そういえば、もうすぐクリスマスなんだなあ。

クリスマスマスの予定を聞かれる……。なんてことは無いだろうか。俺はクリスマスはヒマしてるんだがな。向こうは暇とは限らないし難しいな……。

そんな風に考えていると、もはやいつもの通りに上田が部室にやってきた。そして挨拶もそこそこに何やら冊子を渡してきた。

「じゃじゃーん！出来ました！」

上田が笑顔で渡す、その冊子には俺が文化祭終わりから書いた短編たちをいい感じに並び替え、上田が良いと思った作品を選び抜きしたものだった。

「ほら？すいいでしょ？」

と上田は褒めて欲しそうに言ってくる。俺としても作ったモノが形になると嬉しい。

「まさか、こんなにいい形に仕上げてくれるなんて嬉しいなくありがとう」

「喜んでもらえて何より♪よし製本するわよ！」

はい？製本？俺の手元にあるのはもう製本された完成品なんじゃないのか？

「クリスマスフェスティバルでこの本を配布するの！」

「え?!マジか!？」

「他の文化部が頑張る良い機会なんだから、一緒に乗っちゃいませよ！」

クリスマスマスの件、ではなくクリスマスフェスティバルの件だったのは、ほんの少しだけ残念な気がしたが、まあそれはいい。

というかここまですてもらってる俺が何かお礼をすべきかもしれないな……。

「さあ行くわよ！」

って、どこに行くんだ？

「生徒会室に。あつ職員室から台車借りてきて！」

「お、おう分かった……」

台車？いったい何が待っているのか？そういうえば煩惱にかき消されたが、製本するって言ってたな。まさか……。

「とりあえず印刷はしといたから、まずは部室に運びませよ」

生徒会室で俺は大量の紙を台車に積む作業をしていた。

上田は俺が色々と書いた原稿から作られた同人誌を、どうやったのかは知らないが大

量に印刷しており本気で製本すれば配布できる状態にしてあった。

しかもご丁寧に適当な空き箱を用意し、そこに入れてあるため汚れたりもしていない綺麗な状態だ。

俺はその紙束を台車に積みながらも不思議な顔をしていたのだろう。上田が補足説明し始めた。

「気にしないで。文芸部の余った部費を使わせてもらったから!」

え?部費?なんだそりゃ?

「ほら、学校からクラブには部費が出てるでしょ?まだ今年の分がいっぱい余ってたから紙代として使わせてもらったわ。あ……ごめんね、毎年余らせてたから……」

「いや……勝手に使ったどうこうより、そんなお金が出てたというのが初耳なんだが……」

「え!?!……言われてみれば文芸部が出来てから部費って1円も使ってたもんね……」

上田は、ちよつと暗い表情になる。まずい、気を遣わせちゃったかな。

「いや、俺こそ何も知らなくて逆に申し訳ない。むしろ今年も部費を使わなければもつたいたいところだった。それに文化祭以外で何かをするっていう発想が俺には無かつたし、本当にありがとう。」

「ちよつ……なんか、自分から欲しがつといてアレだけどちよつと照れるね。ほら！運ぶ前に写真撮ってツブヤイターにアップしなさい！クリスマスマスフェスティバルで配るよ！つてアピールして存在感を見せるのよ！」

「はい、了解。」

俺は言われたとおりに、ネットに呟く。未だにSNSは慣れないなあ……こうしてマネジメントしてくれる人がいてありがたい限りだ。

部屋に戻ると上田は先回りして、ドデカいホッチキスを持って待っていてくれた。上田を待たせるといふシチュエーションはなんか新鮮だ。

「重そうね。はい、これ」

笑いながら、そのホッチキスを俺に渡す。

「漫研から借りてきたから。終わったらちやんと漫研に返しに行つてね！」

少なくとも今日1日では終わらないだろうよ。

「じゃあ私は生徒会に戻るから！頑張つてね！」

え？いつものように上田はこれで退室か？

まあ確かに文芸部の部員は俺一人なんだが……

ほんの一瞬、ある種の寂しさからそんな感想が出たが、よく考えれば部外者がここまですべて準備をしてくれたことに感謝すべきだな……。

そのうち何かお礼をしなければならぬが、はてさて……。

今はとりあえずクリスマスフェスティバルに間に合わせるように製本作業が先だな。

・
・
・

製本作業を始めて数時間。演劇部の練習を眺めながら製本作業をしていると思ったより、はかどつたが、それでもまだまだ終わらない。

つていうか文化祭の時もこんなにはならなかったはずだが、いったい何部印刷したんだ？

やがて下校時間が近づいてきた。次はまた次の活動日にしようかな……。そんな風に思っていると、上田がやってきた。1日で2回目の来訪はなかなか珍しい気がする。もしかしたら初めてかもしれない。

「おくすごい！もうこんなに出来たんだ〜」

まあ期末テスト最終日だったから活動時間は長かったしな。

「生徒会の仕事も終わったし、あの量だから手伝いに来たんだけど、あまり心配は無さそうね……。もう、帰る？」

通常の時間で活動を切り上げて帰るか、上田が手伝ってくれるという誘いに乗るべきか。まあ答えは決まってるよな。

「よし、残ろう！」

「OK！下校時間を過ぎる届出はしといたから、あと1時間がんばるわよ〜！」
と上田は張り切っている。延長届も出してくれているなんて、気が利くな。

「上田、残るんか〜？」

演劇部の方から帰り支度を整えた庄司先輩が声をかけてきた。

「はい！1時間くらい残りまーす！」

「じゃあ、部室の鍵任せていいか？」

「分かりました〜！」

今にも帰りますという雰囲気、庄司先輩から上田は部室の鍵を受け取り、演劇部を送る。

そういえば俺、部室の戸締まりとかしたことないな。どうすりゃいいんだろ。

「戸締まりは後で教えてあげるから、まずは製本作業を進めましょ」

やけに機嫌がいい上田はというと早速、作業に取りかかり始めた。

まあ考えてみれば、上田の機嫌はいつもいい気もするんだがな。

ふわつとした笑顔が多く、ある意味では掴みにくいような気がする。

ただ大人の事情に刃向かいたいといっていたときの目は本気そのものだったし、感情自体は豊かでとても営業スマイルだとは思えないのだが。

「どうしたの?」

考え事をしていたら声をかけられる。さすがに「上田のことを考えていた」なんて気持ち悪いことは言えないので、真面目に部活の話題をする。

「同人誌、めっちゃ刷ったなあって思ってたな。これを全部配りきれるかなあ?と」

「え? ああこれ? 全部は配らないわよ?」

「はい? どういうこと?」

「来年度、新入生が入ってきて部活の見学に来るとするでしょ? でも作品なんてその場で作るもんでも無いじゃない?」

「まあ……」

「だから、こんなん作ってます! っていう手土産にするためにたくさん刷ったのよ。」

「なるほど……そこまで先のことは思いつかなかったな……」

「あとはどうしても余ったら来年の文化祭で配るって手もあるしね。部費は使い切らないともったいないから、ね」

なんで本物の文芸部員より、よく気付くんだよ色んな事に……。

「ああうん! これまでがどうかそんな話をしたいわげじゃないの! 誰も教えてくれなきゃ普通は気付かないし、私も生徒会長になって色んな資料読んで初めて知っただけよ! だから気にしないで!」

俺がどんな顔をしていたのか分からないが、すかさずフォローをし始める。

「大丈夫大丈夫。事実、何もやってなかったからな。」

「それも、なんか『そっかく』って流しにくいわね……。まあ見てきたとおりなんだけど」
上田はそう言いながら笑う。こう軽いノリで話せるってなんかいいな。ずっと部員が俺一人だったことに初めて寂しさのようなものを感じた。

「はいはい。ちやつちやと作つちやいませよ。延長しても1時間しか残れないんだし」

「ういっす。」

ここには上田と俺しかいない。何も話さないのもアレなのでちよつと気になっていることを聞いてみるか。

「なあ上田ーハイ質問！」

「ん？何、鈴木くん？」

「なんでここまで文芸部にかまってくれるんだ？」

「あれ？もしかしてありがた迷惑だったりしたかな？過干渉ってやつだった？」

「いやいや、ありがたいのはもちろんありがたいんだが、なんか色々してもらえばなしで申し訳ないような気がしてな。」

「あ〜……うん、それは生徒会長の勤めだからさ〜。」

「その割にはよく『生徒会の仕事に戻る』って言ってるよな」

「つ……意外に鋭いところをつくわね。」

「答えたくなかったら答えなくてもいいが……」

「じゃあ答えない。で♪」

上田は嘘をついたりするのは苦手みたいだな。割となんでも素直に受け答えをしてくれる。

言いたくないとスツパリ言われたのは多少凹むが、まあ誰しも踏み込まれたくない部分はあるだろうし仕方ないかな。

「もちろん、文芸部を残して大人の事情に打ち勝ちたいっていうのはあるのよ。前も言ったと思うけど。」

ただ、それ以外にも文芸部に目をかける理由があるということか。

「後はまあ……そのうちね」

そのうち何かネタバラシされるというのか……。

「それよりさ、私ね、よく『顔に出てる』とか『嘘がつけないよね』とかって言われるんだけどそんなに分かりやすいかな?」

「……ああだいな。」

「ええ!?鈴木くんもそう思ってたの!?!」

「今さっきもそれは思った」

「うーん……やっぱりそういうのって直さなきゃいけないのかなあ……」

「それはいいんじゃないかな？」

「ホント!？」

「裏表はない方が好かれると思うぞ。」

「そっか〜」

落ち込んだと思ったら、すぐに明るい表情に戻る。なかなかに見えていて楽しい。上田は今度は何かひらめいたかのような表情をして話しかけてくる。

「でも鈴木くんが書いた作品には裏表ある子が出てくるよね？鈴木くんの好みの女の子はあーゆーのなの!？」

ぶっ?!いきなりなんてことを言い出すんだ!?!いや待て。ここは落ち着いて釈明だ。

「あれは確かに裏はあるけど隠しきれず表に出てきてるだろ!?!だから言うほどの裏表はないんだよ!？」

「へーじゃあ裏表ない子の方が好きなんだ?？」

「だから……なんて言ったらいいかなあ。人間だから好き嫌い合う合わないはあるし、悪いことを考えたり思いつくこともあるだろ。それを包み隠して……というよりは、そういう面があってもある程度は見せてくれている方が好きって話であって」

「つい、何やら訳の分からないことを熱弁してしまう。それを見た上田はやっぱり笑顔だ。」

「鈴木くん、面白いね。そっかー……悪い面があつてもいいのわ……」

「人間だしな。犯罪的な悪いことはダメだが、確か好き嫌いとかは仕方ないと思うぜ。」

「ふーん……鈴木くんが好きな人もそんな感じ?」

「好きな人はいねえよ。」

急になんてストレート投げてきやがるんだ。

「ふーん……じゃあ気になつてる人は?」

「それ、さっきの設問とどう違うんだよ……」

「あはっ☆」

強いて言うならお前だよ。とは流石に言えるわけもない。確かに気にはなるが、それは文芸部としてだ。うん。上田は俺の微妙な顔をどう読み取ったのか分からないが話を続けた。

「私はねー……気になつてる人はいるよ」

「!？」

「はーい、今日のサービスタイムはおしまーい☆」

え？ちよつと待て頭が追いつかん。

「しゃべっていると時間過ぎてすぐ過ぎるね。ほら下校時間だよ。戸締まりの方法を教えるからついて来て」

そう言つて上田は鍵を持って立ち上がり、事務的に俺に戸締まりの方法や鍵の返却先などを教えてくれた。が、半分くらいしか覚えていない。最後の発言が気になつて仕方ない。

上田は気になつてる人がいる……のか。

【8話】ごめんね

「なんだって!?メ□スはキチ「ぴー」なのか!？」

「はい!メ□スは走らずに家でぐーたら寝ております!」

「おのれえ……!」

俺は視聴覚室で今、クリスマスフェスティバルの演劇部公演を観ている。

大会の時、裏方だった庄司先輩は今回は役者らしく、練習の時に見たような悪乗りを全開している。

にしても、このメ□スは確かに走らないし、親友の処刑が迫る中でグータラ寝ているし自主規制を入れているとはいえ、キチ「ぴー」というのは色々とまずいんじゃないか。

そうは思ったが校内公演であり、なにより生徒会長にも大ウケなどところを見るに、問題なさそうだ。

庄司先輩もいつも部活で指導している時より演じている時の方が、イキイキしているように見える。

さて、文芸部の本番は演劇部の公演が終わってからだ。

あらかじめ、同人誌を用意し机も設置済み。公演が終わったタイミングで、外に出て声をかけながら配る。

演劇部の舞台は無事に終わりカーテンコールとなった。

俺はこっそり先に退室し、視聴覚室前で同人誌を配布する準備をする。実は昨日、今配る用の在庫は半分くらい出たんだよな。これはもう、今日で配り終わるかもしれない。

「どうもー文芸部です。同人誌の無料配布やってます。」

視聴覚室から出てくる人たちに声をかけていくが、なんと昨日と比べて今日はあまり皆、興味を示さない。なんだよ、演劇部のお客さんはノリが悪いなあと思いかけて気付く。昨日と同じお客さんだ。そりゃ同じ冊子を2冊も3冊も要らないよな……。

結局、今日はほとんど受け取られないまま終わってしまった。

「お疲れ様。ごめんね、はい差し入れ」

昨日との落差に落ち込む俺に缶ジュースを持った上田が現れた。

「ありがとう。いくらだ？」

「いいわよ。私のおごり」

「いや、悪いって」

「受け取って。」

何故だか妙に気を遣う上田から缶ジュースを受け取る。ジュース代は受け取ってくれないようだ。

「ごめんね。先に言つといた方が良かったわよね？」

上田の謎の謝罪。

「今日は同人誌があまり受け取ってもらえなかったでしょ？」

「ああ……その件か。」

「2日目以降は同じ人が観に来るから、こうなることは分かってたんだけど、うっかり言い忘れてた。ごめん。」

「ん？ああ……なんだそんなことか。」

俺はてつきりこの深刻ムードだから『昨日は私が用意したサクラだった』とでも言うてくるのかと……。

「って私は神経に気にしたのに『そんなこと』!？」

「だって、顔見てりや昨日と同じメンツなのは分かるし、深刻ムードだからもつと何か

あつたのかと……」

「むう……心配して損した」

上田はちよつとだけ怒りながらも内心は安心したような顔をする。

「ごめんごめん！お詫びにジュースおごるからさ」

「ほんと!?じゃあ自販機行きましよ」

すぐに機嫌を直した上田に俺はさつきのお返しで缶ジュースを買うことにした。

さて、この後も苦戦は続いたが、最終日でありビックイイベントの吹奏楽部の演奏会のタイミングで配る作戦は功を奏した。

他の部活が校内行事だが、この吹奏楽部だけは、ご近所住民や保護者を巻き込んだビックイイベントだけに、うまいことこれまで手に取らなかつた人たちまで行き渡らせた。

吹奏楽部よ、勝手に俺の部活の土台にしてすまない。

うちの高校が志望校らしき中学生に渡せし、吹奏楽部に行く新生を1人でも横取りできたらなあなんて邪な考えをしてみました。

これまで無気力な部活だったが、本腰入れて活動していると何故かマジになっている自分がある。結果に一喜一憂することもあるが、それを含めて楽しい。

この楽しさを教えてくれたのは、紛れもなく上田だ。今日で年内の学校は終わり。

明日から冬休みだし、冬休み中の部活は無い。年内、最後か……。上田に礼の一つでもしときたいんだが……。

同人誌を入場前の人たちに配り終え、演奏会が始まり、俺もホールに入るが、上田はいない。これまでクリスマススフェスティバルの公演や演奏中は必ずいたのに、こんな時に限ってなんでいないんだよ。

と、思ったが先週の会話を思い出す。「気になってる人がいる」というあの話。終業式の今日は折しもクリスマススイブだ。つまりはそういうことなのか……。今、上田は誰かと……。

だからどうしたのかと問われれば、どうもしないんだけどな。

確かに俺は上田を気にしてはいるが、それは文芸部としてだ。

後は、なんで演劇部やめたの？とかそういう、ただの下世話な好奇心程度だ。それ以上何かなんて持ち合わせてはいない。うん、そうなんだ。

結局、この日に上田を見つけることは出来ず、わざわざクリスマスに邪魔をするのもいけないと思い、数日後にSNSを使って上田に今年のお礼メッセージを送った。上田からの返事はいつものように「私のわがままに文芸部を巻き込んでゴメン」という内容だった。

確かに巻き込まれたのは事実だが、そうでなきや部活に精を出したり、上田とこんな

に話したりすることもなった、と考えると逆に巻き込んでくれてありがとうなんだよなあ。

上田が、そんな俺の気持ちを分かっているのか、俺が気を遣っていると思われるのかは分からないが……。

ちなみに終業式兼クリスマススイブのあの日は生徒会の仕事として、学校外から来た来客の案内のため、高校の最寄り駅まで送り出されていたらしい。校内で道理で見かけなかったわけだ。

さらに夕方はそのまま生徒会の役員で忘年会に行っていたそうだ。堅いイメージのある生徒会もそんなことをやるんだなあ、と、ある意味でとても驚いた。

と同時にクリスマス話から、前の話の続きでも引き出せるかと思っただが、それはなかった。ホントにあの時は謎のリップサービスだったな……。それを俺に言ったのは、何も考えていなかったただけなのか？あるいは……、

ってこれじゃ俺が自意識過剰なだけだな。はいはい忘れた忘れた。年の瀬に何考えてるんだろなあ俺は……。

【9話】ハッターリーポッター

新年だ。気付いたら年が明けた。

まあお正月なんでお正月らしく家でぐーたらさせてもらった。学校も休みだし最強だな。

そうは思いつつ、本気で何もしていないタイミングは何故か寂しさを感じる。贅沢慣れかな。ああ恐ろしや。

ということ、気分転換も兼ねて初詣に行くことにした。家の近所の神社ではなく、少しだけ電車に乗って、有名な神社へ行く。人混みは好きじゃないが、大勢の人で賑わっている場所の方が気は紛れると思っただからだ。

神社の最寄り駅に着くとそこから神社までは大混雑だが、片側通行にするなどの対策は行われており、人の波におされて、流されるがままに神社まで向かっていく。感覚としては向かうと言うより運ばれるの方が、しつくり来るんだが。

「お、鈴木」

流されて神社に向かっていけるとそんな声が聞こえて立ち止まる。帰る客の波の中から声の主が姿を現した。庄司先輩だ。珍しい人と会うなあ。

「あけましておめでとうございませう。」

「あけましておめでとうございませう。」

いつもフランクな庄司先輩だが、新年一発目の挨拶だけはとても丁寧だ。さらに庄司先輩だけでなく、演劇部員たちもいつばいい。

「あけましておめでとうございませう。今年もよろしく願ひします。」

「あけましておめでとうございませう。こちらこそ今年もよろしく願ひします。」

礼儀正しい演劇部員たちが挨拶してくるので俺も礼儀正しく挨拶を返す。そして

「鈴木くんも初詣？あけましておめでとうー今年もよろしくね！」

上田もそこにはいた。

「あけましておめでとうございませう。今年もよろしく願ひします。」

俺も文言こそ変わらないが、さっきの演劇部員たちの時と違い軽い言い方で挨拶する。

「これから初詣なんだ？私たちはこれからカラオケなの。じゃあまた学校始まつたらねえ。」

「おう。じゃまた学校始まつたらねえ。」

人混みの波の中で長時間立ち止まる訳にもいかず、これだけの挨拶で俺たちは別れる。

演劇部 with 上田でカラオケか。楽しそうだな。というか元は同じ部活とはいえ、ホント仲良いなあ……と、正直うらやましい。マジでなんで辞めたんだよ。

結局、その後は誰かに会うこともなく初詣を終わらせた。演劇部とは同じ部室だしカラオケ乱入も考えたが、よそう。俺は同じ部室なだけの部外者だからな。

結局、冬休みはそれ以外に特にこれと言うこともなく始業式の日を迎えた。この日は部活もなく終了。そして翌日、新年初部活の日を迎えた。いつもは上田の来ない曜日だったが、今日はやってきた。

「改めて、あけましておめでとうございます。今年もよろしくね♪」

そんな月並みな挨拶を交わす。ちなみに演劇部は何か仕込んでるらしく、しばらく部室ではないところで活動するらしい。

「また来週から週一回、原稿もらうから頑張つてね！」

そういえばテスト前までそんなことしていたなあ。ほんの1ヶ月前なのに、なんだか既に懐かしい気持ちになる。

「それと前に長編なら6週以内って言ったけど、あれはクリスマスフェスティバルに合わせるためだから、もうどんだけ長編でも良いわよ？ 私が最後まで読みたいから卒業までに終わらせては欲しいけど。」

お世辞なのか事実なのかは別として読みたいと言ってくれるのは純粋に嬉しいな。

「だからその気ならハッターリーポッター並みの長編もどんと来いだよ！」

それは俺ができる気しないな。

「じゃあ今年も頑張ろうね！ いざ廃部阻止！」

最初は乗り気じゃなかったが、上田のこの笑顔を見てると裏切りたくはないような気持ちになる。俺って単純だな……。

上田が退室し、演劇部もない。少し寂しい。ハッターリーポッター並みのモノは書けないにしても、数週間連続モノくらいは書きたいかなあと構想を練る。

ただ気持ちとしては一番最初の読者である上田の好みに合わせたものにチャレンジしてみたいというような思いがある。

とはいえ、何を書いても、まともかつ肯定的な感想をくれるものだから、上田がどんな作品を読んでみたいのががさっぱり分からん。

確かに俺の部活だし、俺が書きたいから書くというのが一番だと言われれば、その通りなんだが……廃部阻止の件といい、部活動の内容といい俺というより上田が主導権を

握っているような気がするんだよなあ。生徒会長をやつてくるくらいだし、上田には人を束ねたり動かしたりする才があるのかもしいないが。ただ、そうして上田が主導権を握ったことは確実にいい方に進んでいる気がする。

それに結局、上田には世話になりっぱなしだし、それのお礼もしなければならぬと思いつつ出来ていないな……。

そういうえば、上田が言っていた気になつて人つて誰なんだろう。あの会話の流れだと、気になるのは恋愛的な意味だよな……多分。上田の交友関係は広いからなあ……上田のクラスも俺はよく知らんし、生徒会関係も分からん。

演劇部関係も他校まで知つてる奴はいそうだし、俺がいる文芸部のような弱小部活で他の部も廃部危機とか言つて首を突つ込んでるかもしれない。

ただ俺のところに来るのは生徒会長としてではなく個人としても言っているし、まさか俺……？つてそれはさすがに自惚れすぎだな。

……いかん、小説を書くのには必要ないことばかり考えてしまう。逆転して考えよう。このモヤモヤ感を利用して恋愛小説を書いてしまおう。

俺はメチャクチャなことを考えながら、メモ帳に登場人物やストーリーを考えて書いていく。これを小説にする……つて恥ずかしいな。ただ多少の自己犠牲を使えば更な

る情報は引き出せるかもしれないし、何より俺が書くのはフィクションだから。割り切ってしまう。これまでと違う系統の小説だが、上田はどんな顔をするか楽しみだ。

俺が一人勝手に恥ずかしい思いをしながら書いた恋愛小説は上田には、いつものように好評だった。

そういつものように、だ。

つまり狙ったような効果は得られなかった。ただ書き始めると書いてるのは楽しいため、やっぱり挑戦は楽しいなあと思う。

上田は、ここまでなることを想定して演技をして俺を釣ったのか?……いやいや、さすがにあり得ないか。なんとなく上田が超人のような気がするときがたまにある。

さてさて、そんな風に思っているながら数週間が経った。

今日の部活は上田が来る日のはず……なんだが来ない。クラスが違うから分からないが、もしかして風邪でもひいて休んでいるのか?

そうも思ったがカレンダーを見て、分かった。

そう今日は2月13日だ。

確かに単純な体調不良等の可能性もあるが、日付から考えると明日の準備でもしてる

んじゃないかと考えた方が自然だと俺は思いたい。

というか、上田が体調不良で苦しんでいる姿を見たくないっていう方が強いのだが。

嘘かホントかは分からんが、あんなことを言っていた訳だし、上田にとつて明日は大事な日なのかもしれない。今日、文芸部に来ないのは仕方ない。とりあえず平常通りに部活をして、下校時間となる。

そういえば上田には感謝していて、何かお礼をしたいと思いつても、何もできていないことを思い出す。年末から、そのことを考えていた。

明日、2月14日はイベントデーだ。ちようどいい機会だな。

俺は下校途中にコンビニに寄る。棚には色々なチョコレートが陳列されていて、どれも美味しそうだ。

さすがに手作りするだけの能力は無いし、そもそもなんとも思っていない(はずの)男子から、そんなのを貰っても上田は困惑するだろう。百貨店の高級品だと気を遣わせるかもしれない。そこで俺はコンビニの中の高め商品をプレゼントすることにした。

色々見て回るとゴディババアのチョコプレートを発見。これなら高級感もあるし喜んでもらえるんじゃないかな。

コンビニなので包装はなく、店員はそのままコンビニ袋に入れる。これでいい。飾り

気は無いし、余計な気は遣わせないはずだ。

コンビニを出てからは明日、このゴディババアをどうやって渡すか考える。

クラスに乗り込むか？ いや、教室はあの期待しながらも期待していない風を装う空気でもこも気まずいだろうし。一応、人目につかない場所の方がいいか？ 下駄箱に入れる……のは古典的過ぎるな。

放課後渡しに行くか……。上田なら生徒会室にいるだろうし。

それと聞いた話だが、生徒会は上田以外はまったくやる気がないらしい。

これも大人の事情で、どうやら生徒会がやる気で色々やると教師の仕事も増えるから、あまりろくでもなさそうで何もしなさそうな生徒ばかりを担いで生徒会役員にしたと上田から聞いた。

じゃあ、そこで会長だけは何故、やる気のある上田なのかというところの無気力生徒会でも束ねて最低限必要な活動をしてくれて、なおかつ教師の言うことを素直に聞いてくれそうだからだということらしい。闇が深いな。

そういうわけで、生徒会として必ず何かが必要なタイミング以外は生徒会室には上田しかないということらしい。

つまり放課後の生徒会室なら上田しかないはずだし、日頃の感謝だけを伝えてゴディババアのチョコレートを渡し帰る。うん、一番いい作戦だ。

まあ生徒会室に上田すらいなかったら後日にすればよい。俺が買ってきたのは市販のチョコレートだ。感謝を伝えたいのが一番の目標だから、2月14日に必ずしもこだわる必要は無い。

それならそもそも2月14日の上田は個人的な用事で忙しいかもしれないし、最初から後日に渡そうかな……。

いや先延ばしにすると結局、恥ずかしくなったりして賞味期限が切れたりして渡せなくなってしまう。14日か遅くとも15日には渡そう。

メッセージカードを用意して、簡潔に……

いつもありがとう。これからもよろしく。

鈴木善治

これでヨシ。これならなんも深読みされることも無いだろうし。あとは明日だな。

翌日、2月14日バレンタインデーを迎えたが、実際問題は特に何事も無い平日だ。下駄箱に何か仕込まれていることも無ければ、誰かが休み時間に尋ねてくることも無かった。当然と言えば当然だがな。

上田の姿を見ることも無かった。まあ上田と俺はクラスも離れているし、放課後以外は見かけることもほとんど無いので、いつも通りと言えはいつも通りだ。ゴディババアのチョコレートはちゃんと持っている。

家に忘れるなどという古典的なボケはしなかった俺を褒めてくれ。

そして放課後がやってきた。

【10話】なんとか接点を増やそうと…

放課後は早速、生徒会室に……行くと、さすがにがつつきすぎだな。

とりあえず今日は活動こそ無いものの部室に行く。

演劇部はどこかに旅立ったまま帰ってこない。まだ校外活動が続いているみたいだ。俺以外は誰もいない部室で20分ほど、いつもやらない掃除をして小綺麗にする。

さて……そろそろ生徒会室に行くか。

生徒会室の前で深呼吸。そこまで緊張する話ではないし、なんなら昨日、上田が受け取らなかつた原稿も持っているから、それを渡しに来た口実もある。我ながら作戦の完成度は高いはずだ。

え？コソコソする意味がないんじゃないかって？

いやいや、日が日だけに関係ない人間にあらぬ誤解をされるかもしれないからな。感謝を相手に伝えるはずが迷惑をかけてしまうというのは避けたいところだ。

なんて考えていると、生徒会室に着いた。

中から上田の声は聞こえるが、会話というよりは独り言みたいだ。他には誰もいる気配がない。

盗み聞きは趣味じゃないし、さつきと渡すもん渡して帰ることにするか。とりあえずノックしてみる。上田から返事はなく、独り言が続いてる。

もう一度、ノックした。が、やはりスルー。独り言が続く。思い切つて突入してみる。もちろん挨拶もする。

「こんにちはー失礼しまーす」

俺の挨拶をスルーして上田は独り言を続ける。まさか俺が来たことに気づいてないのか？さすがに同室ともなると独り言は嫌でも耳に入ってくる。

「はああー結局、義理だと思われちゃったなあー……あそこで『違うんです』って言えたらなあ……」

あら……なんだかかなり困ったような顔をしているなあ。というかこんな独り言つて、もしかして俺に気づいていない？

上田の独り言はさらに続く。

「言えたら苦労しないよね……いつも告白しようとして、できないでいるし今さら逆に無理よねえ……はああー……」

そろそろ俺の存在にも気づいてもらいたい。会話に入り込んでみるかな。

「渡せたなら、相手に多少なり意識させられたんじゃないか？」

「んーそう思いたいけど、これまでも色々やつてきたつもりなんだけど、あんまり響いてないみたいなのよね……」

「強引にでも意識させるには、いつそ告白するしかないのか……」

「そうなんだけど、それが出来れば苦労しないわよ……」

「まあそうだよな……。つていうかそもそも誰なんだよ。」

「庄司さん……んー庄司さんはどう思ってるのかな……」

「確かに庄司先輩って、なんとなし分からんなあ……」

「鈴木くん……」

「ん？なんだ？」

急に上田のトーンが低くなった。

「いつからいた？」

「え？『義理だと思われた』のあたりから？」

「うっ……」

「一応、2回もノックしたし入ってから挨拶したぞ……」

「……」。

上田がみるみる青ざめていく。なんか見たことない表情だな。このままここに

のは良くないかな……。さつきと用を済ませて帰るとするか。

「じゃ俺はハッピーバレンタインつてことでチョコレートと、渡せなかった昨日の分の原稿を置いて帰るから。」

「待ちなさい……。」

そそくさと帰ろうとしたところ止められてしまう。マジかよ……。

「ゴダイババアのチョコじゃん。ありがとう。」

「どういたしまして……じゃ」

「そうじゃなくて聞いたわよね？」

「……何を？」

「さっきの私の独り言」

「……はい聞きました。」

するとまた上田は沈黙。俺も沈黙。どうしたらいいか俺も分からんからな。

分かったのはただ一つ。上田のいう気になる人が庄司先輩だったということだけだ。

「はあああー」

クソでか溜め息をつく上田。一応、俺は上田の味方になるしかないか……。

「ねえ、どうしたらいいかな？」

上田は、おおぎっぱな質問を投げってくる。

「わかんねえよ……。というかもしかしてアレか？文芸部によく顔を出してたのって……」

「庄司さんとなんとか接点を増やそうと……」

マジかよ。健気過ぎるだろ。自分のことならイチコロにされていただろうな。

「あ、もちろん文芸部を廃部にはしたくないっていうのに嘘はないよ？」

そりゃそうだろうけども……。俺の心境は複雑だ。

「鈴木くんごめんね。変なこと聞かせちゃって」

そこをお詫びされても……。俺が答えに困る。

「ゴディババアは本当にありがたく受け取っとくから。ありがとう！あと出来れば今日のこととは内緒にしてね！いつかは……。自分で決着をつけられると思うから」

俺は生返事だけして帰っても良かったはずだ。だが、そうはできなかった。

「いつかは……。ってもう庄司先輩の卒業まで半月しか残ってないぞ。さらに言うと、もう3年生の先輩が登校するのは卒業式とその前日だけだ。」

論してみるが、俺としてもこの後、どう転んでほしいか分からん。なんともデリケートな問題に直面しちゃったなあ……。俺の話聞いてどう思ったか知らんが、上田は何

かを決意したらしく話し出した。

「決めた！卒業式の日に告白する！それでこの気持ちとも決着をつける！」

「その決断、なんで俺に聞かせたんだよ……」

「誰かに言ったら、実現出来そうな気がして」

有言実行の精神か……。上田らしいと言えば上田らしい気がするな。

「鈴木くんごめんね！帰るところだったのよね？」

「あ？ああそうだった……。」

「じゃまたね！お疲れ〜」

それ以上の深い話をしたりしないまま、流されるように俺は帰宅することとなった。

そうか……。上田は庄司先輩が好きで卒業式の日に告白するのか。俺はその背中を押したような形になるのかな……。

【11話】ヒトカラ

寝れん。

何故だか分からんが眠くならない。

……なんてこつた。

上田が俺のことを好きなんじゃなくて、俺が上田のことを好きだったという話じゃないか……。

結局、睡眠不足が良い意味に作用し2月末の期末テスト勉強は捗った。逆に勉強して

自分の感情をごまかし続けてみた。テストの手応えもいいぞ。全然、嬉しくない。

そして今日はテスト最終日だが曜日的に部活は無し。今日も午前中だけで帰宅だ。

なんだか無性にムシヤクシヤしていた俺は高校の最寄り駅の近くにあるジャボンカラオケ広場に入店する。そうヒトカラだ。

昨今、ヒトカラをする人は増えたとはいえ、俺はまだ恥ずかしく感じてしまう。コソコソと隠れるように受付を済ませて、ドリンクバーに向かう。

ドリンクバーで飲み物を2杯、並々に注いで部屋にこもろう。そう思い、2杯目の飲み物を注いでいた最中だった。

「あつ鈴木さん！おはようございます。お疲れ様です。」

何者かに声をかけられる。そこにいたのは演劇部の後輩女子だった。

名前は悪いが覚えていない。ほぼ接点がないからな。にしても見られたくないところを見られてしまったな。

逆に顔見知りレベルの人間だったので助かったとも思っておくか。

「お、おう」

「ではでは〜」

話すことも大して無いため、挨拶だけで会話終了した。

俺は2杯の飲み物を持ち、自分の与えられた部屋に向かうが、演劇部の後輩女子も2杯の飲み物を持ってついてくる。どういふつもりなんだ!?!と思いきや、俺の部屋の隣の部屋に入っていた。

おいおいマジかよ……。いくら顔見知り程度とはいえ隣の部屋なんて店員め、恨むぞ……。

結局、これが気になって思い切りは歌えないまま時間だけが過ぎた。延長しますか、と部屋に備え付けの機械が提案してきたが、落ち着かないのでヤメにする。

さっさと帰ろう。今日は厄日だ。いや、あれ以来ずっと厄日だ。気がいつさい晴れない。

レジの機械はセルフ化しており、受付時に渡されたバーコードをかざすだけで、必要な金額が表示される。それをさっさと操作して出ようとしたが、うまくバーコードを読み取ってくれない。おいおいマジかよ……。焦るとうまくいかないものでかざしな

しても、やつぱりダメだ。後ろには人も並びはじめたしなあ……。

「これな、読まるときは下の数字を直接打つといけるぞ」

後ろに並んでいた人から、そんなありがたいアドバイスが飛んできた。

俺はすかさず、バーコード下に印字されていた数字を打ち込むと、金額が表示されお会計をすることに成功した。

「ありがとうございます。助かりました！お待たせしてすみません！」

俺は振り返って、このワザを教えてくれた神様と呼ぶべき後ろの客に挨拶をする。

「いいって、いいって」

が、この声聞いたことあるなあと下げた頭を上げて分かった。

「じゃあな、鈴木」

そこにいたのは、庄司先輩だった。よりもよって、一番会いたくない人に会っちゃった……。

それだけではなく、先ほど会った演劇部の後輩女子が庄司先輩と腕を組んでいる。他に演劇部員はいないみたいだ。

俺は庄司先輩に礼を言った後、お邪魔にならないように、そそくさと逃げ去る。なん

だか見ちゃいけないものを見た気分だ。

ジャボンカラオケ広場から逃げ帰った俺は、家でもう一度、見たものを整理しよう。
あの庄司先輩と演劇部員の後輩女子が腕を絡ませてカラオケボックスという密室から出てきた。

他に演劇部員はおらず、恐らく2人きりだったと思われる。

後輩女子の幸せそうな顔も追加だ。

ここから導き出される答えは1つだ。あの2人が付き合っているということ。

直接、聞いた訳じゃないが……少なくとも俺にはそうとしか見えなかった。

演劇部の部活を見る限り、そんな素振りはなかったから同じ部室でも気付けなかった
ぜ……。

後輩女子はともかく、庄司先輩はオンオフの切り替えもうまそうだし、うまく校内では包み隠していたんだろうなあ。

いや、違う。隠すつもりはハナから無かったんだ。今日、俺に見られても堂々としていたどころか、俺に声をかけてきたくらいだからな。

意図的に隠したりしない結果、あまりに自然に物事が進んでたから一切、気付かなかつたんだ。我ながら己の鈍感っぷりに辟易する。

そして、俺はもう一つの問題にもぶち当たる。

俺が見たこの光景は上田に伝えるべきなのだろうか。そもそも上田が最初から知っている可能性もあるか？

“そのまま黙ってりや、上田は卒業式で自爆だ！心が砕けたところを、うまくすくい取ればイチコロだぞ!!”

自室には俺しかいないから今聞こえたのは俺の心に住む悪魔のささやきだ。俺の中の悪魔はなかなかとんでもないことを言っている。悪魔はさらに続けて言いやがる。

“だいたい、お前が『庄司先輩と演劇部女子が付き合ってる』って言って信じてもらえなかつたとき、お前の評判だけ下がるんだぞ！どう見ても付き合っていそうなシチュエーションだが決定的な証拠は無いんだし動いちゃいけねえって!”

悪魔は言っていること自体は理になつてゐる。

こんなとき、だいたい天使と悪魔で喧嘩になるはず。やっぱり天使の声も聞こえてきた。

「ダメよ！教えてあげなきゃ上田さんが傷つくわ！ここは優しく親身に上田さんを説得しなきゃ！彼女が傷つかないようにうまくフォローしながら鈴木くんが彼女にとって唯一無二の存在にとつてかわるのよ！」

あれれ……天使も大概、ろくでもないことを言つてやがるぞ。まさかのどっちもクズか……。

そうだな、相談されたら天使に乗る。何も言われなきゃ悪魔に乗る。出たとこ勝負しかないか。

なんだか今日のかえつてスッキリしたぞ。庄司先輩に高確率で彼女がいるということが分かり、なんだか頭がすっきりした。今晚はひさびさに安眠出来るかもしれないな。

【12話】恋する乙女はかわいい。

期末テスト終了の翌日は卒業式前日だ。

俺たち在校生はテスト返却まで1週間ほど休みとなる。卒業式前日と卒業式は生徒会が参加する他は自由登校となる。つまり俺は登校する必要は無いのかもしれないが、曜日的には部活の日だし、上田の件もあるので登校して部活に励む。

上田の件を見届けたのかと言われると、正直半々だ。

部活を黙々と1人で続け、時刻は昼過ぎ。卒業式の予行が終わった頃、部室に上田が現れた。

「失礼しまーす。おつ、いた!?!」

俺はいないと思っていたのか、上田は軽く驚きながら入ってくる。

「今日は原稿の日だろ?」

「そうだけど……ふふっしっかり文芸部してるじゃん!」

「まあなあ。次こそは新入生が来るかもしれないしなあ。」

我ながら、それっぽいことを言うなあと感心する。俺も演劇部に向いてるんじゃないやねえ

か？

なんてな。

「しっかり頑張つてね！じゃっ！」

上田は原稿を受け取るとそのまま引き上げる。

明日、庄司先輩に……という例の件は一切スルーだ。

ちようど昼なので俺も一旦、部室を出て近くのコンビニに向かう。腹が減った。昼飯を買わなきゃならん。

コンビニ弁当を買って部室に戻り、1人弁当を食べ始める。しばらくしていると部室のドアが開いた。現れたのは庄司先輩だ。

「おー鈴木がいる」

庄司先輩は笑いながら近付いてくる。昨日の今日なんだが、それに触れるのもなんだかなあと思ひ、当たり障りのない挨拶をする。

「庄司先輩、明日卒業ですね。おめでとうございます。」

「あざっすー！」

それ以上、話すことはないし、どうしようかと思う間もなくさらに……

「鈴木くんお昼食べよー」

そんな風に言いながら、上田が入ってきた。

「あ！庄司さん！卒業おめでどうございます！」

「ありがとうありがとう」

なんちゆう鉢合わせだ。

「じゃ、俺は演劇部に顔出してくるわ」

庄司先輩はそう言って、退室しようとするが、上田が声をかける。

「庄司さん、明日の卒業式が終わってから、少し時間もらえますか？」

「ん？おお」

「よろしくお願いします！」

「分かった。じゃお疲れ」

俺の目の前で上田は庄司先輩と明日会う約束を取り付けた。そして庄司先輩は去っていった。

お弁当を持った上田は俺に微笑みかける。そして言い出した。

「えへへ……ホントは明日、どうやって庄司さん呼び出そうかなって相談しに来ただけど……うまく約束できちゃった♪」

上田はそう嬉しそうに語りながら、お弁当を食べ始める。

恋する乙女はかわいい。

それは事実なんだなあとする意味、他人事のような顔をしながら見てしまう。待ち受

ける明日のことを考えると、心が痛い。

「それでね！校長先生が臭くってさ〜」

上田は楽しそうに今日の卒業式予行であったことを話してる。完全なる雑談だ。庄司先輩にどんなセリフを言うのかを教えてくださいたりするわけでもなく、一切スルーだ。そりやまあ他人に告白のセリフなんて言いたくはないよな。

だいたい赤裸々に色々言われても俺が苦しい。

だが、昨日見たことを伝えるなら今しかないよな……。

何も知らない（と思われる）上田にこのまま行かせて撃沈させて……、で本当に良いのだろうか。

とはいえ、ここまで動いた上田に伝えたところで、先に撃ち落とすだけであつて、撃沈という結果には変わらない。なら本人が思うようにさせるしかないのかなあ。

「どうしたの？私の顔に何か付いてる？」

「いや、別に……。良かったな、明日の約束を取り付けれて」

「ええ？ああ……うん！」

それ以上、俺からかけられる言葉は無かった。

食べ終わった後、上田は卒業式の準備に消えていく。俺はモヤモヤしたまま部活を続けていたが、やっぱり手につかない。結局、時間的には早いが帰ることにした。

が、帰っても悩む。

あの時、庄司先輩には彼女がいると言うべきだったのか、言わずに今のままでいいのか。SNSで繋がっているから上田に今から言うことも出来るが言うべきなのか……。せめて庄司先輩がいるときに彼女の話題でも振ることが出来たなら、上田に間接的に伝えることも出来ただろうに……。

後悔先に立たずとは言うが、自分からまったく行動を起こせなかったことを悩む。まあ行動を起こさないとというのが最良だったのかもしれないため、なんとも言えないけどな。

考えても答えが出ない上に俺からしたら蚊帳の外……。そう思い悩んでるうちに心の悪魔が言っていたことを思い出す。

上田が振られて傷付いて、その時にどこまで俺に付け入る隙があるのだろうか。

こうなってしまう以上、上田は悔いなく想いを伝えればいい。そしてその後を俺がどれだけうまくすくい取れるかを考えるべきだろう。我ながら腹黒いな。とはいえこれは自然の成り行きだ。

俺が何かをした結果ではないんだから勘弁してほしい。俺にとつての本番はまさに明日からだ。

【13話】妹か？

卒業式の日がやってきた。

俺は送る先輩もいないし、登校するつもりはなかったが、やはり気になって登校してしまふ。

もちろん気になるのは上田の動向だ。

あれだけ話はしたんだし、結末に関しては向こうから連絡が来るだろうと予想する。と、なれば上田が「今すぐ駆けつけて！」なんて言ってくる可能性も0じゃないわけだし、とりあえず登校しておいた方が良いだろう。

そんな邪な考えの俺はハナから卒業式が終わるくらいの時間に登校する。

今日はさすがに演劇部員たちが部室にたむろしているようなので、それを避けて教室で待機だ。

卒業生は自分たちの教室に行くはずだし、送る側の在校生は基本的に部室などの先輩との共通の思い出の場所に集まるだろう。2年生の教室は基本的に誰もこないのだ。

俺はここで上田からメッセージが来るのを待つ。

俺の予想は「振られちゃった。庄司さん彼女いるって♪」と案外、メッセージなら朗

らかに来るかな……。

ただ実際に会うとかなり精神的にキテて……という風になりそう。とりあえず、向こうが呼び出さなければ俺から呼び出すのもアリか？

「残念だったね。とりあえずご飯でも行く？今回は俺ごちそうするよ？」
「くらいな感じか？」

いや、これだと攻めすぎか？

下心アリアリみたいだし警戒されるか？

あくまでお友達ポジションだし、向こうが話したがるまで一旦、あっさりした返しがいいかな？

そんな風にしばらく考えているうちに卒業式の終了から1時間半が経とうとしていく。

そしてSNSでメッセージが届いた音が鳴る。送信主は上田だ。きた……。

若干、震える手を抑えながらSNSを開きメッセージを読む。

「後押ししてくれてありがとう！」

お？なんだこのメッセージ……。続いて画像が送られてきた。

手と手が握られた、その部分だけの画像だ。顔は写ってないし誰と誰の手なのか分からない。

と言いたいところだが片方の手はいかにも女の子のか細い手、もう片方は剛毛とかそんな分かりやすい情報は無いものの、明らかに男の手だ。

……？

急にめまいがしてきた……。

上田が他人のこんな写真を撮って俺に送ってくるわけがないよな……。

つまりこのか細い手は上田の手か。

で、状況から考えてこの特徴の無い男の手は庄司先輩……。しかないよな。

画面が滲んで見えだしたため一旦、目を閉じて深呼吸。

改めて画面を見直し、さっき見たのが何かの間違いではないことを確認する。

なんとか絞り出した俺の返信は一言だけ。

「おめでとう」

それ以上は、何も送れなかった。

上田からは「ありがとう♪」とだけ返信が来て、それ以上は何もない。「おめでとう」に対して「ありがとう♪」と返ってくるという言葉は、何かの間違いやドッキリではなく、告白がうまくいったという意味なんだよな？

ここで、ふと思いつく。なんで俺がここまでガツクリくるのか。

上田に対して好意を抱いていたのは事実だが、庄司先輩には彼女がいるのだから振られるだろう。

そんな風に考えていたからだ。

なのに告白は成功し2人は付き合い始めた。

じゃあ、あの演劇部の後輩女子はなんだったんだ？

この2日の間に破局した？

あんなにラブラブに見えたのに？

そもそも最初からそんな関係じゃなかった？

分かんない……。後輩女子の名前すら分からないのに情報が少なすぎる。

名前が分からない……。ということは、まさかと思うが、あの後輩女子は庄司先輩の妹

か？

そう思えば確かに話はつながる。

くっそ……名前くらい覚えるか聞いておけばよかった。

完全にぬか喜びじゃないか……。

ひとつだけ良かったと言えるのは上田に嘘を吹き込まなかったってことくらいか。

俺にとっては完全に終わったがな……。

ここまでスッキリ、片が付いたんだ。今日は逆に安眠できそうだ。

まあここ数日は俺の誤解により、ずっと安眠していたんだけどな。

翌朝、目覚めて何も考えずいつものルーティーンで学校に向かう。

登校中に思い出したが、今日もまだ休みだな……。部活のある曜日だし、帰っても何もすることはない。そのまま登校する。

部室でも何も手につかず、ぼんやりとしていると昼も過ぎて午後になる。俺、もしか

したら廃人になるかもなあ……と、頭の悪いことを考えていると部室のドアが開いた。

「おはようございますー」

挨拶しながら、上田が入ってきた。

「おつ鈴木くん！ちゃんと来てるね！」

いつもの調子で上田は声をかけてくる。

「ん？今日はいつもの原稿の日じゃないよな？どうした？」

俺は極力、平静を装いながら答える。すると上田は一枚の紙を渡してきた。

「はい、これ。新入生関係の日程表よ！」

そこにはいつ入試でいつ合格発表、いつ入学式などの細かい予定が書かれていた。

「合格発表と説明会の日から新入生争奪戦は始まっているわ！まずはビラ配りだから頑張つてね！」

いつもの調子で上田はスケジュールの書かれた紙を手渡してきた。そうか、もう新入生が来る季節なんだな。

「ビラの作り方は裏にまとめといたから！とりあえず合格発表と入学式ではビラ配り以外禁止のルールだし最初が肝心よ！頑張つて！」

渡された紙の裏を見るとビラの作り方、具体的なビラ用の用紙の保管場所や各部で使える枚数、裁断機の使い方など細かい情報が手書きされていた。上田の気遣いが、かえって俺の心を揺さぶる。

「廃部阻止のための大事な新歓よ！じゃあ新入生獲得頑張つて！」

いつもの明るい調子で上田は去っていく。果たしてこの間、俺はどんな顔をしてただろうな……。

【14話】おい待てや。

上田に言われたとおり合格発表と新入生説明会、入学式の日と俺は登校してピラを配った。あとは実際に始業式を迎えてから、仮入部でどれだけ集まるかと言うところになる。

新学期が始まり、俺もめでたく3年生に進級した。

あれから上田とは部活で会うが、なかなかプライベートな話をする事はなく、事務的な話ばかり。

そして最初の放課後、仮入部期間が幕を開けた。今年こそ、誰かが入部してくれたらなあ、楽に廃部阻止となるんだけどなあ、と甘い考えを持つ。

この期に及んで上田の希望を叶える意味については有るのか疑問だが、理由はどうであれ半年間頑張ったんだ。

その頑張りまで捨ててしまうのはもったいない。ここできたばったら何も残らない。仮入部期間くらいは毎日部活をやって新入生を大量に集めてやるぜ。

部活が始まって数十分。俺も部室に戻った演劇部も暇そうな顔をしている。新入生が来ないのだ。

まあ仮入部期間1日目だし、まだ気にするほどではない。にしても気になるよな……。

ただこうも新入生に期待していた分、暇になってしまふ。

演劇部も基礎練が終わり多少、暇そうだ。文化部希望なら出足は遅いだけならいいが……。

演劇部の側も庄司先輩の熱烈な指導は消え、なんとというかほんの少しだけ大人しい雰囲気になった。時代は移り変わってゆくのだなあ……。

じゃなくて、新入生も来ない今こそ、部活じゃない方の件で確かめるべきだろう。

俺は少し暇そうにしている同期の演劇部員、水原にこっそり声をかける。

この水原っていうのは前に言った俺のゴーストライターだ。

文化祭のたびに1本か2本ほど俺の名前で作品を生み出している。

名前も知らない演劇部員が多い中で、数少ない顔と名前が一致する演劇部員だ。

「なあ水原……」

「ん？」

「庄司さんって……？」

「いやいや鈴木ちゃん、庄司さんは卒業したからWWWOBで来ることはあっても、さすがに新年度すぐからは来ないってw」

「実会話に草を生やすな!」

「おや? 庄司さんという名前の演劇部員はいないのか……妹説は吹き飛んだぞ?」

そこに例の演劇部の後輩女子がやってきた。

「庄司さんがどうかしたんですか?」

水原のデカイ声に反応してしまったらしい。

俺がこっそり話しかけたのに空気を読まないヤツめ。俺が言い訳するより先に水原が答える。

「いや、鈴木ちゃんが『庄司さんいないな』って。さすがにいないでしょ。」

それ以上、深読みした発言はない。助かった。

後輩女子は嬉しそうに語る。

「まあ今週末、会うんですけどね♪久しぶりに」

その幸せそうな顔を見ながら、水原は呆れたような顔で

「はいはい、よかったよかったね」

とめっちゃ適当な返事を返している。

この反応からして、少なくとも水原は「庄司先輩とこの後輩女子が付き合っている」と

いうのを知っているのだろう。

なんなら演劇部内では周知の事実かもしれない。

って待てや。

じゃあ上田が好きな庄司先輩って誰なんだ？

もしかして庄司って名前の先輩は2人いたのか？

んなわけないよな？

んなもん部活どころの騒ぎじゃないぞ？

考えられるのは庄司という名前の先輩が2人いた説と、上田とは破局して演劇部後輩女子と復縁した説か……。

前者はやっぱり考えにくいし、後者だとしても言うて1ヶ月ちよつとの間の話だし早すぎねえか？

上田の幸せを願い身を引くか、なんて考えもあつたが……少なくとも今の話を聞いてしまった俺は一体、何が起きたのかを知りたかつた。

とはいえ、さすがにいきなり生徒会室に乗り込んで「別れたのか!？」と聞くなんて無粋なことも出来ないし……。

もやもやしたまま新入生も来ず、1日目は終わる。

2日目は、まずホームルームの時間を使って体育館で部活紹介があり、俺は淡々と部活を紹介した。

運動部でもないし、パフォーマンステカも無いしな。変に熱くやると逆に来るものも来なさそうだからな。

その結果、放課後には部室に新入生がやってきた。が、その新入生は演劇部に吸い込まれていく。

さらにしばらくして部室に何者かがやってきた。変な時間だし、よその部の見学から流れてきた新入生かと思いきや、上田だった。

「お疲れ。どう？新入生来た？」

「見ての通りだ」

「誰もいないわね……」

さすがの上田もいつもの朗らかな笑顔ではなく苦笑いだ。

「まあ……さすがに拉致とか誘拐はダメだから、見学とかに来た子はなんとか捕まえて

ねー！」

確かにそうだな。来た子はなんとか入部させる！そこくらいは最低限やらなきゃな。

「私もたまには様子見にくるから」

「いつそ上田が入部してくれ」

「だーめ。意外と生徒会長って忙しいから掛け持ちは出来ないのよ。」

俺は冗談半分にある意味、見学に来た上田を捕まえようとしたが無理だった。

ガチで新入生……来てくれるのか？

仮入部期間も始まって数日。まだ折り返し地点でもないんだが、多少諦めムードを人出しながら、部室にいたときだった。

「すいません、文芸部の見学に来たんですが……」

そう言いながら部室に新入生の女の子が現れた。しかも美人だ！うお!?マジか!?!?

一応、表向きは平静を装いながらも内心は大興奮しながら、その子を文芸部スペースに呼び込み席に座らせる。

あ、大興奮って変な意味じゃないぞ。その女の子は用意された椅子にちよこんと座る。

とりあえず俺の名前と学年を自己紹介し、相手のことを聞き取ってみる。

「虎谷七海です。」

とらたに ななみ……なんか名前からして凄そうだ。虎の谷と七つの海ってそんなカツコいいのオンパレードだな。

……って自己紹介、以上かよ!?名前だけ!?いやいや引き出す側の俺の技量が試されているのか!?……よし乗ってやろう。このままこの子を手放すわけにはいかねえからな。

「虎谷さんは何でこの部活に来てくれたんだ?」

「なんとなく……ですかね?」

「っ……っってそりやそうか……ほかの部とかも気になったりして?」

「まあ……」

「文芸部で何か書いてみたいとか?もしくは読みたい何かがあったり?」

「んー……まあ」

や、やべえ……。話が弾まない。前言撤回、ただの冷やかしかもしれない。

すると虎谷の方から話しかけてきた。

「もしかして、話が続かない……とか思ってます?」

えっ!?何、読心術者なの?一応、正直に答えておくか……。

「ん……んん……新入生来るのが初めてだから正直、何を話したらいいか分からない部分は……」

「フフツ」

鼻で笑われて流された!?!何者なんだよこの新入生!?

いやいや落ち着け。相手は2つも年下だぜ?流されるんじゃないか。それに冬に上田の協力もあつて冊子を作つたじゃないか。

俺は冬に作つてあつた同人誌を手渡してみる。ついでに紹介もする。

「二応、文芸部で作品を作つて年に何回かはこうして同人誌を作り配布しているんだが……」

「そうなんです。読んで良いですか?」

「ああもちろん。」

彼女は受け取つた同人誌を黙々と読み続ける。ちゃんと作戦通り渡せたのは良かったが、それつきり彼女はそれを読んで話しかけることが出来ないまま部活の終了時間を迎えた。

チャイムが鳴ると、パタンと同人誌を閉じ俺に返してくる。

「はい、ありがとうございます。」

ちゃんとお礼を言つてくれた……。礼儀知らずとかじゃないんだ……。。

「いや、それはあげるよ。仮入部に来てくれた新入生のために何冊か用意してるんだ。」

「そうなんです。では、ありがたく……」

彼女は返そうとした同人誌をカバンにしまい帰っていった。

それと入れ替わりに上田がやって来た。なんとなく雰囲気は上機嫌な感じだ。

「お疲れ、今の子つてもしかして？」

「お疲れ様。ああ、うちに見学に来てくれた子だ」

「やったじゃない！ どうぞ？ 入ってくれそう？」

「正直、分からん……なかなか掴みどころがなくてな」

「へ〜そっか……あ、ちゃんとクリスマスの際に作った本、渡した？」

「ああ。ずっとそれを黙々と読んでたぞ」

「へ〜じゃあ割と可能性あるんじゃない？」

「そうか？」

「今って若者の活字離れとか言うじゃない？ そんな中でずっと読んでいられるって意外と気に入ったんじゃない？」

「ん〜そういう考え方もあるな。」

「あ！ 鈴木くん嬉しそう！ やっぱり自分の作ったものが評価されると嬉しいわよね〜」

言われてみれば、そうかもしれない。後一つ、気付いたことが、上田はやっぱり話しやすい。

すごく柔らかな雰囲気で、部活中ずっと緊張してた俺をほぐすように話しかけてきてくれる。

本当にありがたい存在だ。

庄司先輩が卒業して彼女がこの部室に顔を出す意味もなくなった気がするんだが……今年度も上田はこうして顔を出してくれるのだろうか。

「来ないでーって言われたらアレだけど、もちろん来るつもりよ。あの件と文芸部の件は別。付き合えたからもういい、とかってわけは無くって文芸部の存続は私の希望であるっていうのに変わりはないから。」

あくまでも庄司先輩の名前は出さないのな。まあ演劇部もいるしそりやそうか。

そういえばなんで今日の上田はやけに上機嫌なんだろうか。

「知りたい？実は彼とこの週末にU F Jに行くのよ」

「U F JってあのU F Jか？」

「そう！楽しみ〜」

おいおいノロケかよ。うらやましいぜコンチクシヨウ。

ちなみにU F Jとはユニバーサル・ファンタジック・ジャパンの略だ。テーマパークで家族連れやカップルで賑わうスポットだ。

金融機関じゃないぞ。

俺も小学校の卒業遠足で行ったな。

そうか、そんなところに2人でデートに行くのか。

もう諦めたつもりだったがチクチク胸は痛むな。

「じゃあ、その調子で新入生勧誘頑張つて！またね〜」

上田はそう言うと、生徒会室の方へ帰っていった。

マジで文芸部の様子見とノロケ話のためだけに来たのかよ。俺の気持ちも分かってくれ……つてそれはさすがに俺の自己チューかな……。

【15話】蓋をしたはずの感情

週末にデートだと言っていた両者がどうなったのか、さすがにストーキングする訳でもなく、俺にとつては何もないままの週末を過ごした。

というか同一の庄司先輩ならバツティングしてるといふような気すらしてくるんだが……。

あ、土日で2日あるしバツティングはしないか。

つてバツティングしないなら本気であの人が二股してることになるじゃねえか。

……あかん、考えるのはやめよう。俺に出る幕は無い話だ。

そして週明け、仮入部期間の2週目に突入した。

仮入部期間はまるまる2週間、つまり来週半ばまでとなる。これまでに見学に来たのは1人。

同室の演劇部には4〜6人程度は来ていたように見えるので、やはり少し悪い意味で気になってくる。そもそも見学に来た虎谷もなんとなく何考えてるかわかんねえしな。

しかし今日、新入生は誰も来なかった。

演劇部もほぼ確定で入部の新入生以外は見えず、暇になっているようなので、また水

原のところへこつそり話しに行く。

水原はまた例の後輩女子からノロケ話を聞かされているようだ。

俺としても気にしないつもりでもやっぱり気になる庄司先輩の二股の確証が欲しい。

後輩女子は俺が来て、話を丁寧最初から始める。

「日曜日U F J行つてきたんですよ。彼、めっちゃU F J詳しくくてもう昨日現地で予習してきたの？つてレベルで季節のイベントとかも含めて詳しくてホントすごいんですよ。」

そこに上田がにゆるつとインしてきた。

「へえ〜良い彼氏さんね〜。私も土曜日、彼とU F J行つてきたんだけど、U F J初めてでさ。私もあんまり行つたこと無いから、2人で年パス買って、どこ見たらいいかも分かんないまま色々歩いたりして……まあ2人で考えておしやべりしてつて、そういうのももちろん良いんだけどね！」

あれ……これ二股なら上田を練習台にしてるつてことか？

一方で演劇部後輩の方は2人で色々考えるところかはナシにして遊ばれてる？

俺の疑念には、もちろん2人とも気づかないまま、俺と水原を置いてけぼりにして女子トークが続いてる。

「まあ会長も2人で年パス買ったんだつたら、これから2人でいろんな楽しみ方を探せ

ますし良いですよね」

「それはもちろん、そうなんだけどやっぱり女の子としてはエスコートしてほしいかな？ って部分もあったり……まあそこまで言うのって贅沢よね」

「難しいですよね。確かに『次はここ行こうぜ』って決めてくれるのはありがたいですし、色々考えてくれてるなあって嬉しくなりますけど……そうですね。贅沢というか無い物ねだりというか」

「お互いに『隣の芝は青い』ってだけなのかしら。」

「ですかね」

それ……、本当に隣の芝なのだろうか……。俺には同じ芝の話をしているような気がしてならない。

「はい、休憩終わり！ 演劇部集合！」

そのかけ声で水原と後輩女子は話を切り上げ集合する。

俺も文芸部スペースに戻るかな。

「文芸部が気になつて見に来たけど」

「今日は見ての通りの開店休業だ。」

「やっぱり厳しいわね」

「ツブヤイターも結構、頑張っているんだけどなあ。なかなかうまくいかないぜ。で、上

田は今日は何しに来たんだ？」

「ん？文芸部の様子見よ。新入生は来てほしいだろうし、男の子一人だと入りにくいって思う子もいるかもしれないでしょ？」

「なるほど……なんだか申し訳ないな。」

「いいのよ。鈴木くんには文芸部の廃部を阻止してもらわなきゃいけないんだし」

ああ……そうだった。そのためには新入生が30人だっけ？無理だろ。いくら上田がかわいいって言ってもそんなに入学してくれないだろうし、何なら上田目当てなら生徒会絡みのところに行くだろうしな。

「だから頑張つてね♪文芸部の部長さん♪」

だから、その素敵な笑顔を俺に向けなくてくれ……。

蓋をしたはずの感情が起き上がってしまう。

「ん？どうしたの？あ、見て見てくアトラクションで写真撮つてくれるんだけど私の顔ヤバくない？」

そういうと上田は笑いながら写真を見せてくる。何かのホラー系アトラクションで驚かされた瞬間が収められた写真だ。なんともまあかわいい。が、隣にいる男を見てスツと感情に蓋がされる。やっぱり、あの庄司先輩だ。さすがにここまで証拠が揃つて、双子でしたなんてオチは無いはず。二股確定だ。だが、それを伝えるべきか？

「さつきはあんなこと言ったけど、やっぱり楽しかったな……フフツ」

上田のその幸せそうな顔を見ると、俺はこれを壊そうなんて気にはなれなかった……。

俺の複雑そうな顔をどう察したのか、上田はまた話し出す。

「?……あつそうか……ごめんね?大丈夫よ!新入生きつと来てくれるわよ!」

そうじゃないんだが……まあ、そういうことにしよう。

「そうだよな。まあまだ仮入部期間は半分も終わってないしな。頑張ってみるよ」

「私もできる限り顔は出すわ!頑張りましょ」

俺も単純だなあ……。上田ができる限り顔を出してくれるらしい。それだけで、もつとやるか!つて気になってくる。やれやれ。

上田に乗せられ新入生集めを頑張ろうと思つてからの今週。今日は既に金曜日だ。

この間に起きたことと言えば女の子3人組は来たが、10分で帰られた。ありや脈無しだな。

なんとなく、乗っ取ろうとでもいうような雰囲気だった。SOS団とかをそんなのがやりたい感じな雰囲気だ。10分ほどでそれは無理だと悟つたのだろう。

そんな事がしたいなら大人の事情がない学校に進学すべきだったな。

で、今日は金曜日に至るわけだが、目新しいことはなく俺は黙々と原稿を部室のパソコンに入力していた。ちなみに文芸部としての真面目な活動場面を見せるという目的もあり、上田の週一回原稿ノルマは仮入部期間もアリとなつてゐる。

ん？今日はよく見ると演劇部の仮入部に虎谷がいるなあ。

文芸部の見学に来てくれたが、結局はそっちに行つてしまつたか。

原稿が打ち込み終わる頃、ちょうど下校時間が近付いてくる。仮入部期間も来週あと2日くらいだったはずだし、もう終わりだ。

こうなりや校門前でキャッチでもするか？

つてそれでうまく行くわけもないしなあ。

つてかキャッチで捕まえた新生が長続きするとも思えないし、厳しい問題だ。

とりあえず、今日はまだ来ていない上田が来るかもしれないしちよつとだけ待つてみるかな。

演劇部員たちが帰り支度をしているが、マジマジと眺めるのも変なので、俺はパソコンを見たまま何やら考えているフリをする。

が、後ろから声をかけられた。

「ねーねー鈴木さん」

「？」

振り返ると虎谷がいた。手には数枚の紙が入ったクリアファイルがある。

「書いたんで読んでみてください。」

「お？おう……」

それだけ言うのと虎谷は帰ろうとしたが、俺はとつさに引き止める。

「コレ、部外に編集さんみたいな人がいるんだが、その人にも読ませていいかな？」

「いいですよ、じゃお疲れ様です」

虎谷はあつさり挨拶すると、すつと帰っていった。

つて入部するのかがどうか聞けよ、俺！

もう帰っちゃったし仕方ない。何より、渡されたものが気になる。見たところ小説か？マジかよ……。これも気になるが、まずは編集さんこと上田のためにコピーを取りながら原稿の中を入部届を探すが無い。

ええ……もしかして2人目のゴーストライターにしなければならないのかな……。

そういえば上田も色々よくはしてくれるが、入部はしてくれないしな……。

正式な部員になつてもらう……ってそんなハードルが高いのか……。

とりあえずツブヤイターには敷居の低さをアピールしとくかな……。

「お疲れ〜お！やつぱりいた」

そう思っていると上田がやってきた。

「ごめんね、今日、原稿回収の日だったわよね、ちよつと用事が立て込んで遅くなっちゃった」

「まあ生徒会長は忙しいもんな。お疲れさん。はい、あと俺の分の原稿」

「忙しいのは、お互い様よ。で、どう？ 新入生は来てくれた？」

「それが……演劇部を見学してた子がコレを。今さつき渡されたから俺もまだ読んでいない。」

俺はそういいながら虎谷が書いてきた原稿を渡してみる。

上田は多少驚きながら受け取った。

「ん？……何!? え!? 新入生がこれ書いてきてくれたの!? すごいじゃない!! 土日間に鈴木くんも含めてじっくり読ませてもらうわ! やったね! 新入生獲得じゃない!」

「いやあそれが入部届はくれなかった……」

「え!? あ……ごめん……まだ悩んでるのかしらね。でも、これはなんとなくあと一押しの方がするわ。」

虎谷の顔を思い浮かべる……。何考えてるかやっぱり分からん。

が、それゆえにゴースト路線ではなく実は上田が言うとおりに迷ってるだけで入部してくれる可能性もあるのかもしれない。

「じゃあ頑張つてね! せめて1人、出来れば30人の新入生を獲得よ!」

振り幅でかくないか？

「また来週。お疲れ様〜」

上田はそう言うのと荷物を持って帰っていった。あ……また二股の件を言いそびれたな。

というか言う気があるのか俺自身も分からないレベルだが。

俺も支度して帰るか。

帰ってからは、虎谷が書いてきた原稿を読むことにする。

幸い、今日は上田のノロケ話とかは聞いていないため、落ち着いた気持ちで読めそう
だ。

……

……

……

なんだこれ……。持ち込まれたのは長編の最初の部分みたいだが、続きがとても気になる。

しかも面白い。

これはヤバいぞ。

正直、虎谷が入部したら俺の存在意義が無くなってしまうレベルだ。

が、そんな俺のプライドはどうでもよく、純粋に続きは読みたいし、入部もしてほしい。これは色んな意味でヤバいな。

いよいよ仮入部期間も部活をやるのは、あと2日だが、虎谷は来てくれるのだろうか……。

【16話】隣にいるのは俺じゃない

さらに週明け、月曜日はまったく何も起こらず、気付いたら仮入部期間も最終日だ。
これまでの見学者、4名！

ここから30人入部なんて考えられないな。せめて虎谷は入部してほしいんだが……。

部室に行くと演劇部が集まっている。文芸部のスペースにはもちろん誰も……いた！

いつもは誰もいないのに今日は誰がいる！

少し浮かれてステップを踏みながら向かうとそこにいたのは上田だった。

いや、俺はそれでいいんだよ？

だが、日が日だけに新入生を期待してしまうじゃないか。

「ハロ〜。ごめんね〜新入生じゃなくて。」

俺の考えは上田に読まれていたようだ。まあここまできたらどんと構えるしかないな。

「二応、私も部員のフリして新入生の子が入りやすいようにしているのよ。」

「分かつてる分かつてる。ありがたいな。」

ちよつと顔を膨らませながらプンプンしている上田はやっぱりかわいい。

「こんにちはー」

続いて、ちよこんと顔を出したのは虎谷だった。演劇部にも見学は来ていたし、どちらの部員も来てほしいと息をのむが……。

彼女はトコトコと俺たち文芸部の側へやってきた。

「こないだ渡したアレどうでした？」

「アレって小説か？ん、普通に面白いし続きが読みたくなつた。上田は？」

「そうねくまず文体が丁寧でとても読みやすいわね。中身もとても面白いし鈴木くんが言うように続きが読みたくなつたわ。」

「フフツ……あ、これお願いします。」

俺たちの感想を鼻で笑って流し、虎谷は何やら紙を取り出した。部長として俺が受け取る。

入部届。まさか俺がこれを受け取るような日が来るなんてな。

「じゃあ改めて……文芸部にようこそー！」

「ようこそー！」

俺と上田で新入生の入部を歓迎した。

「フフツ……ありがとうございます。で、この人は？」

この虎谷という新入生は鼻で笑うような笑い方が基本みたいだな。

で、虎谷が気になるのは上田みたいだ。そりやそうか。前はいなかっただもんな。

「え？私？」

「はい。入学式の日にか挨拶してましたよね？」

「うん。私ね、生徒会長の上田江美っていいいます。文芸部員じゃないんだけど、時折、こうして文芸部の手伝いをしているの。1人じゃ大変だろうからね」

この部室に足繁く通うキツカケはそれじゃないだろ……なんてツツコミは野暮だろうな。

あれ？でもそれなら演劇部は辞めないか？なんかややこしいぞ。

まあそこはそのうち本人が語るかな。

上田と虎谷が挨拶と互いに自己紹介をしてから俺は改めて部活のことを説明する。

「じゃあ部活はとりあえず週三回だから。明日からよろしくな。」

「はい、よろしくお願ひします。」

虎谷はちよこんと頭を下げてから退室する。つてか俺の部活紹介って活動日だけかよ。

「良かったわね〜新入生が来てくれて」

虎谷が退室したのを見てから上田が話しかけてきた。

「そうだなあ。」

「でも、なんだか不思議な雰囲気の子ね」

「確かにそれは俺も思う。悪い子では無さそうだが。」

「歓迎会とかする？」

「ああ……考えたこと無かったな。なんせ新入生が来るなんて初めてだし俺が新入生の頃からー人だしな」

「そうよね〜。歓迎会とか打ち上げとかに連れ立って行く演劇部を寂しそうに見てたもんね。」

「おまつ……それも見てたのかよ」

「まあ演劇部で人間観察は片っ端からするように指導されてたしね〜」

「愛しの彼からか？」

「こらく〜！そういう言い方しないの！」

うつ……怒られた。が、否定はしないのかよ！

怒り方もマジな方じゃないし、さては言われたがったな？

俺、自分から地雷踏んで自爆したな。話を戻そう。

「新入生歓迎会やるなら上田も来るか？」

「え？いいの？」

「上田が良いならな。つてか仮に虎谷しか入部しなかった場合、俺と虎谷の2人で……つていう方が色々マズいだろ。」

「そう？好都合じゃない？色々と手を出したりとか……」

「アホか！つてか生徒会長がそれを推奨すんな」

「へえ、鈴木くん結構マジメなんだね」

「ええ？あ、ああ……？いや、今のは上田がおかしなことを言っただけじゃないか？」

「そう？私は後輩を可愛がろうねって意味しかないわよ？」

「はーいはい」

「つていうかさ、私ばっかり色々話してるけど鈴木くん大丈夫？」

不意に謎の心配をされても焦る。

とりあえず上田と話をする分には楽しいから大丈夫だぞ。

「まあ前からそんなに口数多い訳じゃないもんね。にしても他に新入生来ないわね……」

真横で演劇部に新入生が複数人来ているのを見るとやっぱりなんだかなあと思ってしまう。

「結局、他に入部届を持ってくる新入生もおらず、新入生は1人で確定してしまった。
「まあ……こればかりは仕方ないわね」

上田はあくまでフォローをしてくれる。が、ここで一応、俺も確認しとくか。
「廃部の件はどうなりそう?」

「部員が2倍になりました!で先生にはかけ合ってみるわ。結局どうなりそうかは虎谷
さんにも言わなきゃだしね。」

新入生に入部した途端、廃部の予定を告げる。かなり酷な話だが……

「酷なのは先生たちよ……。先生たち大人の事情に私たち生徒会や文芸部みたいな少人
数の部活が振り回されているんだから……」

いつも朗らかで明るい笑顔の上田が珍しく疲れた表情を見せた。

上田にこんな顔をさせた学校の運営にはキレたいし、なんなら上田の味方として守つ
てあげたいという気持ちはやはりある。

ただ上田の隣にいるのは俺じゃないんだよな。

【17話】 新入生歓迎会

そして新たに部員が2人になって初めての部活。さすがの上田も暇じゃないのか今日は来ない。

俺は一通り、部室のパソコンの使い方方を教える。

「じゃあ今度から書いてきた作品はパソコンに打ち込んだらいいですか？」

「え？ああ出来そうならやっててくれ。文芸部の共有フォルダに入れてくれるとありがたい」

「分かりました。」

虎谷は一度でサラッと俺が言ったことを把握し、原稿を取り出してパソコンに打ち込み始める。かなりスピードも速い。

俺としては文化祭まで時間ももあるし、もうちょっと落ち着いてのんびりやっていっても良いと思うのだが。

「でも鈴木さんと会長が早く続き読みたいって言ったんですよ？」

ああそれか……。あまり無理はしないでくれよ。疲れました辞めますなんて聞きたくないからな。

「無理はしてないです」

言葉を投げると、ちゃんと返ってくるな。

素っ気ないし、何を考えてるかイマイチ掴めないこともあるが、根はいい子なんだな。以降、虎谷は黙々とパソコンに打ち込んでいるため、俺も黙々と原稿を書くことにする。なんだか不思議な感覚だ。

「ちなみにノルマとかありますか?」

「ん?んーこの半年くらいは一応、週1で短編か長編なら1話分は作ろうって決めてたかな。」

上田からの指示だけどな。

「分かりました。」

虎谷は短く返事をしたらまたパソコンに戻る。ってか新入生で入部して1日目で「分かりました」って言ってこれに乗っかってマジで何者だよ。

…

…

…

しばらくして下校時間がやってきた。帰る前に虎谷に上田のことについて伝えておく。って言っても何曜日に来て原稿をもらい何曜日に来て感想を伝えてくれるとかそういう事務的な話だ。

「印刷が良いんです？それともデータですか？」

「ん？一応、データで渡してる。間に合わないときは手書き原稿かな。それで渡したら次来るときにはワードに打ち込まれてデータでくるんだよ。あまり頼りつきりも良くないからなるべくはデータにしてUSBで渡してるかな」

「フフツ……分かりました。渡す分はデータで用意します。」

また鼻で笑われた……。多分、深い意味は無いんだろうな。

「じゃお疲れ様です。」

気付くと虎谷はとてつもないスピードでパソコンを片付けて、荷物をまとめて帰っていく。なんだ……あの速さ。

俺も片付けて部室を出るが、やはり虎谷はすでに下校した後。なんちゆう速さなんだよ……。とんでもない新入生が入ってきたもんだ。

あ、歓迎会のこと相談出来なかったな。

さて、それから数日。彼女は週三回の部活のうち1日だけはパソコンに向かつて原稿を打ち込み残り2日は原稿を書くか、俺と雑談するか、演劇部を眺めるか……というこれまででの俺の活動と同じ事をし始めた。まだ入部して1週間も経たないうちから、もうすっかり馴染んでいる。

ちなみに今日は上田が原稿の受け取りに来る日だ。下校時間まで30分ほどになってから俺はパソコンを立ち上げて、これ専用に使ってるUSBにデータを移すのだが……。

なんだか見慣れないファイルが3つくらいある。

俺のじゃないなら虎谷が作ったファイルか。俺はとりあえず聞いてみる。

「虎谷ー。上田に渡すデータ用意してるんだが、どれを渡せばいい?」

「全部いつていいですよー」

「はい?」

「3つくらいですよね?全部出来てるんでいいですよ」

「え!?全部!?もうこんなにしたの?」

「短いですけどね」

「え!?すげえ……やばいよ。ちなみに俺も読んでも?」

「いいですよ。」

俺はすかさず、虎谷の書いた小説を印刷しカバンに入れる。

出来上がったものの完成度がどの程度か分からないが、質より量だったとしてもこれだけあれば将来は有望だ。

それに入部前からあんなのを見せられているわけで、中身もとてもゴミとは思わない。

まさか小説家志望なのかな。まあそのあたりは、機会があれば聞いてみるか。

今、いきなり聞くのはなんだかあ……つて感じだしな。

さて、上田に渡すデータの準備が出来て、後は上田が来るのを待つのみとなった。

「ねーねー鈴木さん」

ん？虎谷が声をかけてきた。何だろうか。

「ご飯行きましょーよ」

「はい？え？今から？」

「はい。」

お？いったい何が起きてるんだ？と、このよくわからない状況の中で、さらに上田がやってきた。

「お疲れ様ー原稿取りに来たよー」

とりあえず虎谷の発言は置いといて、俺は原稿を上田に渡す。

すると、虎谷はさっきの調子で上田にも声をかける。

「鈴木さんとご飯食べに行くんですけど、上田さんも来ます?」

「ええ? いいの?」

上田は若干、驚いた顔をしながら俺と虎谷を見比べる。

「というか俺はもう行くこと確定なんだな。」

まあいいが。

俺は虎谷と2人にされても何を話したらいいか、会話の迷子になりそうだし、上田の「いいの?」は俺に向けたものだろうから、俺は上田に軽くうなずく。

「本当にいいの?じゃあお言葉に甘えて……」

「じゃあ行きますよ。鈴木さん、はい準備して」

え? 気付いたら虎谷は下校の準備が完了している。

上田はそもそも原稿を受け取ったら、そのまま帰るつもりだったらしく、もう行ける。俺だけがパソコンを片付けたり色々と帰り支度をしなければならなかった。

この後、虎谷に散々、煽られながら急いで部室を後にした。

上田と虎谷と俺の3人で高校から近くの繁華街に向かう。

「どこ行くんだ?」

「どこがありますか?」

「うーん……まあ色々あるわね」

3人が3人とも目的地不明かよ……。

結局、悩んでも仕方がないため、たまたま見つけたサイ世リヤに入る。

まあ高校生だしな。ここは身の丈にあったところにしないと。

まだ早めの時間であり、すんなりと入店し席へ通された。

「せつかくだし、これを新入生歓迎会つてことにするか?」

「いいですよ」

「私もいるけどいいの?」

「いいですよ」

上田はどうしたいんだろうかと疑問だが、それはともかく3人の合意を得た上で適当にシェア出来そうなピザとかとドリンクバーを注文する。

荷物番もしながら交代でドリンクを取ってきたところで虎谷が話しかけてきた。

「じゃあ新入生歓迎会というところで文芸部の部長さん、ご挨拶をどうぞ。」

ええ……ここで無茶ぶりかよ!?!とはいえここは先輩らしくまともに挨拶しよう!

「えーこの度は御日柄もよく足下の悪い中、」

「どつちなよ」

上田からツツコミを受ける。あれ？今日の天気ってなんだっけ？

「曇りでどっちでも無いんで続けてください。」

なかなかキツイ指令が虎谷から飛んでくる。慣れてないことはやっぱり難しいが、続けるか。

「ご参加いただきありがとうございます。そして虎谷さん入部ありがとうございます、これから文芸部としてよろしく願います。それと……」

「お待たせいたしました、こちらマルゲリータになります。」

俺のしゃべりを割って店員が料理を持ってきた。つくづく邪魔されるなあ。

「はい、無理お願いしていませんでした。」

虎谷が俺に謝りだす。

半笑いだし謝罪と言うより冗談半分の雑な振りに応えてくれてありがとうという感じだ。

「私はもつと短い言い回しが好みだなあ〜」

上田が冗談めかして茶化す。分かった分かった。次はさっぱり簡潔に

「これからよろしく！乾杯！」

「乾杯〜」

バツサリとセリフを切られた俺の心情はともかく、こうして明るい空気のまま歓迎会

が始まった。

「でき、でき、なんで文芸部入ったの？」

「なんとなくですかね」

「え、ほかに気になった部活とかある？」

上田は楽しそうに虎谷に話しかける。虎谷は俺と話すときと同じような調子だ。

「はーん、さては上田が後輩がいることを楽しんでるな？」

上田は1年で演劇部を辞めているし、生徒会では会長として気を張ってるだろうし、落ち着いて後輩と遊べるというのが新鮮なのだろう。

俺からしても初めての後輩だし、かなりワクワクしているのが正直なところだ。

そんな風に2人の微笑ましい様子を眺めている。

「ぼやーって眺めている様子を上田はどう思ったのか、俺にも話題を振ってきた。

「虎谷さんホントかわいいわ。鈴木くん、どう？」

「どうってなんだよ。俺はそのとんでもない文才に圧倒されっぱなしだ。将来は小説家になりたいのかなのか？」と疑問には思う。

「いやあく特に小説家になりたいとかって事はないですね。」

なるほど。ホントになんとなく入部しただけってことかよ……。

うちの部に小説ガチ勢がいなくて良かった。下手をしたらプライドズタズタにされ

てしまうところだぞ。

「じゃあじゃあ将来の夢とかあるの？」

上田は将来の話を掘り下げようとする。

「ないですねー」

「へえ、そつか……」

と、上田は話の掘り下げに失敗して少しだけ落ち込む。何だろう、虎谷は話のかわし方がうまい気がする。

「ちよつと……虎谷さん防御力高いわ……」

「そうだなあ……まあいい子なのは分かっているんだがな」

「仕方ない。かくなる上は……」

後輩という存在に慣れていない上田は、普通に盛り上がりそうな話題を探そうとしたらしい。

「じゃあさ、じゃあさ、高校始まって3週間くらい経ったけど気になる人とかできた？」

それ、今のご時世、地雷じゃないっすかね……。

「うーん……」

虎谷は珍しく少しだけ困った表情をする。が、特に躊躇いもなく言う。

「無いですかね。というか私、彼氏いますしね」

「へえ、そうなんだ、え？いつから？うちの高校？」

「4年くらい前からですかね？うちじゃないです。」

「4年!?めっちゃ長いじゃない!?へえ」

「まあまあ」

「鈴木くん残念だったわね♪」

はい？

何が？

確かに4年も付き合ってるなんてどえらい話だなあとは思ったが、すごいなあ。終わり。まる。ただだぞ。

なんとというか表情は変わらないが、なんとなく虎谷が楽しそうに見える気もする。

やはり女子なんだろうな。こういう話題は好きなのだろう。

ただ俺は今、この手の話題に触れると自爆しそう。上田に任せておくことにしよう。

サイ世リヤの歓迎会はこうして数時間、だべりながら楽しく話をして終わった。

相変わらず虎谷に謎は多いし、今日分かったのは長く付き合ってる彼氏がいることくらいだが、それでも最初とは変わってきていると思いたい。

虎谷も上田と打ち解けたのか何なのか分からないが、最後には会長ではなく”上田さん”と呼んでいた。

「上田さんも文芸部に入部してくださいよ」

「うーん、やっぱり会長としてそれは出来ないわね。ごめんけど」

そんな声も聞こえ、虎谷も勧誘はしていたようだが上田は入部してくれるということはない。

今日は楽しかったし、虎谷もある意味では馴染んできたかと思うが……それ故に廃部になる話もしづらくなったな……。上田が廃部阻止に動いているわけだし、あれ以降、何も言っていないから事態は好転したと捉えていいのだろうか……。

【18話】先輩としては情けない

次の部活の日。上田は早々にやってきて歓迎会の日に渡した原稿の感想を伝えてくれる。紛いなりにも創作をしている俺にとつては割と楽しみな瞬間だ。

俺が1人の時は、いつも感想を伝えたら生徒会室に帰っていったが、今日は感想を伝えると、表情を堅くして俺に声をかけてきた。

「この間の件、結果が出ました。虎谷さんはどこまで知ってる?」

この間の件って廃部の話か。虎谷には、まだ何も言っていないな。

「分かった。最初から説明するわ。虎谷さん、ちよつと来てくれる?」

上田は演劇部から目のつかない部室の隅っこに虎谷と俺を呼び寄せる。

「実は文芸部は3月で廃部になります。」

「へー……」

虎谷は相変わらずの素っ気ない返事で、流す。

俺が実質、初めて上田と会って廃部を告げられたときのリプレイを見ている気分だ。

「一応ね、理由も説明しておくと生徒会の陰謀とかじゃなくて、先生の働き方改革がどうこうで顧問が用意できないとかそういう大人の事情なの!」

「そうなんですな。」

「だから廃部を阻止したい！で、新入生も入ったし、なんとかか……って先生に言いにくいんだけど……」

お？その先の展開は俺も知らないぞ。

「やっぱり部員2人、来年度残るのは1人では文芸部を存続させることは出来ないとの回答でした。」

「ふーん……」

虎谷はいたって冷淡な反応。

俺も冷淡な反応ではあるが、上田の期待に応えられなかったことは内心、悔しい。

「他に何か方法は無いのか……」

つい俺はそんな風に口を滑らす。

「それを先生にも聞いてみたんだけど『文芸部に考えさせればいい』って。」

なんかそれ……文芸部なら何も思い付かないだろうとナメられてる気がするな。

いつになく、神妙な面持ちの上田は話を続ける。

「気がするじゃなくて完全にナメてるわよ。過去、実績が無いからどうせ何も出来ないって思ってるんだわ……」

ここで会長の発言にリアクションしたのは虎谷だ。俺としては少し意外だった。

「んーそれはちよつと腹立ちますね。」

表情はいつもと変わらないが、虎谷の明確な意思表明だ。珍しい。

「そうなのよ！ハナから諦めて上から来るのが腹立つのよ！だから私は抗いたい！絶対に大人の事情で廃部になんてしてたくない！」

上田の言葉には熱がこもる。

部室に来るようになった理由はまあ他にあるが、やっぱり廃部阻止には本気なんだと改めて思う。

「つてことで3人寄れば文殊の知恵よ！私たちが頭の固い先生たちをギャフンと言わせましょー！」

上田の熱い宣言に俺と虎谷は頷く。

「で、何か案あるかしら」

上田は近くの席に座ってさっそく俺たちに意見を求め始めた。3人寄れば文殊の知恵とはいえ、そうすぐには思いつかないよなあ。

「そもそも文芸部って書くか読むかくらいで、全国大会行ったとかそういうのが無いからなあ……活動もこれまで本を配るだけだし……」

俺はこれまでの活動を思い出しながら語ってみる。

「じゃあ、もつと本を出したらどうですか？」

虎谷はふわっと、そんな事も言い出した。もっと出す……う？

「長い小説は連載にしたら気になる人はずっと受け取ってくれますし、存在をアピールし続けられると思うんですよ。」

なるほど……。確かに地道でも文芸部らしく、なおかつ存在感はアピール出来るな。

「確かにアリね……月刊誌として毎月製本作業とかをしなきゃいけないから大変だけど、出来そう？」

上田からもGOサインが出た。製本作業くらい、俺が居残りでもなんでもすりゃ出来るだろう。上田はこの案を気に入ったらしい。

「それで固定ファンを獲得して、先生に対して数の暴力で文芸部存続を訴える感じね……なるほど。部員2人だけじゃダメなら、部外からいっぱい人を集めればいいのね……」

俺としては毎月、魅力ある同人誌が作れるのか不安にはなったが、あの虎谷のハイスペックを考えればいけそうな気がしてきた。

先輩としては情けない限りだが……もう慣れた。

話し合いの結果、同人誌をひとまず夏休みまでに4冊発刊することになり、その実績を元に夏休み直前に再度、先生に交渉することで決まった。

この4冊には文芸部が廃部の危機であることも後書きに文芸部のメールアドレスも載せて先生への抗議も含めて、感想を募集する旨も記載した。この作戦がうまく行くと良いんだがな……。

そんなこんなで今日も下校時間を迎えた。

「じゃお疲れさまです。」

いつの間にか帰り支度を整えた虎谷はすぐに下校する。なんてスピードだ。俺たちもさっさと帰るか。

「鈴木くん、ちよつといい?」

しばらくいつもの朗らかな笑顔に戻っていた上田が再び神妙な表情で俺に話しかけてきた。

「ちよつと……こじやんだから……」

上田はそう言いながら俺を手招きする。とりあえず部室の戸締まりを演劇部にお任せして、上田とともに部室を出る。

他人に聞かれたくない話か……。

一体、何が出てくるのやら……。

そのまま上田に連れられて生徒会室までやってきた。

「……なら多分、誰も来ないわ……。」

そう言いながら、俺と上田が生徒会室に入ると、上田は生徒会室に鍵をかけた。よほど誰かに聞かれたくない話か……。

「私もあんまりよく分かんないんだけどさ……庄司さん、他に女の子がいそうなの……。いや、分かんないんだけど……」

上田は小声でそんな事を言い出した。うおう……まだ1ヶ月ちよつとなのに、もう気付くとは……。

俺としては洗いやらい喋りたいが、ここで庄司先輩を貶すのは早い。

上田の気持ちはまだ庄司先輩に向かってるはずだし、引き剥がすような真似をすると俺が悪者だ。

やんわりと上田が庄司先輩から離れるようにしたいんだが……。

とりあえず、上田がどの程度、本気で気付いているのか探るか。

「何か、そんな風に思うことがあったのか？」

「なんかね……うーん気にし過ぎだとは思うんだけど……どこに遊びに行っても、なんか予習に行ってるって感じなのね」

「予習？」

「なんていうの？どこでどう撮ったらSNS映えるか、みたいなのをいっぱい調べて

たり……」

「ああ……でもそれは上田といい感じに写りたいんじゃないのか？」

「私も最初はそう思ってたけど、それだけ熱心に調べてる割に私の携帯でしか写真は撮らないの」

「……それは確かに適切な説明が思いつかない。電池が切れてた？」

「それは無いわ……なんか着信が来たりしてたし」

庄司先輩よ……。一服かけるのも最低だが、隠すのがヘタクソじゃないかい？

「それにもう一つ、変なのよ」

まだあるのか……。

「ジャボンカラオケ広場のポイントが異様に高く貯まつてる」

「なんだそりゃ……」

「2人でジャボカラにはよく行くんだけど、ポイントの溜まり方が異様に早いだよ」

「それは単に上田と行ってから次に上田と行くまでにヒトカラしたりとかしてるだけじゃないか？」

「うーん……それはもちろんそうだと思いたいんだけど、一つ気になると他も気になっちゃおうというか……」

まあ気持ちは分からんでもない。

「あとね、こないだ繁華街で後ろ姿なんだけど庄司先輩っぽい人を見かけて……」

まあ本人だったとしても繁華街にいること自体はおかしくないけどな。

「女の子と一緒だったのよ。」

あら……、それはそれは……。

もはやコメントが見つからないな。

「私の知らない子だわ。集会とかで探したけどうちの高校にはいない子だから多分、同じ大学の子じゃないかしら……。」

ありや？ 演劇部の後輩女子じゃない？ 他人の空似か？

「彼はその日、家族と旅行って行ってたけど……お土産を買ってきてたわけでもないし旅行先の写真とかも一切見せてくれないし土産話の一つすらないのよ……。本当に旅行に行ってたのかしら……？」

うわあ……それ、旅行と嘘ついて別の彼女と遊んでただけだろう……。

と喉元まで出かかったところで止まる。

演劇部の後輩女子じゃないということはガチで他人の空似って可能性もあるからな。

「はあああ。なんか疑心暗鬼になる自分が嫌だわ……。ごめんね、こんな話聞かせちゃって」

「まあ些細なことでも不安になるのも仕方ないよ。俺は別に気にしてないからさ、それは

気にすんな。それより疑念を払拭する方が大事だろ」

上田が傷つかないように、と口から出任せにしゃべる。

なんか俺の方が自己嫌悪に陥りそうだ。

本当は、庄司先輩とさっさと別れてくれって思ってるんだけどな……。

それが俺の口からは言えなかった。

「帰りましょ。ちよつとしゃべったらスッキリした。鈴木くん、今日はありがとう。」

結局、俺は何も言えないまま、この日は下校した。

数日後、演劇部の休憩中に後輩女子に探りを入れてみる。

「え？最近ですか？ラブラブですよ」

淡々としているが、楽しそうに語る後輩女子。こちらは平和そうで何よりだ。と、思

いきや後輩女子はちよつと雲行きの怪しい発言を始める。

「SNSで毎日やり取りしてますよ。ただ前にUFJ行ってから会えてないんですよ

ね。大学が忙しいみたいで。」

なるほど。それってもしかして、大学（で作った新しい彼女の相手）が忙しいって意

味じゃないのか？

これ……三角関係にきかない可能性もあるぞ。せめてもの救いは各々が気づいていないという点だが……。

「鈴木さん！ほら4月分の月刊誌にどれ載せるか、相談しますよ！」

虎谷に引き戻され、これ以上の情報は無いまま文芸部に戻る。

そうだな、今の俺にはやらなきゃいけないことがある。

庄司先輩絡みの事案は俺じゃなんとも出来ない。

まずは文芸部の廃部をなんとしても阻止して、上田の希望を叶えてやろう。

何より大事な大事な後輩も入ってきたからな。

そこも含めて、なんとかしてやらなきゃな。先生からナメられっぱなしに腹が立つの

は俺も同じだしな。

まずはやることをこなしてから、それからだ。

【19話】ウニクロ

さて、今日は5月の末だ。文芸部で発行した月刊誌はめでたく第2号を迎えた。

配分方法は部室前と上田の協力で生徒会室前の2ヶ所に「ご自由にお取りください」コーナーを設置した。

さすがに配り歩くわけにも行かないからな。

4月末に出した冊子は無くなるまでに学校がやつてる日数で10日かかったが、5月末の分は何日かかるかな。

「うーん……7日くらいですかね」

虎谷は期待も込めたのか、先月よりは早くなると予想する。

俺も、そうだな、先月よりは早く7日くらいで無くなってくれたら嬉しいのだが。

発行部数やこの無くなるまでの日数も全部、記録することにした。

上田曰わく、先生たちには数字で結果を見せないと納得してもらえないだろうから、このことである。

アンケートも入れている。どの作品が面白かったかや、どう思ったか等々……。結果は、虎谷の作品が人気になる傾向だ。悔しいとかは無いぞ。

というか、もう勝てない。

先輩のプライドとかそういう意味のないつまらないものは捨て去っている。

結果、誌面も割合も7：3となってしまうがな。ちなみに7が虎谷だ。

「ねーねー鈴木さん、ご飯食べに行きましょーよー」

虎谷がまたそんな事を言い出した。そこへ上田もやつてくる。虎谷は上田が来る日を狙って俺を誘っているのかな。

「上田さんもご飯食べに行きましょー?」

やっぱりな。俺としても色んな意味で上田がいてくれた方が嬉しいし、良いんだけどな。

「ごめんなさい!今日はちよつと用事があつてね!ダメなの……ごめんね!また誘つて!!」

そういうと上田は申し訳なさそうにさっさと帰ってしまった。

「さ、鈴木さん、行きますよ!」

お?上田がいないからキャンセルかと思いきや、2人で行くのかよ。

今回は2人になったが、また高校近くにあるの繁華街に向かった。

というか虎谷は彼氏いるのに俺みたく別の男と2人で食事に行くって大丈夫なのか……。

「彼氏から許可はもらってますよ」

なるほど、そりや安心だ。手を出したりするつもりは1ミリも無いが、彼氏から許可が出てゐるなら美人局って事もないだろう。

繁華街に着いて、どこに行くか相談した結果、行き先は牛丼チェーンの吉野屋になった。

「吉野屋好きなんですよね〜」

そう言いながら牛皿と焼肉皿に味噌汁とご飯の付いたモーモー定食を美味しそうに虎谷は、ほおぼっている。

ここでよかつたのか一瞬不安だったが、別に俺に気を遣つたとかでは無いみたいだ。

とはいえ、吉野屋なのですぐに食べてすぐに店を出る。前のサイセリヤみたく数時間もダべったりはできない。

「じゃあ次は、百均いきますよ」

解散かと思いきや、虎谷は俺を連れ立って、百均に向かう。拒否権無く、そのまま2人で百均に向かう途中、虎谷は立ち止まり俺に話しかけてきた。

「あれ上田さんじゃないですか？」

虎谷の目線の先には、喫茶店があつて上田がいる。楽しそうに幸せそうな顔をしている。庄司先輩も同席しているな。

「まあ口挟まな方が良さそうだな」

つい見てるのが、しんどくなつてそんな風に口走る。

「まあ邪魔したら悪いですもんねー」

俺の意図に気付いているのか、気付いていないのか分からないが、さつさと歩き出す。虎谷は百均で何やら探した後、見つからなかったと言いながら何も買わずに出てきた。

「じゃあ次はウニクロ行きますか」

拒否権は無いまま、俺たちはウニクロに向かう。ウニクロでは、虎谷が何やら服を見ながら手に取ったり鏡の前に立ったりして似合うかどうか試している。

「どっちが良いですかね〜？」

「うーん……どちらかと言えばこっちの方が好きかなあ」

「そうですか」

2着のどちらにするかを悩んだ結果、俺が好きと答えた方を買ってきた。

なんだろう、何か言葉にしにくいのが、すごくいいと思つてしまう。

が、これも全部、彼氏に報告されているんだろうなあと思うと、心は揺れないけどな。いや、俺の心が揺れないのは、まだ上田に未練があるからなのだろうが……。

でも、あの幸せそうな顔を歪ませたくもないんだよな……。

「鈴木さん、どうかしました？」

虎谷は、案外よく気付くな……。とはいえ本当の事は言えず適当にごまかす。

「なんか甘いものでも食べるか？」

「あーイチゴ大福が食べたいですねー」

虎谷のリクエストに応えてコンビニでイチゴ大福を買い、適当なベンチに座つてのんびりする。頭が回っていない俺もまったく同じイチゴ大福を買ってきた。

しかしまあ、あんなことを言っていた上田に笑顔が戻っているなら疑惑は良い意味で解消されたのかな。

そんな風に思いながら遠くの景色を眺めていると庄司先輩らしき人影を見つけた。

のだが、手をつないで一緒に歩いているのは上田ではない別の女子……。見たことない女の子だな……。大学が同じとかか？

俺はとっさに、スマホで写真を撮ろうとしたが、虎谷がいたことを思い出し、スマホをしまう。このままじゃ俺がただの盗撮犯だ。

だいたいこんな証拠写真撮つてもどう使えばいいか分からないし。

「ごちそうさまでした。イチゴ大福おいしかったですねー」

満足そうな虎谷とは裏腹に俺は大福の味なんて分からなかった。

この後、さらに虎谷の買物に付き合うことはなく、ここで解散となる。上田の件は、

また後日に探りを入れてみるしかないな……。

【20話】クズ過ぎる面

「ホントに7日で無くなりましたね。」

虎谷と俺で文芸部としての成果を記録する。

5月号は予想通りに7日で配布する在庫が無くなった。

原稿回収に来た上田もあまりの順調っぷりに驚いているようだ。

「すごいわね。これなら文芸部が人気で取り潰しに反対！っていうのも筋が通るわ。」
確かに、固定の応援してくれる人が増えれば、廃部に対して異論を唱える人も増えてくれるだろう。そう思いたい。

ちなみに7月は夏休みなので発行せずとなり、6月分までの3ヶ月分での実績で先生と交渉することになった。いつも上田に任せっぱなしもいけないので俺も乗り込んで直談判という形だ。

さて、この2ヶ月の文芸部の活動には手応えを感じつつ今日も下校時間を迎える。

「じゃあ、お疲れ様です」

虎谷はいつの間にか帰る準備をしたのか分からないが、ソッコーで挨拶して2分で見えなくなってしまう。ホント静かに帰っていくんだが彼女はくの一か何かなのか。

「あ、そうそう例の話を続きなんだけど聞きたい？気になる？」

上田はいつものテンションで話しかけてきた。

例の話というのは恐らく庄司先輩の浮気疑惑だろうな。

こないだ見かけた、あの上田の幸せそうな顔から結論は知っているため、聞きたいか聞きたくないかで言えば微妙だ。

あの俺に向けられることはない幸せな笑顔……。

非常に複雑な心境だが、嘘偽り無く言うなら……と俺は返事した。

「確かに気になっている。聞いて良いなら聞かせてもらおうかな……。」

結末がどうなるか気になっているのは紛れもない事実だ。

「じゃあまた移動しましょうか。」

俺たちは生徒会室に移動する。上田が鍵を閉めて嚴重に警戒しながら言う。

「やっぱりね……庄司さん、同じ大学の同級生に目移りしてたって……。」

同じ大学の同級生ってことはやっぱり、俺が見たあの女性か……。

「でさー……『やっぱり江美が一番だ。今回のことは水に流して欲しい！』って額をテールにこすりつける勢いで謝られちゃって……。」

「え!?……それで？」

「もう二度としないからって言われちゃって……今回は許すことにしたの。」

で、その告白があった後のあの笑顔か……。上田の独白に口をつっこむつもりはなかったが、つい口が滑る。

「それ……上田としては許せたのか？」

上田は少し困った表情をしてから答える。

「まあ……気持ちには複雑だけど、他に目移りしちゃうのは私に魅力が無いのが、いけないんだろうし……それに、そんな私でも『江美が一番』って言ってくれたし……それだけで私には十分よ」

上田は苦笑い気味にそんな事を言う。なんか自己否定はしながら、妙に本気っぽさが入るのが俺からしたらツライ。

「ごめんね？こんな話聞かせちゃって。他人の色恋沙汰なんて面白くないわよね」

俺の表情を見てどう思ったのか、上田は謝ってきた。

ただ俺がつまらない表情をしているとしたら、それは上田の話がつまらないからではなく、庄司先輩が好き勝手しているという点がつまらないのだ。

こんな庄司先輩に良いようにされている上田を見たくない。

さらに言うと言劇部であんなにカッコ良かった庄司先輩の恋愛事情がこんなクズだったとも知りたくなかった。

上田をフォローするついでに、ほんのちよつとだけ核心に触れてみる。

「すまんすまん、俺から聞き出したんだ。気にしないでくれ。それに結果は気になっていたしな。………でき、もし、もし仮に、の話なんだがまた庄司先輩が浮気してたら……どうする?」

仮に、というよりは繁華街で上田と会った後に別の女性と会っているわけで、ダブルヘッダーで二股、もしかしたら三股関係は継続中みたいだな。

俺からの質問に迷った上田はしばらく考えてから、明らかかな作り笑顔で答えた。

「もう浮気はしないって約束だし、大丈夫と思うわ。……まあ仮にそんな事があれば……もう、別れるかな……やっぱりに魅力がないのかなってことになるしね……。そこまで彼に無理して付き合ってもらうのも申し訳ないし……。」

寂しげに語る上田に俺はなんと声をかけたらいいか分からなかった。ただ一つ言えるのは上田が悪いわけでなく、そもそも最初から二股前提で受けている庄司先輩が悪いという事だ。

「なんかごめんね。こんな話しちゃつて。鈴木くんは何か無い?なんかいい子とか見つかった?」

上田は気を遣いながら俺に雑な話題振りをしてくる。どう答えりやいいんだ……。

「まあ虎谷さんに彼氏がいたのは残念だったわね〜♪」

「別に残念でもなんでもねえよ」

からかうように言う上田を適当にかわす。まあ残念でもなんでもないっていうのは本心だな。

それ以上、つつこんだ話はせずに今日は下校となった。

なんとというかバレンタインデーに上田が庄司先輩のことを好きだと知ったときにはきれいさっぱり俺は部外者になるつもりだったのにな……。

歯車がずれた結果、訳の分からない事態になっちまったぜ……。にしても、カッコいい先輩のクズすぎる面は知りたくなかったな……。

【21話】人の幸せを他人が語るべきではない

7月初旬のテスト終わり、俺たち文芸部は6月号の冊子を配布場所に置きに行く。ホントは6月末に配布したかったが、上田に「テスト期間中に出したら、それをダシに廃部させられるかも」と忠告され、やむなくテストが終わってからとなった。

いつの間に文芸部はそんな反社会的勢力みたいな扱いになったんだ。ちよつと変なことしたら迫害されるのかよ。

まあテスト期間中は部活禁止だし、仕方ないと言えば仕方ないのだろうけど。

そういうことでテスト明けの配布分までで文芸部としての実績を夏休み前にまとめて廃部阻止に向けて先生に直談判しに行く予定だ。

「先生に直談判しに行くときは虎谷も来るか？」

「嫌です。」

それ以上、入り込む隙間はなく断られる。虎谷と多少は打ち解けたつもりなんだが……、いや打ち解けてきたからハッキリ意思表示をするようになったと考えよう。

よそのの折衝、交渉は先輩として出来る数少ないことだしな。

と、ここで演劇部を覗いてみると例の後輩女子はなんとなくいつも暗そうに見える。

気のせいかもしれないし、そういうタイミングなだけかもしれないが。

そんな風に思っていると、演劇部の休憩時間になって水原が俺のところによつてきた。

「ちわつすちわつす。」

「ん? どうした?」

水原は、こうしてたまに遊びに来るのでいつも適当にあしらっている。

「いやあくほらあれ」

水原はそう言いながら目配せする。いつになく小声で話しかけてくるので、あまり他人に聞かせる話でも無いのだろう。水原の視線の先には例の後輩女子だ。

「別れたんだってさ……で負のオーラが出ててヤバいから遊びに来たw」

だからリアルルの会話で草を生やすな。

だいたい、なんでそれで水原が気ますぐなくなってるんだよ。

「いやさあ……ここだけの話、庄司さんの庄司さんはだらしなないから、『すぐ別れるぞ』すぐ浮気されるぞ』ってからかってただけどね。」

「最低だな。つてかなんだよ『庄司さんの庄司さん』つて。」

「ストレートに言うとは、庄司さん、女癖が悪いというか浮気癖？そういう話をよく聞くのよさ。うちとこの他の先輩とか他校の先輩から後輩から……」

「マジ？」

「だから、からかってたらマジでそうなってワイが気まずい。」

水原の話は全部を鵜呑みにするわけにもいかないが、上田の件と合わせて考えるに割とホントっぽい話に思える。

「ちなみに破局した理由とかは聞いたか？」

上田の件が気になるというのもあり、つついっい俺は水原の話に乗っかってしまった。

「なんかね、お察しの通り浮気っすわ。大学で良い彼女が見つかったんだとよ」

うわあ……つてかその彼女を俺、繁華街で見たぞ……。

「私からしたら庄司さんのそういうところは尊敬できないし、破局した方が幸せでええとすら思うんだけどね。」

人の幸せを他人が語るべきではない、と水原に忠告したかったが今の話を聞いていたら言えないな……。

「鈴木さーん。ちよつと」

虎谷が俺を呼んでいる。水原との会話を打ち切って俺は部活に戻った。

虎谷は、なんかのサイトを開いて俺に言った。

「こういうのに応募とかどうですか?」

そのサイトには『学生小説大賞』などと書かれている。

「ん〜良いかもしれないな。こういうところで取り上げられれば部としての存在を認めてもらえそうだな。」

それに、この大賞がどんなものか知らんが虎谷の文才なら何かしらの賞には引つかかるだろう。

「じゃあ応募しました〜」

虎谷はあつさり言う。仕事が早すぎるだろ。というか俺がOKする前から準備してたな!? まあ良い意味での暴走はいいか……。

「どの作品を送ったんだ?」

「ん〜『クズな俺と今カノと元カノ（未来形）』です」

「ってそれ俺の書いたヤツじゃねえか!! しかも内容がアレで校内誌への掲載はボツになっただけ」

「ええ〜だつてこれ一番面白いですよ? それにもう送りましたし……」

「ま、マジか……」

「ちなみにこれ、未発表作品に限るらしいので」

「なるほど。ボツにならない虎谷の作品は、未発表のストックがなかったわけか」

「はいー！」

いつになくキラキラした眼差しでドヤツている虎谷に文句は言えないな……。それにこういう賞を見つけてきたのは虎谷の手柄だしな。とはいえやつてくれたぜ……。

俺の一二を争う黒歴史をどっかに投稿しちまうとは……。

そんな虎谷のかわいい？いたずらもありながら今日の部活は終了となった。

いよいよ廃部阻止に向けて俺も先生と交渉をする時が近付いてきたな……。

どんなことを言つてどんな交渉をすべきか考えなくてはな……。

【22話】教師vs主人公

終業式まであと数日に迫ってきた7月のある日。

テスト明けに配布した月刊誌の結果も出た。

今回は6日で無くなった。

ペースが伸びなくなつたが固定ファンはついた一方で新規は見込めなくなつてきたのかもしれない。

いよいよ先生に直談判するときがやってきました。

数日前に上田から「生徒会担当の先生と予定を調整してるので準備だけするように」と言われ、一応は活動実績をまとめた用紙を印刷した。

延べ何人の人に文芸部の作品を届けたか、具体的な数字も入れて俺の中では反論しづらいように明確な活動実績を作つたつもりだ。

後は活動していて固定ファンもいるだろう文芸部の取り潰しはおかしいのでは？と訴えていくつもりだ。

そして今日、部室に上田がやってきた。

最近は下校時間頃に来ていた上田が今日は早めの登場だ。

つまり生徒会担当の先生と調整がついたのか……。

「鈴木くん、今から良い？」

やっぱりいきなりの呼び出しになったか。まあ想定していたけどな。

俺は立ち上がり虎谷に挨拶をしておく。

「じゃ、行ってくる」

「頑張ってください。かなり厳しいことになると思いますけど……」

「おうー」

普段、虎谷には圧倒されっぱなしだ。ここくらいは先輩らしくビシツと廃部をひっくり返したいところだな。

虎谷の声援を背に受けながら俺は上田と生徒会室に向かった。

生徒会室はいつものように誰もいない。

入室すると、いつも内緒話をするため鍵を閉める上田だが、今回は鍵は閉めないままだ。まあそりや当然か。

「先生は準備出来たら来るわ。座って待ってて。」

上田はそう言いながら自分の定位置らしき席に座る。俺はどこ座っていいかわかんねえよ。それに生徒会の先生とやらが来るんだ。座って待ってて、いちゃもんつけられ

たくもないしな。

そう言えば生徒会の担当って誰だっけ？会ったこともない気がするし分からんな……。

インテリヤクザみたいなのが出てきて静かに恐喝でもされるのだろうか……。

「そんな怖がらなくても……多分、大丈夫よ。……多分。それに会長としても私もいるから、何かあったりつい言葉に詰まったら手助けするわよ。……多分。」

上田はそう言ってフォローしながらも『多分』と強調する。死亡フラグじゃないか。

どこに座っているのかも分からず立ちながら待っていると、数分してコンコンと生徒会室の扉をノックする音が聞こえた。

「どっぞー」

上田がノックに答え入室を促すと、扉が開いて先生が現れた。

体育会系な雰囲気の大柄な男性教師だ。

ただ体育教師では無いのだろう。

ネクタイを締め、何かの教材や資料が入っていると思わしきエコバックを持っている。少なくとも、この先生の授業を受けたことはないな。

思わぬ風貌でリアルファイトでは勝てなさそうな体格、それでいて頭も良さそうな書類を持っている先生に圧倒され、俺はポカーンとしてしまう。

すると先生から声をかけてきた。

「生徒会担当の石橋です。今日、文芸部さんとお話させてもらいます。よろしくお願ひします。」

体育会系でイケイケっぽい見た目に反した丁寧な挨拶に驚きつつ、俺も挨拶する。

「文芸部の部長で3年の鈴木です。よろしくお願ひします。」

お互いに軽くお辞儀すると、石橋先生は近くの席に座る。そして座った席の向かい側の席へ手を差し出す。

「どうぞ、お座りください。」

「えっ!? あ……失礼します。」

俺は石橋先生に促されるままに着席する。なんだこの緊張感……。想像の何十倍も
の緊張感だ……。

俺の緊張をどう察したのか分からないが、石橋先生は軽く笑いながら俺に話しかける。

「これは試験とかではないので、まあ気楽に。雑談みたいな感じでお話ししましょう。」

改まってそんな言い方をすると、逆に緊張感が増す。何が雑談だよ。

「改まってこういう場を作られて、話をしろと言われても難しいと思うので僕の方から文芸部さんにまず説明させてもらってもよろしいですか?」

石橋先生は今度は笑顔がなくなり、急に真剣な顔を始めた。

俺も真顔でその説明とやらを聞く。

「本校では働き方改革による教職員の勤務休憩時間のフレックス化などを目的として学校運営のスリム化を進めることになりました。安全面などのあらゆる観点から部活動における教職員の顧問は必須との校則は変更出来ませんが、今後数年間で現在の教職員数と顧問を確保することは難しく、生徒会や本校後援会、教職員と協議をした結果として部員3人以下の部活については一律に今年度末の廃部として取り扱うことになりました。」

その大人の事情を丸出しにした堅苦しい説明は、もういいや。

「で、これについて生徒会から廃部対象の部活に対してご理解ご協力を賜りたいところです。が、生徒会というのは学生主導の団体であり、廃部決定には教職員側の都合なども少なからずあることから今回、生徒会担当の教師として石橋がお話させていただきま

す。何か質問や異議申し立てなどについて丁寧にご説明させてもらいます。」

なるほどな。生徒会が矢面に立たないよう先生が出てきたというわけか。
しかし見た目からしてヒットポイントも高そうだし、生徒会よりも口説き落とすのは困難だと思うんだが……。

というかこっちは高校生なのに、そっちは大人っておかしくないか？

まあそんなところで争つても仕方ないのでひとまずストレートに行くしかないな。

「まず、廃部には大反対です。」

俺の意見に間髪入れずに石橋先生は返答する。

「気持ちには分かります。しかし方針としては決定してしまっています。」

まあそうなるよな。

ただ、あんだけ理屈並べといて何が『気持ちには分かります』だ。

感情論だけではないともならない相手のようだ。

だが相手は大人の事情、それで無理を押し通そうものならどこかで破綻するはず。

こうなったら質問攻めにしてしまうか。

「先生、分かりました。納得は出来ませんし、廃部を受け入れるつもりもありませんが

……質問させてください」

「どうぞ。」

「そもそも一律部員3人以下つてというのがどういう基準か分かりません。なんでそんな基準なんですか？3人はダメで4人ならいいんですか？」

「今回の3人という基準ですが、そもそも現状で活動を一切していない部員0人の部活もあります。ただし現時点で0人としても廃部は早いうちから周知しないといけません。現時点で部員が0人の部活も定期的に入部や退部があり1年365日部員が0人

というわけではありません。そこで廃部までの間に部員0人で活動しない時期がある可能性が高い部活を廃部の対象としました。」

「??:……つまり?」

「部員が3人以下の部活は部員0人になる可能性が高いため廃部に決定しました。もちろん、各部活によって少数でも永続的に活動できる部活もありますし、多人数でも3年生が引退した途端に部員0人の可能性はあります。が、多数ある部活ひとつひとつの状況に合わせた判断は難しく一律で部員3人以下という基準を設けました。」

長つたらしくてよく分からないが、要約したら『たまたま部員3人以下だから廃部』になっただけって意味じゃないか?

「なんだか説明を聞けば聞くほど納得出来なくなってきたぞ。」

石橋先生は表情は申し訳無さそうな雰囲気漂う真顔のまま、エコバックから何やら書類を取り出して俺に見せてきた。

「廃部の代わりと言ってはなんですが……外部の文芸サークルのパンフレットです。高校の部活にこだわらずとも、外部にも選択肢があります。あとこれが出版社のパンフレットで、進路としてこういう仕事に就くという選択肢もあります。今回は求人票も取り寄せました。」

「石橋先生ちよつと待つてください！これはおかしいです！そもそも学内の部活で、同

じ学校の生徒としての交流や志を同じくする者が集まって部活です！外部とか就職とかそういう次元の話ではないと俺は思います。」

「いい俺は石橋先生の言葉を遮って抗議した。今のは明らかに論点をズラそうとしたからだ。」

「外部とか就職とかは考えるところでも俺の問題です。俺がこの選択肢を選んで俺一人は良いとしても、今いる後輩や来年以降に入部する新入生から部活という選択肢を奪ったことには変わりません。」

「……失礼しました。」

一瞬だけ石橋先生の目が俺を鋭く睨んだ。思惑通り誘導出来なかったのが悔しかったのか……。石橋先生は外部サークルのチラシや出版社の求人票をエコバックにしま

う。
「このチラシや求人票は僕が預かりますので、鈴木くん個人として気になるなら後で取りに来てください。で、文芸部として廃部は受け入れられないというのが、文芸部としての意見ですね。」

「はい。」

「ただもう決まっているんです。部員3人以下の部活動はどんな活動しているかも不透明で、そもそも活動していない可能性も高い部活動は廃部とする方針です。」

「どんな活動をしているか不透明……?」

「これも一律での取扱いですが先ほどお伝えした部員が0人になる可能性が高い部活については、部としての活動内容も不透明であるとしています。」

さつきから聞いていれば難しい言い回しで適当なことばかり言いやがって……。政治家かよ。

あ……そうか、上田もきつと同じ説明を石橋先生から聞いているんだ。

だからSNSやクリスマスフェスティバルの参加など何をやってる部活か明確にしたらいいと言っていたのか。

ひっくり返す糸口はここかもしれない。俺は、あらかじめ印刷しておいた資料を出す。どのタイミングでどんなものを発刊し、何部配布したかという資料だ。

部員が0人になる可能性は確かに否定できないが、だから部活として何やってるのかからんという理論はおかしい。

俺は資料からこの半年ちよつと、どれだけ爪痕を残してきたか、数字という絶対的なものさしを使って説明した。

少なくとも活動が不透明なんて言わせてはならない。

一通り資料に目を通した石橋先生は、ため息をつき天を仰ぐような素振りを見せた。

そして話を切り出す。

「存じております。ですが、先ほど申し上げましたように個々の多数ある部活ひとつひとつの状況に合わせた判断は難しく一律で部員3人以下という基準で活動内容について不透明である可能性が高いという判断になりました。」

いかな、同じ話にループしている。

「なんで一律なんですか？多数ある部活って言っても全部あわせて100とか1000とかじゃなくて30とか40とかしか無いじゃないですか。その上、部員3人以下ってその中のいくつってレベルですよ？仮に半分の20が廃部対象としても1日1部活見て回れば1ヶ月で済みますよね？無理ということは無いですよ？」

「……。」

石橋先生はついに黙った。ただ俺は論破しなかった訳ではない。

「先生、廃部には無理な理論じゃないですか？」

石橋先生は黙ったままだ。このまま無言か……？

【23話】一緒になって廃部を覆してくださいよ!

何も話さなくなった石橋先生を前にして、ここまでずっと沈黙していた上田が急に声を出した。

「先生、そろそろその説得は無理じゃないですか?それで納得してくれるほど文芸部は甘くないと思います。」

上田の発言に石橋先生は微動だにしない。

が、これまでの難しそうな単語を並べて突き放そうとしていた石橋先生とも何か雰囲気が変わってきた気がする。

上田の援護射撃があつたこのタイミングでさらに俺も石橋先生を囲い込もうとする。

「石橋先生、今回の廃部はやっぱり強引過ぎます。理由も浅いですし、おかしいです。それに少なくとも文芸部は何をやってるか分かるようにしてきたつもりです。」

石橋先生は俺たちの問いかけに黙つたままだが、急にエコバックを漁り始めた。そして何かを見つけて、それを取り出しながら話し始めた。

「全部知つとるわ。」

関西弁?というか、さっきまでの敬語で堅苦しい雰囲気が一発で消えた!」
「これも読んだ。」

そう言いながら、エコバックから今年に文芸部が発刊した3冊を取り出す。
「俺、虎谷の担任やぞ。だいたいのは分かってる。」

なんだって?!まさか、この話し合いに参加しながらなかった理由は石橋先生だったって
いうのか?!……そこは俺の自尊心のために、俺を頼ってくれたことにしておこう。

「ってか先生も文芸部について分かってくれてるって言うなら廃部は取り止めで良い
じゃないですか?!なんでそれを難しい話で説得しようとしてきたんですか?!」

俺は強い口調で言っているが、間違っただけは言っていないつもりだ。

だが、石橋先生はそんな俺を見て深いため息をしてから、ゆっくり話す。

「あのな、今回の主題は部活の内容とか、やる気とか、実績とか、功績とか……」
だから、それは見せているだろうと言いたかったが……

「そんなもん関係ないねん。要はどうやって、顧問減らして教師のサービス残業減らし
て教師の数減らして……ってしたいだけなんや。上の考えは何部が廃部でもどうでも
ええねん。」

……はい?急に何を言い出すんだ?本音と言えば本音なんだろうが、だったら俺たち
の努力は一体……?」

「ちよつと待つてください。だったら文芸部や他の廃部になる部活がいくら頑張ったとしても」

「結果は変わらん。何を言ってもやっても変わらん。そりや廃部寸前の運動部が突然、全国大会優勝でもしたら別やけど。」

な、なんだと……。俺はついブチギレル。

「あんたそれでも教師か!?部活動をバツサリ切り捨てるだけじゃなくて努力ごと否定するのかよ!?勉強さえ出来てたら、他はこうやってグチャグチャにしても良いって言うのか!」

「鈴木くんストツプ!一旦、落ち着こ。深呼吸深呼吸」

叫んでしまった俺に対して、上田が言葉で止めにかかる。

石橋先生は目線は伏せているが、堪えている様子は無い。俺がキレても、関係ないといった感じだ。

が、冷静さを欠いたのは良くないな。上田の言うとおりに深呼吸を2回する。

「上田、ごめん」

「いいのよいいのよ。言いたくもなるわよね。そりや言いたくもなるわよ。表向きの廃部理由を聞かされて、それを避けるように頑張つて、それが実は無駄でした。なんて言

われたら怒りたくもなるわ。私も最初は怒った。」

上田のフオーももあり、気持ちは落ち着いてきた。

「だが、やっぱり許せねえ……納得出来る訳なんてない……」

多分、まだ俺は石橋先生を睨みつけている。石橋先生はやれやれという顔をしながら語りかけてくる。

「あのな……勘違いされたら困るんやけど、俺が廃部に決めたわけちゃうで。言わされてやってるだけや。ってそんなんでも同情されたくないし安っぽい味方みたいにもなりたくないから言わんかったけど」

「はい？なんですかそれ？」

意味が分からず、素に戻ってしまう。

「鈴木言うとおり、理論は破綻してる。アホやでこんなん。んなことに知恵回してる暇あったら部活の顧問で学生の面倒見てる方がええわ。」

「えっ……」

これが石橋先生の本音か……。

いや、まさしくこれが同情を誘う作戦の可能性も0ではないが、そこは言い出したらキリがないか。色々、気になることはあるが、まずひとつ、気になることをぶつけてみ

る。

「石橋先生……そこまで分かっているなら逆になんで、こんな廃部を進めるようなことやってるんですか? 丁寧の説明とか言って……」

「ん? これが仕事やからな」

「いやいや、先生なら生徒と一緒にあって廃部を覆してくださいよ! なんでそれが出来ないんですか?! ましてや自分でも理論が破綻とか言ってるのに……!」

俺は至極まっとうなことを訴えているつもりだが、石橋先生はため息をつき……数秒黙ったあとに語り出した。

「あのな……鈴木もそのうち分かる日が来ると思うねんけど、社会は理不尽で出来てるんや。俺は公立高校の教師や。今でこそ、こうやってなんちやって進学校やからええけど、偏差値30のカスみたいな高校にでも異動になったらどうすんねん?」

なんだそりや。ってか、色んな意味でヤバすぎる発言だろソレ。

「俺は教師になりたくてなってる。動物園の飼育員になりたいわけちゃうねん。」

「だいぶ、やばい発言のような気がする。つまり偏差値30の高校は教師じゃなくて動物園の飼育員って言いたいのか……」

「それ……先生の勝手ですよね」

「ああ、俺の人生やからな。」

石橋先生は開き直りとも取れる発言をし始めた。

「俺の人生やからな。俺のやりたいようにやる。お前らもそうしたらええ。廃部は学校としては決定やけど、覆すためにやるだけはやったらええねん。」

でも、それで色々やってるが、それは認めてもらえないから問題になってるんじゃないかなかったか？

「誰も活動を認めへんなんて言うてないで？」

「はい？」

「まあ上田の誘導があったとは言え鈴木は自分らで何とかしようとしてきたわけやん。その実績は認めてるから。廃部なんは決まってるけど、ちゃんとした理由も言わなかったやろ。」

「ちゃんとした理由……って部活動の数を減らして先生の数を減らして云々ってヤツっすか？」

「おお。最近はモンスターペアレントとかブラックなんかとかで教師になりたがるヤツがおらんから、採用試験もガバガバや。さらに教師の数は減ってる。この流れは止められへんし、だから部活動も削減して教師の顧問負担を減らそうやって流れは変わらねん。」

「で？」

「廃部の理由がそれって分かるんやったら、それに合わせた対処法も自分らで考えられるやろ?」

「いや、そんなすぐには考えられないですけど……だって今の話って先生増やすとかお金増やすとかめっちゃくちゃな……」

「そうやな。上が何とかする話やな。ただそれは出来ひんから何とかせえって言うてるんや」

そんなのギャグマンガの定番、大金持ちのお嬢様とかがいないと無理だろ。

もしかして、と上田を見てみるが……。

「生徒会にも私にも教員人事に介入する力なんて無いわよ?ただの生徒会長のJKだから……」

そりやそうだよな。最初から出来るなら廃部になんてならないよな。

にしてもここまで来ると別の疑問が出てくる。

「どの部活にもこんな無理難題をふっかけてるんですか?」

「いや、上田と文芸部だけやな。他の部活は表向きの理由だけで諦めたからな。」

確かにまともに活動してなければ「まあ、一律で決められたなら仕方ないか」で済ましていただろう。

1年前の俺だと多分そうなってる。

とはいえ、廃部は避けられないということ改めて知らされてもなあ……。

「さつきも言うたけど、文芸部のことは評価してるんやで。上田からの又聞きやけど廃部って聞いてから、刃向かってもきたし、ここでもこんだけちゃんとしやべれとるし。だからホンマのことは言つといたろと思つてな。」

なんか良い話風にまとめようとしているのか？

「あとな、部活は学生のもんや。どないしても残したいならやり方は自分で考えろ」

それで色々とやってきたあれこれを今、否定されたんだが……。

「否定したけど、糸口になるようホンマの廃部理由は教えたつたやん。」

「だから、それどうにもならんでしょ……」

「上が決めたんやから上……やから教育委員会とか知事とか仮病総理とかその辺が氏んだらええんちやうか」

石橋先生は急にどぎついことを言い出し、上田も俺も何も話せなくなり真顔になる。

石橋先生は数秒で笑顔になり

「嘘やってー。」

とか言い出す。いやそりや嘘じゃなきや困る。

「ただな、アピールすべきが誰かは分かったやろ。俺は仕事やから矢面に立つてるだけ

で、俺が『すごいなあ』って思うアピールをしてもあんまり意味はないんや」

なるほどな……。でも、それ無理難題にしか思えないぞ……。

「よし、ほなもう聞きたいこともないやろ?俺は職員室に戻るわ。」

「そう言うのと石橋先生は立ち上がる。確かに色んな意味で聞きたいことはなくなつたが……。

俺も石橋先生につられて一応、立ち上がる。

石橋先生は最初に見せていた丁寧な雰囲気に戻り

「本日は貴重な学生の意見をありがとうございます。ごさいました。」

と丁寧な口調で挨拶する。

「いえいえ、こちらこそ色んな意味ありがとうございます。」

俺は軽く皮肉も込めて挨拶し返したが、石橋先生は営業スマイルで振り返り軽くお辞儀して退室していった。

「鈴木くんお疲れさま。思わぬ方向になって大変だったと思うけどホントお疲れさま」

上田が優しく声をかけてくる。確かに……。説得するはずが流されていつてしまったぜ。上田は一応と、補足説明をする。

「私も最初は活動云々だと思ってたの。で、4月に生徒会の担当が石橋先生に変わって、最初は文芸部を認めてもらうために頑張ってたんだけど……そのうちに『確かにお前らの頑張りによく分かったけど、実はな』って急に関西弁で話し出してさ。ホントなんなの!?! って感じよ」

「まったくな……」

「とりあえず今のもふまえて虎谷さんと今後の文芸部のことも話さなくちゃいけないし、部室に戻りましょうか?」

「そうだな……」

俺は上田と共に部室に戻るようになった。

だがなあ……、唯一の後輩である虎谷にはどう説明したら良いもんだろうなあ……。

【24話】既成事実を作ったもん勝ち

部室に戻ると、虎谷は少し楽しそうな顔をしながら話しかけてきた。

「お疲れさまです。どうでした？」

「どうもこうもなんと説明したら良いものか……。」

「やっぱり石橋先生でした？」

「ん？あ、ああ……。」

「そういえば石橋先生は虎谷の担任なんだったな。」

「石橋先生、関西弁になりました？」

「え!?あ、なったなった」

「お〜!」

虎谷は石橋先生が関西弁になったことを聞いて楽しそうな顔をしながら音のない拍手をする。

「つてことは、あのめちやくちやな話を聞いたんですね〜」

「え?あ……確かにメチャクチャだった。つて虎谷も知ってたつてことか?」

「はい、ちよつと前に聞かされました。」

なんてこった。紛いにも部長の俺が一番、平和ボケな状態だったなんてな。

「で、どうするんですか？文芸部……」

虎谷はそんなことを聞いてきた。

「そうだよな……あまりにも……あまりにも、な話を聞いたわけで、やる気が出るか出ないかというところだ。」

だが、石橋先生は廃部が決まっていると言いつつも、廃部の理由が分かったならそれにあわせた対処法を考へるとも言った。文芸部を諦めろとは一言も言われていない。

それにこれは高校生活の部活だ。仮に本当に廃部になったとしても、そこまでのすべが無駄になるわけじゃない。現にこの半年、色々と発刊した同人誌は目の前に形として残っている。

「やるだけのこととはやるつきやないだろ。ここで諦めたら大人の事情に対して負けを認めることになる。虎谷はここで負けを認めたいか？」

「嫌ですね。」

「なら決まりだな。」

文芸部として新たな生き残りの道を模索することに決まった。

「はい！じゃあ改めてどうするか、話し合って決めましょう」

俺たちのやり取りを見ていた上田もそこに乗っかる。ホント、上田も入部してくれた

らいいのにな。

「つてことで私は生徒会から何か分からないか漁ってみるから、文芸部も頑張つてね！」
上田はそれだけ言うのと部室から出て行った。

あら……普段は三人寄れば文殊の知恵とか言つて残つて話し合いに参加してくれるのになあ……。

そんな風に思いながら俺は虎谷と席につき考える。

「そういえば、もうすぐ夏休みだが、夏休み明けどうする？月刊誌はやるか？意味があるかないか怪しいが。」

「やったらいいんじゃないですか？あれはあれで活動として必要だと思えますし。」

「そっか……部活が何やつてるか分からなくなったら、表向きの理由に潰されるのか……」

虎谷と話しながら、演劇部をチラツと見てみるとOBの庄司先輩が遊びに来ていた。
なるほど、上田がさっさと生徒会室に戻ったのはコレか？

「鈴木さん、そういえば文化祭はいつなんです？何するんですか？」

「そういえば夏休みが明けると文化祭が近づいてくるのか。それも考えなきやならんのだな。俺は虎谷に文化祭の時期と去年は何をやったか説明する。」

「今やつてることほとんど同じですね」

「言われてみればそうだな……まあ部活自体が同じだから仕方ないか?」
「そうですね……」

これにて文化祭の話は終了。

多少、去年より何かを付けるとしても根本的には変わらないよな。文化祭よりそれ以外で存続する方法を見出すか。

「あと夏休みどうします?」

そうだな、例年は活動無しだったが、そういうわけにもいかないだろうし。

「7月、8月も冊子作って配布します?」

夏休み中だし文化部しか校舎内にいないことを考えると、なかなか厳しいものはありそうだ。

どうしたものかと考えたとき、ちよつと前に虎谷がどつかに俺の小説を投稿していたのを思い出す。

「夏休みは冊子作る代わりにそういうのを探して、ありとあらゆるところに投稿しまくるか」

「え〜」

虎谷は若干、嫌そうな返事をしながらもすぐに部室のパソコンの電源をつけた。やる気満々じゃねえか。

「鈴木さんのボツ作品をまとめるだけですよ」

「いやいや俺だけじゃなく虎谷の作品も投稿するぞ」

「え〜」

また嫌そうな返事をするが本気の嫌がりというよりは、ただのリアクションという感じだな。

多分。

今、考えるともし何かで入賞でも出来れば、○○×入賞の虎谷（または俺）を輩出した文芸部を廃部なんて出来ないだろう。対外的なイメージが悪くなる。

この作戦、望みは薄いかもしれないが、かなり真つ正面から大人の事情に立ち向かったつもりだ。

既成事実を作ったもん勝ちだろ。

学校ホームページにも部活紹介のところにも廃部の話は載っていない。その状態で先に、すごい部活だとアピールすればひっくり返せる可能性は十分だ。

「問題はそんなにすごい部活になれるかどうかですけどね。」

虎谷はチラツとそんなことを言った。俺的には虎谷頼りでそれは出来そうかな、なんて思っていたりする。

気付くと下校時間になる。夏休みからの活動方針も決まったところで、今日の部活は終わり。

虎谷はいつものごとく最速で下校する。俺は下校……の前に生徒会室に寄るか。

上田が生徒会から何かのアプローチをしてくれてるみたいだな。それも聞いてから帰るとしよう。

【25話】 廃部第2弾候補リスト

生徒会室に入ると上田は何やら紙を眺めていた。

部室から出て行つた理由は庄司先輩がいたからだと思つたが、それとは別に真面目に上田は上田の出来ることを考えてくれていたみたいだ。

本当にありがたい。

俺が入つてきて、これまでの真剣そうな顔からいつもの笑顔に戻つた上田は話しかけてくる。

「お疲れ〜文芸部は何か出た？」

俺は文芸部が夏休みの間、何かに入賞できるように手当たり次第に投稿する方針であることを説明した。

「なるほどね〜。まあもし本当に入賞出来たら全校集会で賞状渡すから」

「マジか。それだいたいハズいぞ」

「その瞬間を写真に収めて生徒会便りみたいなものにも載せてあげるわ。感謝しなさい」

♪
イタズラっぽく笑う上田。そういえば運動部が何かの大会で勝ってきたらそんな事

やってたなあ。俺には無縁だと思って気にしてなかったが、まさか同じ舞台に立てと言われることになるとは……。

「で、会長さんは何か見つかつたか？」

「だから会長じゃなくて名前で良いつてば〜」

と笑つたあと、上田は真顔になつて話を進める。

「文芸部他、少人数の部活を廃部した後の廃部第2弾候補リストを見つけた……」

な、なんだつて。上田は真顔で生徒会室に鍵をかける。

これは他の誰かに聞かれてはマズい話のサインだ。

「第2弾は4年後くらいに廃部をメドに、今はまだ素案つて感じであくまで廃部も候補であつて決定ではないみたいだけ……」

「4年後なら俺たちどころか今の在校生には一切、関係ない……とはいえ見過ごせないな。つてか、その情報つてどこから仕入れたんだ？」

「石橋先生が忘れていったUSB……」

「なんてこつた……つてかそんな機密情報忘れるなよ……先生のUSBつてことは他にも生徒の成績とか色々まずいものが……？」

「それは一切無くて、この廃部案だけ。だから多分、石橋先生はわざとこれを忘れたんだと思う。私に廃部案を見せるために……」

「なんでそんな……」

「石橋先生はあんな人だから……自分から戦うつもりはないんだわ……でも、さすがにおかしいと思ってる。だから私たちに託したいんじゃない？」

「なるほど……ちなみに廃部の候補って……」

「かなりたくさんあるわよ。なんなら吹奏楽部みたいな部員100人を超える大所帯も対象だわ」

「なんだそりゃ……んなもん暴動レベルだぞ。よく知らんがうちの吹奏楽部ってレベル高かったろ？」

「ええ……賞状渡しの常連よ。」

「なんでそんなとこまで廃部なんだ？」

「本音は顧問を減らしてどうこうっていう大人の事情だと思うけど、表向きの理由は考えてる途中みたい。言っちゃ悪いけど吹奏楽部よりかなり人数が少ない茶道部や漫研は廃部候補じゃないのも気になるわ。」

確かに、その差は気になるが、最終的にはうちの高校の部活が全部無くなりそうな勢いだな……。

「私はこの廃部第2弾候補に選ばれた部活と選ばれない部活から共通点を見つけてなんとかならないか調べてみようかな……って思うんだけど」

「よろしく頼む。俺たちは真つ向勝負しかできないからな。」

「さつ帰りましよ。もう下校時間だし」

帰ろうとしたが、その前に一つだけ。さつき気になったことを聞いてみるか……。

「なあ、上田。さつき部室からすぐ出て行ったのって……」

「あー、見られちゃった？」

てへっ☆とでも言うような笑顔で立ち止まる。

「うーん、そうね。鈴木くんには言っておこうかな。私ね、庄司さんと別れちゃったの。」

「やっぱりな……。まあ庄司先輩の二股三股の話を見たりして俺としては、良かったと思うが……。それは黙っておこう。上田の話は続く。」

「結局、大学生の彼女とは別れてなかったし……。なんか、そもそも『浮気された』って言うよりは『私が浮気』だったみたい。なんか、私が告白したときにも別の彼女がいたとかなんとか……。もうバカらしくなっちゃってさ。ならその大学の彼女とお幸せに。って言って別れたの」

上田は笑って言うけど、内心はどうなんだろうな……。

「なんだろう。私がやることってだいたいわく行かないのよね。」

上田は笑顔で話すが目は笑っていない。確かに演劇部をやめた件も含めて、何かしらうまくいかないことはあるんだろうなあ。

「なんだつたらゆっくり話を聞こうか？」

「え？んー悪いわよ……鈴木くん、忙しいでしょ？」

「俺は暇だぜ？ 駅前のワクドナルドでもミセスドでも繁華街のサン〇クでもいいし、上田が忙しいなら後日でも良いし、言いたくないならナシでいい」

我ながら強引な誘い出したが、上田は数秒ほど考えた後、答える。

「ん。じゃあ駅前のワックに行きましょう。」

俺たちはそのまま、下校して駅前のワクドナルドに向かった。

放課後に上田と2人きりでどっかに行くつて案外、記憶にないな。

【26話】夢だった……過去形か……。

ワクドナルドで適当にポテトをつまみながら席に座る。

学校ではにこやかだった上田は、今はあまり見ない顔をしている。

普段、見せない顔を見せてくれているのだが気分は複雑だ。

「とりあえず、お疲れさま。なんて声かけたらいいか分からないけど」

「なんか、ごめんね。」

「ん？俺は別に大丈夫。それより上田が心配だから……」

「だいたい、俺は庄司先輩のクズっぷりをチラチラ聞いていたおかげで今日の話を聞いて、ある意味でホッとしたくらいだ。」

「私は大丈夫よ……。あ、大丈夫って自分から言うときには大丈夫じゃないわよね。うん、でも心配ないわ……。ちよつとシヨックだったのは間違いないけど……」

「まあ浮気だもんなあ……」

「そこはもういい……というか仕方ないんだけど」

「いいのかよ!？」

「真相を知らないまま平和に過ごしてたことがね……。一応、4ヶ月付き合ってたのよ？」

それで他にも女の子がいたことを見抜けなかった……っていう方が悲しいわ……」

一応、俺は聞き役だからな……。何も突っ込まないつもりだ。まあぶれるかもしれないが。

「私さ、何やっても案外うまくいかないことが多いのよね」

「そうか？」

聞いてはみるが、少なくとも庄司先輩との件はうまくいかなかった判定なのだろう。

演劇部を辞めたのも何かがあまくいかなかったのだろう。

生徒会長として大人の事情に抗いたいと言いながら現状では文芸部の廃部方針は変わらず、うまくいっていないといえそうなのかもしれない。

上田は力無く笑いながら話を続けた。

「ほら、鈴木くんでも分かるくらいうまくいっていないでしょ？」

もちろん、その裏にはうまくいった事象もたくさんあるはずだが……。

「私さ、庄司さんの役者としての部分しか見てなかったんだと思う。」

「役者としての部分？」

「カッコいい役でもコミカルな役でもなんでも出来ちゃうでしょ？」

確かに小学生の役なんかは練習でやってたしな。

「それに他の人のお芝居をよく見てるし、それでいいアドバイスをしたりもする。言っ

ちやアレだけデコボコなメンバーをうまく整えて舞台を作るし、求心力もすごい。」
他意はないと思いたいが、そう褒めているのを聞くのは少しつらい。

「そういう表向きの部分に惹かれていって、実際、庄司さんがどんな子が好きとか演劇以外がどんな人なのかとか、そういうのが見えてなかったのね。私は……」

「なるほど……。」

「職場恋愛はよくない みたいに言う大人たちの気持ちがおほんの少しだけ分かったかな。」

「ん？そういうえば、上田が演劇部辞めたのって部内恋愛禁止とかそういうことなのか？」
俺はさりげなく、ずつと気になったことを聞いてみた。

上田には悪いが、今なら答えてくれそうな気がしたからだ。

「ん？ああ部内恋愛禁止とかはないし、それはほとんど関係ないわよ。うーん……
まあ今思えば関係なくもない？って感じだけど……」

「ん？どういう？……まあ嫌なら言わなくても良いんだけど」

「……嫌つてことは無いんだけど……」

上田はそう言いながらも、なかなか打ち明けてくれない。

これが今の上田と俺の心の距離ってことか……。

「まあ鈴木くんには言っても良いかな？ 恥ずかしいから皆には言わないで欲しいんだけどね……」

かなりの間が開いてから上田はそんな事を言い出す。

気にはなっていたし、言いふらすつもりもないので頷いて話を聞く。

「実はね。私は将来、役者になるのが夢だったの。」

夢だった……過去形か……。

「で、演劇部に入ったの。安直でしょ？」

まあ……でもそこはそれで普通だと思いがな。

「役者って色んな役で色んな人になれるし、それに観てくれた人を笑顔にしたり泣かせたり出来るっていいなあ……って。まあそれもありきたりな話なんだけど。」

確かにありそうな話だが、それも普通に良いと思うんだけどな。

「で、幼稚園とか小学校とか中学校で何かお芝居とかしたら、みんながチャホヤしてくれるじゃない？」

確かに……批判的にドンドン責められるってことはないよな……。

「それで私は特別だし、さあドンと行こう！ って感じで演劇部に入部したのよ。じゃあ周りは先輩も同期も、みんなすごくて……私なんて普通以下……いや演劇部で一番下

？みたいにする感じちゃって……」

さすがにそれは自己評価が低すぎだろ。

俺は1年の時から演劇部を見てきたつもりだが、特別に酷いとかを思ったことは一度も無いぞ。

「まあ客観的に見たらそこまですたのかもしれないけど、私からしたらもう悲惨よ。これまで自分は特別って思ってたわけだし。」

まあ確かにこれまでが打ち砕かれたみたいな感覚はあったのかもな。

「今思えば、庄司さんは単に演劇のためだったんだらうけど、私がド下手だから夜遅くまで練習に付き合ってもらったりもしてたのよ。」

そして惹かれていったわけか……。

なんだか、廃部の話を聞いてからの俺の状況に似てるな……。

「ただ私も公演が近付くと毎日、そうやって迷惑をかけるのが申し訳ない気がするし……何より、そういう状況に心が折れちゃった。鈴木くんがどう思ってるか分からないけど、私は結構打たれ弱いんだよ……。役者になりたいって気持ちはもちろんあつたけど、役者の世界は厳しいじゃない？」

確かにテレビとかでも売れるまではバイト掛け持ちとかって話もよく聞くな。

「最初の私は『自分には才能もあるし特別』みたいな気持ちもあつたから多少つらい下積

みがあつても頑張れる……みたいに思つてただけけど、その根底が崩されてね。」

で、役者になりたいという夢が過去形になつたのか……。

「そういうこと。お芝居するのはやっぱり好き。楽しい。でも私なんか身を置く世界じゃないというのも分かつてる。……その心の中のすれ違いが辛いから、逆に演劇が出来ないつてなつてね。それで演劇部を退部したのよ。」

ん……なるほど。

完全に自己都合で誰かと揉めたりしたわけじゃないから、人間関係は良好なままだったのか。

「役者になるのも諦めて、演劇部を辞めて……。普通に進学して就職して普通に生きよう。そう思つてた時に、生徒会長に抜擢されて。私は自分には芽生えないことが分かつたから自分でその芽を摘んだわけだけど、先生が無理矢理に芽を摘み取るなんて許せなかつたから、文芸部の廃部阻止に動いたのよ。」

自分で自分の芽を摘み取つたつていうのが悲しいな……。ただだからこそ同じ思いを他人にはして欲しくなかつたのか……。俺としては上田にもそんな思いはして欲しくなかつただけだな。

「はい、私の内緒話は終わり♪もう良い時間ね。帰りましょうか」

言われてみるとワクドナルドに入って1時間くらいが経つていた。そうだな、帰る時

間だな。

「次は鈴木くんの内緒話を聞くから覚悟しててね♪」

上田は普通の笑顔に戻って帰り支度を始めた。

なんか久しぶりに見た気がする顔で安心する。

……ん？ 次の時は俺が何か暴露しなきゃいけないだど？ トンデモ爆弾を投げ込まれたな……。

【27話】♪僕の風、僕の風、僕の風～♪稼げる男に僕はなる～♪

上田の真相告白から数日。

早いもので、もう終業式だ。明日から夏休みとなる。

そんな今日は上田から呼び出され虎谷と2人で生徒会室に向かうことになった。

こないだ語った夢の話……とかではなく、第二次廃部候補の演劇部に聞かれたくない話、聞かれたらマズイ話とのことで、おそらく上田が何かに気付いたということだろう。

「鈴木くん、ご名答〜。」

やっぱりな。上田はなにやら印刷した資料を俺と虎谷に見せてきた。

「これ、生徒会の部活ごとの予算資料とかをまとめたんだけど」

うーん……俺にはこういう難しい書類はどこをどう見たらいいか分からん。虎谷も珍しく少しだけ渋い顔をしている。

「私、こういう資料とかを読み解くの苦手なんですよね。」

虎谷はそんな事を言った。虎谷でも苦手なものがあるんだなあと少し意外に思う。

「端的に言うとお金の話よ。」

わあお、大人の事情の次は金の話かよ。やっぱり大人の事情じゃねえか。

「うちの高校は部員の数で出せる部費が決まってるんだけどね。」

つまり部員が多いと支出する金額も大きくなると。

「もちろん額は私たち個人からしたら大きいけど、学校的にはそこまで大きくないわ。事実、吹奏楽部は学校からの部費だけでは活動出来ないから、部員も月いくらって払ってるらしいし。」

へえ、そうなのか……。言われてみればコンクールとかでデカイ楽器運んだりとかって結構な金額がかかるだろうしな。冷静に考えれば当然なのだろう。

「この部費っていうのは部員の数でいくらって決まってるから、大所帯な支出する金額も大きくなるのは当たり前で、問題はこっちの枠を見て欲しいの。」

上田は資料の支出額ではなく、雑益と書かれた枠を指差す。

なんだ？これ……。だいたいこの部活は0円だがいくつかの部活で金額が記されている。

金額が記されている部活は確か上田が廃部候補ではないと言っていた部活だ。

「例えば漫研さんだと同人誌を販売したり、茶道部さんもお茶会を開くわよね？いやらしい言い方をすると、そこでお金を取っているのよ。運動部でもごく一部、文化祭で3Pシユート決めたら景品みたいなイベントをやったりしてるのね。そういう何らかの

方法でお金を取ると、それが雑益としてここで扱われるの。」
なるほどな。

俺の知る限り吹奏楽部のコンクールやら校内演奏会やらは当然のように無料だったし、演劇部の舞台も校内公演は無料だったはず。

上田と観に行つた地区大会も無料だったしな。

「どうやらこんな風にお金を取ってくる部活を残したがっているみたいなのよね」

上田は真顔でそんな事を言う。

まあ確かにお金は大事だし、入ってきたお金が先生とか教育委員会のポケットにないないされるなら部活だって残そうって気になるか。

「まあ大人たちもさすがに吹奏楽部取り潰しにする口実は思い付かなかったからナシになつたみたいだけど……校内の演奏会とかに適当な理由をつけて有料化しようみたいな企みがあるみたいね。」

高校生の部活でお金を吸い上げようなんて、なんとというか最低な話だな……。

「健全なJKビジネスとか言ってるみたいね。石橋先生もさすがに『学生使つて金儲けするんはFラン大学運営のすることや』って反対してくれてるみたいだけど……」

「Fラン……まあそこは置いとくにしても『健全なJKビジネス』っていう言葉がそもそも健全じゃねえよ。」

「そうね。私たちのところまで話が降りてくる時には『学生の時からお金の大事さを学んで欲しい。』みたいな話になると思うわ。」

上田はそう言いながらため息ひとつ。確かにそんな大義名分作られたら従わざるを得ないよな。

すると虎谷はポツリとこんなことを言った。

「じゃあ私たちもお金を儲けたら存続ってことになるんですかね?」

確かに乱暴な理論だがあり得るかもしれん。上田も神妙な面持ちで頷く。

「そうね。それが廃部を阻止するってことである意味では一番、現実的かもしれないわ……」

今回の廃部騒動の一番の敵は大人の事情だ。金で叩くのが一番、現実的だがその金を用意するのは現実的な話ではない。

「生徒会長としても一個人としてもJKビジネスに手を出すのも手を出させるのも看過出来ないしね。」

そりや当然だろう。俺もJKビジネスをやれなんて言いたくない。

「じゃあ鈴木さんがやったらいいんじゃないですか?」

虎谷がそんな事を言う。

「え？俺？あれか、繁華街で走ってるトレーラーのやつか？」

確か延々と音楽を鳴らし続けるウルサイトレーラーを繁華街で見たことあるな。

上田も思い当たったようぞ。

「ああああの『僕の風、僕の風、僕の風～♪稼げる男に僕はなる～♪』ってヤツね！」
とご丁寧に音楽を口ずさみながら言う。いったい何の仕事かサツパリ分からん音楽だ。

「じゃあ鈴木さん、頑張ってください。」

虎谷は笑顔で俺にそう言ってくるが、待て。俺はやるなんて言っていないぞ。

「生徒会長として特別に許可するわよ♪」

上田も笑顔でそんな事を言う。

そんな得体の知れない仕事、許可するんじゃないやねえよ！俺はやらないからな！

断固拒否の俺を見て、わざとらしくやれやれというような表情の2人。

さては2人とも俺で遊んでたな？

「ごめんごめんってば〜」

上田は笑いながら謝罪、最近はきつそうな表情を浮かべてることが多かつたし、この笑顔を見てると許すしかないな。

そして虎谷は一通り、落ち着いてから言った。

「じゃ、文化祭で文芸部も同人誌を売りますか。」

文化祭の同人誌を”売る”だと？

いつもは無料でやってるから気付かなかったぜ。

というよりは、あれで金を取るのか。

「あくなるほどね。灯台下暗しだったわ。」

上田も一瞬フリーズしたが、虎谷の提案の意味が分かったようだ。

「つてそれ売れるのか？」

俺が根本的な疑問をつい口に出してしまふ。

「『売れるのか？』じゃなくて『売る』んですよ」

虎谷はサラッと恐ろしいことを言う。さらに上田も続いて言う。

「そうよ、高収入アルバイトとかより断然いいわ。それに文化祭が終わったら生徒会長も交代だし、鈴木くんも引退でしょう？」

そういうえば文芸部の引退っていつなんだ？まあそれこそ後で考えたらいいか。

「正直、生徒会長の私がこれだけ暴れたから次は100パーセント先生の言いなりにしかならない会長になるだろうから、この文化祭が最後のチャンスよ。」

なるほど、確かに可能性はある。

そもそも1年生の虎谷しかいなくなれば、新しい会長とは同期ですらないから、去年

みたいにい会長から働きかけてきてくれる可能性もガタツと減るわけか。

俺の顔を見て、何を察したのかは分からないが、上田は続けて言う。

「まあ文化祭の出店でお金を扱うのは色んな部活でやってるわ。あんまり深く考えないで。」

お金を扱うことより、そもそも金出してまで受け取ってもらえるのがプレッシャーなんだが……。

「そこは部長でしょ。なんとかがんばってください」

虎谷からの手厳しいツツコミが入る。そうか……俺、紛いなりにも部長なんだよな。

「じゃ決まりね！私に漫研さんから生徒会への報告書見て価格帯とかページ数とかそういうのを研究しとくから！がんばってね」

上田が後方支援をしてくれるとのことだが、作品を作るのは俺たちだ。大変なミッシオンを背負いこんだな……。

この後、俺と虎谷は部室に戻る。

文化祭向けの準備は、書くのは夏休み中からだが製本したりするのは夏休み終わってからで良いだろうということになった。

そして夏休み中の活動は週1回に決まった。

そもそも書きためるのは家でやって、部活では投稿先を探して投稿するというルーティーンに決まった。

これまで長期休暇に活動したことなんてないからな。これだけでも非常に大きな進歩と言えよう。

「そういえば売れた時のお金ってどこに行くんですかね？」

虎谷はそんなことを聞いてきた。言われてみれば、どこに行くんだらう。

文化祭でクラスの模擬店とかもやったが、その売上金がどこに行っただかは分からんな。

「その行き先こそ大人の事情ですかねえー」

虎谷はそんな風に言う。

そうだな、それこそ生きて高校卒業したければ気にしない方が良さそうだ。

この後は、小説の投稿先の期限などを確認して今日の活動は終わりとなった。一応、何日の部活でどこに投稿するかを決め効率的にあちこちの賞やなんやに投稿する予定だ。

「また『クズな俺と今カノと元カノ（未来形）』くらいの名作が読めるのを楽しみにしてますね。」

虎谷はそんな事を言っているが迷作の間違いだろ。

「そういえば、男の人って1回は浮気するって聞いたことあるんですけど、本当ですか？」

「ぶっ！」

つい吹き出してしまった。とある先輩の顔が浮かんだからだ。

断じて俺自身のことではないぞ。

「まあ、人によるんじゃないか？」

我ながら無難すぎる回答をしていると思う。

「ふうーん。」

俺をジト目で見るんじゃない。だいたい浮気以前に本気の方の話がないっての。

……ん？そういえば、上田って庄司先輩と別れたんだった。大事な部分を忘れてたぜ。

「あ、鈴木さん悪い顔してる」

「どういう意味だよ。」

そんなたわいのない会話をしながら、今日の部活は終わった。明日から夏休みか……。

そんなこんなで下校時間を迎える。

「ではお疲れ様です。また来週〜」

虎谷は相変わらず、めちやくちやなスピードで帰る。

俺は、夏休みの文芸部の活動予定を上田に伝えに行くとする。

強制ではないんだが、気にかけてくれてるし、伝えといたら遊びに来たりも出来るだろうからな。

「つてことで、もし時間があつたら文芸部にも顔出してくれ」

「それを伝えに？ありがとう。でもその連絡ならSNSでもよかつたんじゃない？」

うげつ、他意はないと思うが痛いところをつかれた。

こうなつたらヤケだ。自分の気持ちにはケリをつけておきたいしな。

「まあまあ、そうなんだがな。せっかくの夏休みだし近いうちにどつか遊びにでも行かないか？という誘いも兼ねてな」

ここでキツパリ断られたら、俺もどうでもよくなれる。上田は呆れたような顔をして俺を見ている。

「あのねえ……私たち受験生よ？」

そうだよな。ダメだよな。さあ振られておしまい。

「まあ1日くらいいいか。普段から勉強してればなんてことないもんね。」

「へ？今なんど？」

「乗ってあげるわよ。どんな企みがあるのか知らないけど……ま、悪いこと考えてる訳じゃないだろうし。」

傷心の上田につけ込もうという、とつても悪いことを考えてるんですが。

「じゃあ予定確認して連絡するわ。よろしく、期待してるから♪」

しかも期待された。もしかして上田も俺のことが好きなのか……。

んなわけないな。俺がそうあってほしいと思っただけだ。

「じゃ帰りましょ。下校時間だわ」

そう上田に促され、下校した。

よく考えたら断られなかったのは波風を立たせないようにするためで、後で『行ける日か無い』とかって返事が来そうな気がするな……。あまり舞い上がりず、のんびり構えよう。

【28話】デートと言っても差し支えない

今日は夏休みが始まって数日の平日、俺は繁華街近くの駅までやってきた。

時刻は昼前の11時………より1時間前の朝10時だ。

なんでこんな猛暑の夏まつただ中に俺はこんなところにいるのか。

理由は簡単である。

上田から実際に暇な日の連絡が来たのだ。

そして今日、午前11時に待ち合わせることになったのである。

まさか本気でOKされるとは思っても見なかった。

これは、デートと言っても差し支えないのではなからうか……やめとこう、向こうは何も考えずに単に予定を教えてくれただけだ。

ちなみになんで集合時間の1時間前にいるのかと、今日発売の新刊が欲しいとか、先着2000人限定のお菓子が食べたいとか、そういう理由ではなく単純に楽しみすぎて着くのが早過ぎただけだ。

小学生かよ、俺。

この1時間の間にとりあえず、考えてきたプランを再度確認する。

気合いを入れすぎた結果、分刻みのスケジュールになってしまった。

上田がゆっくりしよって言えばこのスケジュールは闇に葬ることになるが。まあそれくらい想定の内だ。

……にしても待ち時間って暇だな……。

10時45分、集合時間までまだ15分もあるのに上田はやってきた。

マジで来てくれた……こんな暑い日に、しかも集合時間の15分も前に。

「おはよ。早いわね!」

「おはよう。上田こそ早いじゃん。」

「まあ一応、10分前に着くようにって思ってね!さらに5分前行動したら、今着いちやった。って鈴木くんの方が早いじゃん!何時からいたの?」

「10時からかな」

「はやっ!?そんなに楽しみで?……ってそうじゃなくて、どうせ新刊か何かの発売日でしょ?」

「ん?ああ、まあそんなとこだな」

と、……でヒョってしてしまうからいけないんだよな……。分かつちやいるが……。

「で、どうする？どっか行きたいところとかある？」

「一応、予定は考えてきたんだが」

「ホント!?へ〜結構、気合入れてきたのね。なんか嬉しいわね〜」

「気合を入れすぎて分刻みのスケジュールになった……」

「つてええ……。まあそこまでキツチリにしなくても適当で良いんじゃない？その方がのんびりできるし。つてか暑くてキツチリキツチリなんて出来ないわ……。」

「だな。俺も予定立てたは良いが暑さを甘く見ていた。とりあえず暑いし、どっかで涼むか？」

「そうね。モールの中をフラツとしましよ」

猛暑の屋外にいるのはキツいな。

2人で近くのショッピングモールに入る。

「とりあえずウニクロ寄つてもいい？」

「お?いいぜ」

そういえば前は虎谷とウニクロに行ったな。

「せっかくだし、鈴木くんを選んでもらおうかなあ〜」

クルックルツと回りながら、軽くステップを踏んでウニクロに向かう上田。

かわいい、ヤバい。
やっぱり好きだな。

あの件で忘れようとしても無理だったしな。

向こうは俺をどう思っているんだろうな。ただの友達くらいなのだろうか。

ウニクロであれでもない、これでもないと何やら選んでいるようだ。

「う〜ん部屋着をね〜……何か良いのがないかなあ……って。ねえねえ！どっちが良いかな？」

そう言ってTシャツを2着、見せながら話しかけてくる。ハムスターと無地……どっちもいいんだが……男の子としてはハムスタープリントの方を推したくなる。理由は察してほしい。

「って、鈴木くんどうしたの？もしかして部屋着だから誰かに見られるわけでもないのに………みたいなこと考えてる？」

「ん？違う違う。普通にどっちが良いかなあって」

「ホント？『部屋着見せる相手もないのにw』とか思ってたない？」

「思ってたない思ってたない。ってかいけないのか？今度は誰とか」
いたら今度こそキツパリ諦められるが。

「いないわよく。しょ……Sさんのことはもういいんだけど、だからハイ次！つて探すのも何か違うかなって。自分から行くのはちよつと控えめにしようかなって」

わざわざ名前を伏せなくても……本人からしたら消したい記憶なのかもな。

しかしまあ、こう言われると、神様はどうしても俺に諦めさせたくないのかもな。なら、もう玉碎覚悟で突っ込むしかないだろうし。今この瞬間ではないが。

「とりあえずTシャツはやっぱりハムスター柄かな。かわいいし」

「そう？じゃあコレにしちやおうかなあ〜」

一旦は会話の中身を最初に戻す。いつかはハッキリしときたいが、さすがにウニクロの店内で言うのはおかしいだろう。

サクツと会計を済ませた上田は小走りで俺の元にやってくる。

「お待たせ〜」

いいなあこの風景。これだけでも俺には十分過ぎる幸せな景色だ。

「そろそろお昼ね？ちよつと早いけどお昼ご飯にする？」

「おつ、そうだな。何か食べたいものとかある？」

「ん〜パツと思いつかないわね〜立ててきた予定表はどうなってるの？」

「11時52分にどこかの店に入るとはきめているが、どこかは決めていない」

「え〜ん〜じゃあ……どうする？」

「困ったときはサイ世リヤ……でもいいかな？」

「賛成〜！」

いつもいくような場所なので提案するのは少し勇気がいったが、上田は気にしないみたいで助かった。

こうして2人でサイ世リヤにやってきた。早速、適当な料理とドリンクバーを注文し長居する体制になる。

「鈴木くんは座って待ってて！私、鈴木くんの分のドリンク取ってくるから！」

「いや、いいよ。自分で行くし」

「いいって！いいって！ほら、荷物番しててほしいから気にしないで！」

上田はそう言いながら、めつちや笑顔でドリンクバーに向かう。なんか申し訳ないな、とは思いつつも何故かうキウキしてる上田の申し出をあまりしつこく断るのも悪い気がしてお願いしてみる。

「そういえば、なんの飲み物がいいか希望は聞かれなかったな……。」

「なんか急に嫌な予感がしてきた。」

しばらくして上田は白い半透明な飲み物を持って帰ってきた。見た感じは普通の飲み物に見えるが……。

「どうしたのー？変な顔して」

上田に声をかけられ、とっさに返事をする。正面から何の飲み物が聞いてみるか……。

「ん？ああサンキュ！ちなみに何だ？……まさか白ワインか？」

「いやいや、さすがに会長の立場でお酒は勧めないって。これはただの白ブドウジュースよ」

ふう、良かった。『飲んでみてのお楽しみ』とか言われたらヤバすぎるからな。

「あとはハイ、これ」

上田はそう言うところからタバスコを取り出してきた。そこに店員もやってくる。

「お待たせしました〜こちらマルゲリータでございます」

「は〜いありがとうございます」

突然現れたタバスコにポカんとする俺を差し置いて、上田なニコニコとピザを受け取る。

「ん？しようがないなく私取り分けてあげるわよ〜」

えらく上機嫌で上田は俺の目の前にあった皿を取り上げ、そこにピザを一切れ（というのだろうか）を乗せる。

実際に手が良い。

そして、俺にそれをくれる……前に手に持ったタバスコをドパドパっとかける。そし

てそれを俺に差し出ししてきた。

「えっ？上田さん……？これはどういう……」

「時にはスパイスも必要だよ♪はい、どうぞ♪」

上田は、いつにもまして良い笑顔で真っ赤なピザを渡してくる。

えっ……これを……？とてもヤバい雰囲気かしらないんですが……。

「ん？食べさせてほしいの？しよ〜がないな〜はい、あ〜ん♪」

上田はピザを取って俺に食べさせようとしてくる。

が、男というのは単純な生き物でこうされるとたとえ劇物が目の前にあるとしても口を開けてしまうのだ。

したがって、俺は上田の『あ〜ん♪』の後から記憶がない。

ピザ（と思われる赤い物体）を食べる前は端から見ればバカプルルだな、とか思っていた気がするんだが……。

多分、数時間は経っているのだろうが次に記憶があるのはサイ世リヤを出たところだ。

うん、幸せ過ぎて記憶がないんだと思う。

なんしか気付いたときには、上田はプンプン怒っている。

「もう、ワリカンでいいって」

「まーまーまーまーそこは一応、俺が男だし」

「そういう考え方ってもう古いんじゃないかなあつて」

「じゃあ、まあ今回は俺が誘ったんだし」

「んーそうじゃなくて……じゃあハイ、ごちそうさまでした！」

「どういたしまして」

「次は私がおごるから！大人しくおごられなさいね！」

「ういっす」

なんとか、俺の体裁は保てたかな……。

「次どうしよつか？」

おっ……ここで解散にならない。

おごるワリカン問題はそんなに悪影響は与えてないんだな。よしよし。

「なあ、上田はゲーセンとか行ったりするか？」

「生徒会長としてそのような風紀が乱れる場所は……なーんて言わないわよ。ゲーセン

行く？」

「おっ！じゃあ行くか」

流れでそのままゲームセンターへ向かう。

そうだな、気張って何かをするのも良いかもしれないがゆるくゲームセンターで遊んだりするのもいいよな。

「ちなみにさ、鈴木くんはクレインゲームとか得意？」

「まあ得意なわけがないよな。」

「そっかー。私も苦手なだけだね。欲しいのがあるとなついやつちやうのよね」

なんだか、本日二度目の死亡フラグが立った気がする。

「あ、鈴木くん見て見て！コウテイペンキンの赤ちゃんに似てるイルカのキャラクターのぬいぐるみがあるわ！」

おお……フラグ回収が早くないかな？

「このキャラ好きなのよ！ちよつとやつてもいい？」

「おう。頑張れ」

上田は数百円流しながら、イルカのぬいぐるみを落とそうとするが、なかなか落ちない。

「悔しいわね……あと100円あれば取れそうんだけど……。」

そう言いながらももうすぐ1000円に達しそうだ。好きな人が目の前でクレインゲーム破産するのを見たくもない。俺が代わるか……それこそが俺が死亡フラグだが。

「あーもう……」

「ちよつとやってみても良いか？」

「かなりアームが弱いわよ……」

「まあもともと景品をくれーんゲームって言うくらいだから……」

「寒っ!？」

誰かのギャグをもらバクリした結果、大火傷をした。

が、それはさておき、とりあえず500円を投入する。500円なら6回プレイ出来るしな。

「豪快ね……1回で取れたらって思ったらなかなか500円一気には入れられないわ……」

「アーム弱いんだろ……長期戦ならこうしないともつたないからな……」

そう言いながら1度目チャレンジ。アームはイルカのぬいぐるみを掴み、そして離さないままポトン。ありや、まさかの一撃か……。

「えくすごいつ! いいなあいいなあ」

「ほい、プレゼント」

「えっ!?! いいの!?! 悪いわよ?」

そう言いながらすでにイルカの背びれを掴む上田。

「まあ元からそのつもりだったしな。」

「ありがとうくカバンに……あれ入らないわね……」

上田はイルカを無理やり、カバンに押し込もうとしていたが、そのうちに諦めてゲムセンターから袋をもらい持ち運ぶようにしたようだ。

【29話】 ワンチャン

この後、ボンゴの達人など適当なゲームで遊んでから、喫茶店に入ることにした。

店の外にある食品サンプルでパフェの上にケーキが乗った見るからにヤバそうな食べ物に上田が反応したからだ。

入店し席に案内され店員が注文を取りに来る。

「鈴木くん甘いのがイケる?」

「まあだいたい……」

「じゃあショートケーキNYカットケーキパフェを2つでお願いします」

さて、食品サンプルではSNS映えしそうなヤバイヤツだったが、どんなものが運ばれてくるかな……。

しばらくして店員が高さ30cmはあろうかという物体を持ってきた。

パフェの上にドスンとケーキが乗った食品サンプルで見たヤツだ。いや、食品サンプルよりもワンチャンさらにデカいかもしれん。それが俺たちの目の前に置かれた。

「思っていたより大きいわね……」

「なんかパフェからケーキがはみ出してるし」

どうやって食べるんだよコレ。

一応、取り皿も渡されたが……、大人しく取り皿にケーキを落として食べることにする。

まあ見た目はSNS映えだからこういう飾りつけになるんだろうな。

「え？このままいかないの？」

上田はパフェからケーキがはみ出した部分から手を着け始めている。よくそのままいくな。

「ん〜！おいしい〜！」

そうだな。にしても幸せそうな顔してケーキを食べるもんだ。

しかもはみ出したケーキも落とさず、うまくすくっている。ものすごい器用だ。

「やっぱり甘いモノはいいわね〜！」

「確かにうまいな。これはいい」

ギツシリとクリームが詰まったケーキを食べ進める。

これはいろんな意味で破壊力抜群だ。

「上田は甘いものが好きなんだな」

「そうね〜いろんな意味で甘いモノが好きかしら」

「いろんな意味？」

「スイーツはもちろん好きだし、他には甘過ぎる将来の夢とか?」

「つてそんな触れづらい自虐ネタかよ」

「まあ見通しと自己分析は甘かったわね」

中学生の自己分析とかがしつかり出来過ぎていたら逆に怖いわ。

「上田はもう役者になる気は無いのか?」

「無い!!……………けど、そんなきれいさっぱり諦められるものかという正直、微妙ね

……………でもまあこのまま大人になって、まあまあな会社に就職して、それっぽく……………つ

ていうのも、悪くはないかな。それも一つの幸せよ」

なんとなく本心じゃないなあ、と直感する。

が諦めたからこそ、こんな風に言い聞かせているのかもしれない。

俺は1年生のとき、同じ部室で上田のことはあまり印象に無い。

つまり特別に大根役者だったとかって言う訳じゃ無いはずなんだが……………。

本人としてはそれでは不足なんだろう。

「それに今は生徒会長として色々経験させてもらつたし。就職の時に面接の話の種くらいにはなりそうじゃない?だからあんまり深く考えるようなことは無いわよ。」

「なるほどな……………。確かに演劇部でいたままなら生徒会長の経験は出来なかつたか……………

ん?いや、兼任は出来るよな……………?」

「先生曰わく『会長職は掛け持ち出来るほど甘くないから帰宅部じゃないと』だって。まあ本音は廃部とかを断行するのに部活してる人じゃ都合が悪かったからだと思うけど」

上田が生徒会長なのはそんな裏事情まであったのか……。

「おかげさまで大人の世界の……まあ汚き？みたいなのも知ってしまったし。」

そう語る上田の顔はどこか寂しげだ。ちなみにそんな話をしながらも上田はケーキを食べ進め、ケーキはあと一口にまできている。

それをパクツと食べて、ほっこりした顔をしている。俺はまた思いつきで気になったことを聞いてみる。

「ちなみにこの将来の夢から今までの経緯って他に誰が知ってるんだ？」

親と親しい友人、庄司先輩、あとはもしかしたら石橋先生あたりかな。

そう思っていたが答えは意外なものだった。

「夢だった話も含めて知っているのは鈴木くんだけかな。」

えっ？俺だけ？

「まあ聞かれたら答えてもいいかなあって人は何人かいるけど、聞かれないし」

「なんか俺がデリカシー無かっただけじゃないかな……」

「いやいや、それはないって」

上田は笑顔で否定してくれるが、確かにデリカシーが無かったかとも思うのは事実だ。

「それに退部した理由とかも誰にも言わなかったし……ホントはちよつと誰かに聞いて欲しかったところもあるかな」

女の子は単に話を聞いて欲しいだけ、つてどつかで聞いたことがあるな。

そういうことか……？

「つて私の話は前もしたじゃん。今日は鈴木くんの内緒話を聞くわよ」

そういえば、そんなこと言ってたな。ただあいにく、俺は公明正大に生きているものだからな。

「そんなこと言つて。虎谷さんとか彼氏いなかったら狙ってたんじゃないの？」

まあ無いな。いい子だとは思っているんだが、それとこれとは話が別だ。

「ふうくん。じゃあさ、じゃあさ、部活じゃなくてクラスとかでも気になる子とかいないの？」

マジか……。話の方向はそつちに向かうのか。

それ俺に告白しろと言っている……わけは無いだろうが、そのチャンスになるのか？

俺がパタツと黙ってしまったのを上田はどう思ったか知らないが、彼女は話を続ける。

「沈黙……っつてことは、いるんだね。まあ面白がってるのもあるけど、私さ一応、生徒会長だし顔も広いつもりだから協力してあげるわよ？ほら言っちゃいな」

協力っていうか、あなた自身なんですが……。

「ほらほら、ここだけの話にしとくからさ。……それとも、私ってそんなに信頼無い？」

「……上田だよ。」

「……………えっ？」

【30話】保留

煽られて、つい言ってしまった。まあいつか伝えようとは思っていたしな。これほどのタイムリングは無かったから良いだろう。俺は改めて言う。

「改めて、俺は上田のことが好きなんだ。付き合ってほしい。」

「えっ……？私？」

「はい」

本人は想定しない切り返しだったようで、なんだか困惑している。

なんなら俺も言う心積もりなんてしてなかったからな。

どうやって話を続けたらいいか分からない。

やがて先に話し始めたのは上田だった？

「ドツキリ？それとも罰ゲーム？」

もちろん、テツテレー！ドツキリ大成功とはならない。

「ドツキリでも罰ゲームでもない。ガチ……」

「ええ？えー……どの辺が……？」

何？急に志望動機を聞かれるとか面接か？とはいえ答えて欲しいなら答えなきゃな。

「なんてったってかわいい。いつも良い笑顔を見せてくれるし話しやすいし、それでいて真剣に物事には向き合ってくれるし、一緒にいて楽しい。あとは直感とか……」

俺はこれまで言葉にしなかった感情を、なんとか言葉で絞り出す。

恥ずかしくて多少、うつむきながらしゃべってる俺に対して上田はニコニコと聞いていた。

そして俺の口上を聞いた後は、嬉しそうに話し始めた。嬉しそう……う？だったと思う。

「はい、よくできました！……鈴木くんがそんな風に想ってるなんて知らなかったし、人から告白されることなんてないから、なんて言ったらいいか私も分からないなあ」

えっ!? まあ、唐突だったのは認めるが……。

そこで上田がそれだけ言って黙ると俺も色々となにを言えばいいのか分からないんだが……。

とはいえ、分からないで済ますわけではもちろんなく、少し沈黙の後に上田は話し始めた。

「ありがとう。鈴木くんの気持ちは分かった。……ただ私の気持ちは分からない……もちろん、鈴木くんのごことは好きなんですけど、恋愛のどうかと言われると……ちよつと分からない……。」

上田は眉をハの字にして笑いながら謝ってくる。

上田にこんな顔をさせるなんて、なんかこつちこそ申し訳ないな。

「……とりあえず保留でいいかな？」

「保留？」

「うん。『とりあえず友達からで』とか言うところなんだろうけど、そもそも私たち友達じゃん？だから保留。ゴメンね、すぐに答えは用意できない……。」

「そっか……。」

社交辞令……とは思いたくない返事だ。上田の性格的にも社交辞令ではないはず。

「よし、じゃあ保留を解除してもらえるように頑張る！」

「そ、そんな……私のために頑張るよりもっと他に良い人がいたり……。」

「じゃあ頑張らずに頑張る！」

「プツ……くつくつくつ……何それハハハ」

「おつ笑ってくれたな。いつもの笑顔に戻ってくれたな」

「だって『頑張らずに頑張る』って一行で矛盾してるんだもん。」

そう言いながらツボに入ったのか笑続ける上田。

そうだよ、俺が見たいのはこの笑顔だったんだ。

俺はアイスが溶け始めたパフェを食べながら、上田を見る。上田はいつの間にかパ

フエは食べ終えていて、それで俺をつついて話を聞こうとしていたらしい。

そしたら告白に繋がったと。

待たせるのも良くないので俺もパフェをさつきと食べる。ああもちろんおいしく味わつてはいるからな。一応、振られたわけじゃないしパフェの味も分かる。おいしい。

そして会計の時には俺は先に店を出された。

「さつきの約束、次は私に大人しくおごられること！ほら先に出といて」

なんとなくカツコ悪い気もしたんだが、上田にもプライド的なものはあるのだろうな。

「鈴木くんお待ちせよ」

「ごちそうさまでした」

「さつきのサイセリヤもあつたしお互い様よ。……そつかあ……もしかして今日ってデートしたくて私を誘つたの？」

「お？おお……その通りだな。」

「ふくん。そつかあ〜じゃあ手くらい繋ぐ？」

「はい？」

「それくらいいいわよ？ほらデートなんだし」

そう言いながら上田は手を差し出してきた。

参ったなあ、そんなことは考えてなかったんだが……とは思いつつその手を握った。

「つてカツコつけて言ってみただけど、かなり恥ずかしいわねコレ……」

「すまん、離そうか？」

「……いや、いい。この後はどうするの？」

いいんかい!?

どういうつもりかは読めないが、上田の手はあたたかく、でも夏なのにそのあたたかさが心地よかった。と気持ち悪い感想を垂れ流す前にこの後の予定だな。

時計を見ると夕方。そろそろラッシュアワーも近付いてくる頃だ。

「実はそろそろ帰ろうか? つて思ってたな」

「え? ああそうなんだ。あんなこと言うくらいだから、もつと夜遅くまで色々予定を考えていたのかと」

「うーん……付き合ってもいないし、今日告白するつもりも無かったし、夜遅くまで連れ回すのは悪いなって考えていたからな」

「そつか……鈴木くん真面目だね。」

「そりゃ一応、真剣勝負だからな」

「ハハッ……じゃあ改札まで送ってくれる? 今日はそこで解散ね」

「ういっす!」

そのまま歩いていき、割とすぐに駅の改札までたどり着いた。

「じゃあまたね！」

そう笑顔で手を振る上田。俺も振り返す。

「おおまたな！」

上田はそのまま改札から消えていった。俺も帰るか……。

そう言えば最後に『またね』って言ってたな……。今日は楽しんでもらえたのかな

……。

【31話】賞金100万円

その日の晩、上田からメッセージが来た。

今日のお礼だけで告白のことは触れられていない。

もうバレちゃった以上は仕方ないので、俺は開き直って返事をする。こちらこそ今日
は来てくれてありがとう、楽しかった、また誘ってもいいかなつと……。

「一応、受験生なんだし節度はもってね！」

上田からの返事はそんな感じで可とも不可とも言わないものだった。

実際、どう思われているのか不安になる。

ただ聞くのも怖いし、本人は保留と言った以上、答えをもらえるまで待つしかないよ
な……。

さて、それから数日後。今日は週に一度の部活だ。

午前中はお互いの作品を交換して読みながら誤字脱字をさがす。

午後からは虎谷が見つつけ出した小説応募に参加する。

もはや部活が事務作業で、家で文芸部らしい活動をしてると言っても良いレベルだろ

う。

「賞金が出るところの方がいいですかね〜？」

虎谷はそんな事を聞いてきた。

「まあ大人の事情は金で黙らせることができるならなあ」

「はい、鈴木さんの作品をそういうところに応募しました！」

「相変わらず仕事が速いなあ」

そう言いながら虎谷が応募したサイトを見てみる。

どれどれ……最優秀作品は賞金100万円と弊社読み切りに掲載、さらに弊社より新作の連載を……ってどう見てもプロなレベルじゃねえか！

賞金100万円ってレベル高すぎて怪しいし。

「もしかしたら引つかかるかもしれないですよ」

どっちかというと身の丈に合っていない応募をしてる時点で俺たちの方が罠にひっかかったような気分だ。

「罠ってなんですか？」

「ん？ああ個人情報があばれる的な？」

「大丈夫ですよ。」

「ああ学校名と文芸部で応募した？」

「いえ、鈴木善治で応募しました。」

「偽名じゃねえか?! しかも偽名って分かりにくいし! せめて明らかなペンネームみたいなんにしてくれよ」

「まあまあ。じゃあ鈴木善治をペンネームにしましょう。」

「こんなショートコントみたいなのやり取りをしながらポチポチとパソコンを操作して、色々な賞などに投稿する。」

ちなみに俺の作品の方が数が少ない上に虎谷は異様に作業が速い。

虎谷は良作を大量生産しているため、俺が読んで誤字脱字をチェックするにも時間がかかる。

結果として俺が忙しく作業に追われてる中、虎谷が先に暇になって俺に話しかけてくる流れとなっている。俺にも虎谷を圧倒できるだけの質と量を書ける文才があればなあ。

「鈴木さん、まだですか?」

「すまんすまん、あと5分」

「ええ、ほらもう帰る時間ですよ」

活動時間の終わりが近づいてくると虎谷が煽ってくる。

ここだけ切り取ると俺が書いてて虎谷が編集みただが、現実とは真逆という意味不明

な事態だ。

「お疲れ〜おっ！ちゃんと活動してるね〜！」

そこに上田までやってきた。ややこしい状況をさらにややこしくしそうだな。

「ん？鈴木くんどうしたの？私の顔に何か付いてる？」

逆になんで上田はこうも平然としてるんだよ。

「ほら、鈴木さん！よそ見しないでチェックしてください！」

「は、はいごめんなさい！」

もうちよつと上田と世間話をしたところだが、バツサリと斬られる。

上田と世間話をするミツシヨンはあえなく虎谷に奪われてしまった。

それはそれで色々な意味で気になって作業が進まないんだが……。

「虎谷さんうまく尻に敷いてるわね〜」

「敷いてないですよ」

「いやいや言うわね〜なかなかスパンって言ってたわよ〜」

「敷いてないですよ」

「そっかあ〜面白い関係ね〜！」

上田が朗らかに笑ってる。俺も混ざりたいが、作業もあとちよつとだしな。

ここで終わらせなきゃ虎谷にまた煽られる。俺、完全に尻に敷かれてるなあ。

「そうそう文芸部としての調子はどう？」

「まあまあですかねー」

「確か、いろんなところに応募してるんだっけ？」

「はい、もう30作くらいですかね」

「すつすごいわね……」

「そーでもないですよ」

ちなみにその30作のうち23作くらいは虎谷が書いている。

完全に俺の立つ瀬は無い。せめて今は自分の仕事をするしかないか。

色々な意味で話に混ざりたいんだがなあ。

「よし、じゃあその調子で頑張つてね！夏休みが明けたら、文化祭ね！私の方でもいくらくらい集めたら実績になるか調べとくわね」

「はい、よろしくお願いします」

「うん、じゃまたね」

あら、上田が帰つてしまう。せめて挨拶くらいは虎谷も怒らないだろう。

「お疲れ様ー文化祭の件よろしくなー」

「うん。お疲れ様」

普通に手を振りながら上田は帰っていった。

ホントに何事も無くほっとしたような、ちよつと寂しいような……。

「で、鈴木さん終わりました？」

「ん？ ああ後はこれをクリックしたら投稿完了だ」

俺は素晴らしいながら、最後のワンクリック。今日の部活はこれにて終わりだ。

「はい、じゃあお疲れ様ですー」

虎谷は俺が作業を完了させたのを見てから、秒で帰り支度を済ませる。

何気に作業完了は待っててくれたんだな。

俺が帰り支度をする頃には、もう校内にいないし、それだけ一瞬で下校して何があるのかは分からんが……。

あ、彼氏に会いにでも行っているのか。いいなあそれ……。

俺は宙ぶらりんの状況だし一人で下校するか……。

【32話】『やった』っていうのが大事

夏休みは早くも終わり、今日は始業式だ。

文芸部は今日も部活だ。部室に集まり、夏休み中に投稿したところから何か連絡が無いか確認する。今日も特になし。まあそう簡単にはいかないか。

「まあまだ締切が来てないのもありますしね〜」

虎谷がそんな冷静なコメントをする。確かに、その通りだな。

ただそれって入賞したとして、存廃議論にケリが着くまでに間に合ってくれるのだろうか。

生徒会長が代替わりする前に結論を出してしまう、つまり残された期間は文化祭までの限られた時間となるのだが……。

と、中途半端に部活が始まって少し経ったこのタイミングで上田からSNSのメッセージが届いた。

「文芸部にお話ししたいことがあります。お時間のある時に生徒会室に来てください。」

わざわざ文芸部と強調するあたり、俺個人に対してどうこうの話はないんだろう

なあ。とはいえ、保留された返事がどうなるかも分からないし、俺個人を呼び出してきたとしても素直に喜べないがな。

とりあえず上田の呼び出しに文芸部として生徒会室へ向かうか。

「虎谷ー。」

「なんですか?」

「上田が文芸部に話があるって。一緒に聞きに行くかー?」

「ええー」

虎谷は嫌そうな返事をしながらも立ち上がって俺についてくる。

本気で嫌がつてる訳じゃないみたいだが、なんとというか気ままな猫みたいなヤツだな。

あ、虎なんだから猫か……。

とまあ、そんなどうでも良いことを考えてるうちに生徒会室にたどり着く。

上田しかいないと思い、俺が軽くノックをして入室する。

すると中には上田の他に石橋先生もいた。おいおい、また精神的に疲れる心理戦なのかよ、と思ったが石橋先生は俺たちを見てそそくさと立ち去ろうとする。

俺は軽く身構えたこともあって、うっかりこちらから声をかけてしまう。

「あれ? また先生が立場的に立ちはだかるためにいるんじゃないんですか?」

先生は営業スマイルの時と関西弁の本音の時と足して2で割ったようなオーラを出しながら答える。

「何言うてるねん。文化祭や部活は学生のモンやで」

「そう言いながら消えていった。なんかあるなあありや……。」

「確かに何かありそうですね」

「虎谷もそんなことを言う。そう言えば虎谷の担任が石橋先生だったな。今は一言も交わしてなかったけど。」

「まったくよく。あ、適当なところに座って」

「上田はそう言って笑いながら、俺たちに着席を促す。」

「また石橋先生が何か言ってきたのか?」

「そうよく。『これやつといてや』って……」

「上田はそう言いながら紙を見せてくる。そこには『文化祭予算圧縮命令』と書かれている。」

「文字通り文化祭にかかる予算を圧縮しなさいって〜」

「んな、めちやくちやな……。ってか生徒会長に丸投げってどんなんだよ……。」

「で、予算圧縮で文化祭もろくに出来なくなりそうなのか?」

「ん? ああこの命令は無視するわよ?」

「は!? ええ……いいのか? それ」

「石橋先生が私に言ってくるってことはそう言うことよ。これに合わせた文書だけ作って努力しましたよって雰囲気を出せって意味よ」

「は……はあ」

「ここで虎谷も口を挟む。

「確かに石橋先生はよく『やった』っていうのが大事なんやっって言いますよね。」

「言う言うゝ案外、報告書とかも中身が伴ってないのにOKしてくれるのよねゝゝ」

中身が伴ってない報告書出したのかよ……。

「なんか、夏休み前までの改革（大人の事情）がどれだけ出来ました。みたいな報告書を出せって言われてさ。私は良い意味で何もしてないからどうしたらいいか聞いたたら、何もなかったことをそれらしく理由つけたらいいよって言われて、その通り書いたらイケたわよ」

「それチェックされてないんじゃないか?」

「紙が出たってことが大事みたいね。だから今回のこの予算圧縮も適当に『やるだけやりました』って感じで出すわ」

「そんなん出来るんですね?」

虎谷は至極当然な疑問を投げる。しかし上田もケロッと答える。

「例えば吹奏楽部の演奏会の時間を例年、45分で取ってるのね。これを今年は5分にします。そしたら照明やパンフレットなど、また観客数が減って用意するパイプ椅子を減らしたりして、理論的には諸々の費用や労力を圧縮出来るでしょ?」

「それ、文化祭のために一生懸命練習してきた吹奏楽部から暴動が起きるぞ……」

「実際にはやらないわよ。」

「ええ……どういふことだ?」

「ただしくは演奏会45分を演奏会5分、アンコール40分にしてしまうの。そうすれば演奏会の時間短縮で表通りの効果を得たことになりながら実際には45分あるから吹奏楽部も満足行く。パフォーマンスが出来るわ」

「ありなのか……それ。」

「ん……まあいいんじゃない?ライブで乗ってアンコールしちゃった☆ってことで。一応、石橋先生には根回しするし。後はカンパ制にしてお金を取ろうとするとかね」

「それ、吹奏楽部がOKするのか?」

「吹奏楽部の意志は関係ないわよ?カンパ箱も生徒会室に置くだけだし。いくら集まったより、集めようと努力した”ことにする”のが大事だから。」

「なんとというか、朗らかでちよつとお茶目な上田はどこへやら……。」

上田は一気に大人の階段を上ってしまったような気がする。

「何々？鈴木くん、幻滅した？」

「いや、そうじゃなくて……なんか遠くなった気がするなあ……って」

「あはは、何それ。これが生徒会長としての私。仮面の姿で本当の私は鈴木くんの知ってる私だよ。」

上田は、いつものふんわりした笑顔に戻った。よしよし。

「で、文芸部はどうしたら良いんですか？」

虎谷は話を本題に戻す。あ、そうだったそうだった。それが大事だ。

「あ、そうだったそうだった。文芸部は文化祭で本を『販売する』って方針で間違いなかった？」

「ああ、そのつもりだ。」

「じゃあまず事務的に書いて生徒会に出さなきゃいけない書類を渡しとくね」

「おうサンキュー」

「あと、ここからが本題で、どんな感じの本になるとか分かる？」

「んく……一応、いつも配布してるヤツをちよつと厚くするくらいかな？」

「価格帯とかは考えてる？」

「一応、100円と……B〇〇K〇FFとかも100円コーナーがあるし、手に取りやすい金額が良いかなあと」

「なるほどね〜…確かに文化祭で500円とか普通は払わないわよね〜」

上田は俺が言った内容をメモする。

「紙の質とかは考えてる？良い紙使うとか、学校で用意できるわら半紙にするとか……」

「そこはまだ……」

「何部刷るとかも決まってる？」

「そこは逆に何部なら採算とかが合うんだ？つてところだな」

「なるほどね」

上田はそう言いながら目の前にある生徒会室のパソコンを操作する。カタカタと操作して、しばらくすると俺たち2人を手招きした。

俺と虎谷でパソコンの画面を確認しに行く。

「ページが去年の倍、1冊100円だと先生がニヤツク金額を稼ぐにはこのあたりね」

そこには具体的に何冊売り上げたら良いかの数が表示されていた。

「労働力は計算しなくて良いから100円―原価で計算しただけなんだけどね。」

少し苦笑いしながら、上田は数字を見せる。

こうして見てみる先生がニヤツク金額とやはかなり大きな数字だ。

「二応、コッソリ石橋先生に聞いたのよ。いくらくらい稼いだらいいのか。そしたら『教師の打ち上げ飲み会代くらいはほしいなあ』って。」

「それでこの金額か……。」

正直、自信はないがそれを口にするわけにもいかない。

こんな俺とは逆に虎谷はいつものように薄いリアクションだ。

「ふーん……。」

やっぱり何考えてるか分からないときが定期的にあるな。

「とりあえず紙とかは文芸部の部費で手配しとくから、文芸部はこの数、売り上げること
を一番に考えてね！……でいいかな？」

「お、おう」

せっかく上田が計算してくれたんだからと俺は肯定的な返事をする。

すると虎谷が

「おお〜」

となにやら感心したような声を出す。どうしたんだ？

「いえ。やる気だなあと思って思っただけです。」

なんだそりや。

虎谷のよく分からない発言はさておき、俺たちは上田の試算をどっかにメモしてから
部屋に戻る。上田があんな計算式まで考えてくれたとは……。

部室に戻って一息ついて虎谷がポツリ。

「あの目標、やるんですね」

ん？意外と怖じ気づいたりしてるのか？

「というよりは鈴木さんがGOサイン出すと思わなかったです。結構、キツイ目標じゃなかったですか？」

確かにかなりキツイし達成出来るかどうかは分からん。もしかしたら無理かもしれない。

「キツイ目標なのは分かっているが何もしなけりやこのまま廃部だ。目標が仮に99%失敗して廃部になるとしても、100%廃部よりは良いだろう。」

「……………そうですね。確かに言うとおりですね。」

「なんか妙な間があったが、何かあるなら言ってくれよ。文化祭が終わったら名実共に虎谷の時代なんだからな。」

「ん？いや…………鈴木さんは事なかれ主義なのかなあと思ってたので意外だっただけです。」

「ああ……………そう言うことね…………。確かに事なかれ主義だった気がするんだが…………」

確かに事なかれ主義だったはずなんだが、いつの間にかマジになってる俺がいる。

まあ主に上田のお陰だな。それは虎谷には言わないけど。

「まあさすがに廃部って言われたら何とかしようって気になるだろ」

「ぶーん……。」

虎谷は俺の言い訳に何やら分かったような分からないような顔をしている。もしかしたら察したのかもしれないな。

とはいえ虎谷はそこに踏み込んでほくない。ありがたいような寂しいような……。

「分かりました。じゃ文化祭までに本を作ることを最優先にまずは頑張りますか」

「だな。あと結局、誌面は限られる。長い作品を載せるとキツイこともある。とはいえ短いモノばかりだとなんだかなあ……とも思うんだが……。ほら、一応どつかに応募して落ちた作品とかも使いたいだろ。というか俺のストックが厳しいって話だが」

「じゃあ2種類作つたらいいんじゃないですか？ そうしたら2冊買つてくれる人もいれば数も増やせますし」

「あつそうか。そりやそうだな。1冊しか売れないって考えしか思い付かなかつたぜ。」

こうして虎谷のアイデアもありつつ文芸部は文化祭で同人誌を販売する。

そこで稼ぐという実績を持って廃部という大人の事情を立ち向かうことに決まった。

これが最後の勝負だな……。

【33話】学校の授業では教えてくれないタイプの勉強

文芸部の方針が決まってから数週間。

部活はとりあえずは書くという作業が中心となっている。文化祭の少し前までに色々と書きためて、その中から良い作品を冊子に入れるつもりだ。

2冊も作るのだから、そりゃ沢山書かないとな。結局、虎谷にはかなわないんだが……。

そして俺はもう一点、気になっていることがある。

上田の件だ。

告白の返事をもらってないまま、もうすぐ1ヶ月になろうかという事態だ。

ちなみに言うところ、この間もSNSで雑談したりはしていて部活以外に全く接触がないわけではない。

が、一方でこの話題に触れることもない。

なんだか中途半端に胸を締め付けられるような感覚だ。このまま自然消滅するくらいなら、いつそ振られた方が気が楽なんだがなあ。

いや、振られたいわけじゃないけどなあ。

そんな風にモヤモヤしながら今日も下駄箱から靴を取り出し、帰ろうとする。

ちなみに同じ時間に部活を終えたはずなのに虎谷は既に下校している。普通に片付けと動きがめっちゃめっちゃ速い。

「あら？鈴木くんも今帰りー？」

その声に振り返ると、ちょうど上田がいた。

「おおお疲れー」

「お疲れ様〜」

俺としては出来る限り自然に振る舞う。

上田もぎこちなさとかは特になく至って自然だ。それが演技なのかマジで何も思っていないのか分からないが。とりあえず自然に自然に……。

顔を見合わせてもSNSの時と変わらない雑談だな。

「この時間まで生徒会って大変だな」

「フフツ、まあね〜。って鈴木くんもでしょ？」

「ん？まあ俺は好きでやってるだけだからな。」

「そっかあ〜。まあ私も無理矢理、生徒会長にさせられはしたけど、今はそれなりに楽しんでるのよ。いろんな意味で将来に役立ちそうな勉強も出来るし。」

「いろんな意味って……あれか。学校の授業では教えてくれないタイプの勉強か」

「そういうこと。」

「上田はすげえな。もう社会に出てからのところまで考えてるんだな……」

「そうね。夢は諦めたし、そうなる現実の世界でまあ幸せになる方法を探そうかなって」

「そうか……。諦めた、か……。俺みたいに何の夢も希望も無い人間からすると、もったいないなあなんて勝手に思っちゃまうな。」

「もったいない……。か。ありがとう。でも良いのよ。生徒会長になってからは現実もよく見るようになったし。」

俺は直感した。

多分、この言い方は諦めきれないのを無理に言い聞かせているな、と。

ただそこまで上田の心の内にもぐり込もうとするのも良くないか……。

「つていうか鈴木くんも夢は知らないけど、今は希望はあるじゃない？」

「ん？」

「文芸部を存続させるって希望が」

言われてみればそうだったな。

というか好きバレしてるから理由を口に出しても、ある意味で問題は無いか。

「それな、上田にいいところを見せたいだけだよ。」

「え!？」

「もちろん後輩が来て部活を守らなきゃってのはあるが、根本的には上田の『大人の事情に抗いたい』ってなので、なら俺も…ってなっただけだ。」

「ええ…：…もしかして、なんか悪いことした?」

「いや、むしろ本来、やらなきゃいけなかった部活のことにも目を向けられるようになったし。感謝してるぜ。」

「そう? だつたら良いんだけど…：…私の勝手に巻き込んだりしてない?」

「まあ正直、巻き込まれてはいるかな。おかげで上田とは知り合ったんだし、俺にとっての良いことばつかりだったかな。」

「あつ…：…」

雑談をしているとすぐ校門に着く。帰る方向が違うため、上田とはここでお別れだ。

「じゃお疲れ様なー」

俺は上田に声をかける。

「あ、鈴木くん!」

「ん? どうした?」

「こないだの告白の件なんだけど」

おつと、()で急にか…：…!

「長い間、保留でごめんね！今、文化祭とかでバタバタしてて……」

あつ……角が立たないように言われるだけで、このパターンは……？

「だから今すぐ、考えられないのよ。もうちよつと保留でもいい？」

「うん……ん？あ、ああ……はい」

「待たせちゃってホントにごめんね。文化祭が終わったら色々向き合える……と思うから。」

まさかの保留続行か……。良かったのか悪かったのか……判決の時期だけズラされた気分だな。

「まあ、気にしてない……ことはないけど、大変なのは分かっているつもりだ。体調だけは気をつけて、無理しないようにな」

「ありがとう。じゃまたね！」

「おう」

……。
そんな挨拶を交わして俺たちはそれぞれの道へ帰る。文化祭後まで返事はお預けか

……。
まあある意味、俺も文芸部として部活に打ち込めるな。

なんだったら、俺のこの話ごと小説にしてみようか……。そんな想像すらしてしま
う。泣いても笑っても文化祭まであと少しだな……。

【34話】男の人って一回は浮気する

さて、気づけばもう文化祭まで1週間というタイミグまでやってきた。

これにて創作活動は打ち切りだ。後は編集してどれを掲載するか決める……。

最後に製本。思えば1年前はこんな風になるなんて思わなかったな。

ということ、虎谷の作品をダーツと読んでいく。

どれも面白いので取捨選択が出来ない。

逆に俺の主観で好みから選んだらいいかな、なんて思う。

そして俺はほんの一息ついたタイミグで虎谷に話しかける。

まあホントにただの雑談なんだが。

「なあ、虎谷ー。ネットとかで恋愛小説……まあ二次創作とかでも読んでたらさ」

「どうしたんですか?」

「女の子がヤカラとか不良とかチンピラにちよつかいかけられて主人公男に助けられて

キュンキュン……みたいなシーンあるよな。」

「そうですかね?」

「まあそれより前から好印象を持っている前提はあるんだけどさ。あれって実際にキュ

ンキユンなのか？」

「まあ……？変なのに絡まれてる時に助けしてくれた人には良い印象は持つと思いますね。」

「まあそりゃ助けてもらつたらそうはなるか……。」

「じゃあ惚れるかというところは別問題だと思いますけどね。知らない人が知り合うキツカケくらいにはなるんじゃないですか？」

「ああ……そつか……。」

確かに知らない人を助けて「名前だけでも！」「名乗るほどのものじゃありません」的なやり取りは古典的だよな。

ただ実際問題、そこから発展した話を俺は聞いたことがないしな。

「私としては、そもそもそんな危険な目に遭いたくないですけどね。」

確かに虎谷の言うとおりで。

仮に上田が何かチンピラに絡まれていたりしたら、もちろん助けるが、そもそもそんな窮地に陥る姿を見たくない。

「まあ小説とか二次創作のフィクションなら良いですけど、実際には吊り橋効果を狙われたらたまつたもんじゃないですよ。」

「虎谷の言うとおりでな。相手にトラウマを残すのは気が引ける。」

「……で、鈴木さんの書いた小説ではヒロインが危ない人に襲われるシーンは無いんですね。」

「ま、まあなあ……。」

「フフツ」

鼻で笑って虎谷は話を終わらせる。何を考えてるんだろうな。

というか、虎谷は気付いていないだろうし気付かれても困るが、虎谷の言ってる話は俺の実話を脚色したものだ。

まあ実際問題、上田からの好感度は上げたいがそのために危険な目には遭わせたくないし遭って欲しくないな。

虎谷は思い出したかのように話の続きを始める。

「そもそも昔は知らないですけど、いまどきそんなに絡まれる事がないですよね。」

「確かに。見たことも聞いたこともない。治安が良い地方というのもあるかもしれないがな。」

「私としてはそういうので危機を迎えるのも嫌ですが、そういうのって最悪誰かは助けにくれそうじゃないですか？自力は無理でも警察呼んでくれたりとか」

「まあ確かに……」

「それよりも浮気とか今流行の不倫とか、そういうの方がいろんな意味で危機ですよ」

ね。」

虎谷はえらく鋭いことを言い出したな。とりあえず聞いておくか。

ある意味、関係ない話ではないからな。

主に心のケア的な意味で。

「男の人って一回は浮気するって聞いたんですけど本当ですか？」

「いきなりえげつないこと聞いてくるな……。」

「どうなんですか？」

なんか虎谷のスイッチが入ったのか、えらくグイグイ来るなあ。

「全員が浮気するかどうかは分からないし、俺は相手を傷つけたくもないからするつもりはないが……。」

「……………が？」

ある顔が頭に浮かぶ。名前は……出さないでおこう。

「3股交際してた知り合いならいたなあ」

「ええ……最低ですね。逆によく出来ましたね。」

「相手が2コ下、1コ下、同年でうまくバレないようにしていた……のかな？」

「へえ、詳しいですね」

「関係者4人のうち3人は知り合いだからな……。」

俺の顔から虎谷は何を察したのか分からないが、それ以上は何も言わなかった。

この件はある意味、俺も関係者かもしれないがな……。

君の運命のヒトは僕じゃない。辛いけど否めない。

そんな歌をどっかで聞いたことはあったが、あの時の俺はそんな風に思っていた。それに今もそう思うところはあるが……そこらへんは考えないでおこう。

「鈴木さん、何黄昏てるんですか？」

「ん？ん……気にすんな。ちよつとその三股事件を思い出してただけだ。」

「そうですか……。」

「さて、文化祭に向けて作業するか。一応、俺は虎谷が書いた分で使いたいのはピックアップした」

「ほとんど全部ですね。」

「正直どれも切れないから一応、好きな順で優先順位つて形にしといた。あとはここからページ数考えて決めるぞ」

「分かりました。」

「虎谷、任せてみても良いか？案が出来たら見せてくれ」

「ええ〜」

丸投げされた虎谷は嫌そうな声を出しつつも、すぐに作業に取りかかる。

やはりこういうところが信頼出来るなあ。

もちろん、俺も丸投げして暇するわけではない。

「じゃあ俺は発注しといた紙を受け取りに行つてくるわ」

「はい、では」

正直、力仕事くらいしか出来ないからな。俺は学校の倉庫へ紙を取りに行つた。

ちなみにこの日は部室に紙を運び込むのに時間がかかり、それで部活は終了となる。

虎谷の同人誌の案を見るのはまた後日になった。

【35話】今のままではいけないと思います。だからこそ今のままではいけないと思っっている。

文化祭まであと数日。文化祭で販売する同人誌は印刷が完了しあとは製本するだけとなった。自分で言うのもなんだが、かなり順調に行ってる。

理由は明確で虎谷がすべてをちやつちやと片付けてしまうところにある。彼女のおかげですぐに物事が片付いてしまうのだ。

ちなみに同人誌の中身もだいたいは虎谷の作品になっている。先輩のメンツなんて関係ない。

「2冊にまたがって掲載しているのは鈴木さんの作品ですけどね」

虎谷はそんなことを言っているが、それも俺に作品まとめる能力が無いからの話だ。「だいたい俺作のんなんてそれ1本だけだろ」

「私は気に入ってますよ。」

「ありがとよ。それを信じておくれ」

「多分、2冊にまたがったおかげで2冊とも売れますよ」

虎谷がなんだか優しいコメントをしてきている。今回は真に受けておこうか。

「そうよく！私もちゃんと買うから、自信を持っていきなさい！」
そう言うのは上田だ。

ちなみに上田は文化祭を前に生徒会長として文化祭の配布物などはすべてに目を通していろいろらしい。祭り上げられただけの会長なのに「ご苦労さまだな……」。

そして今は人数が少ない文芸部のために今は製本作業の手伝いに来てくれた。本当にありがたい。

「まあ困ったときはお互い様よ♪」

「上田が生徒会長として困ってるのを見たこと無い気がするんだが……」

「ん？そんなことも無いかなあ。石橋先生の要求に合わせて詭弁考えるの結構大変なのよっ。」

「あー……『今のままではいけないと思います。だからこそ今のままではいけないと思っっている。』みたいな？」

「そんなの却下されるわよ」

オレ流ポエムへの評価は手厳しいなあ。まあ詭弁を考えるのは向いてないからそれ以外のところで何かサポート出来ることがあればするか。

「って言ってももうすぐ文化祭で私の任期も終わるけどね。」

「そうか……割と早かったな。」

「終わってみるとあつという間ね……つてまだ文化祭本番が残ってるわよ！」

「あつそうだったそうだった。」

「あれ、前日の準備とかヤバいのよ？」

「そうなのか？」

「私も経験無いから分からない」

上田はそう言いながら笑う。

確かに生徒会長になる前は生徒会の役員とかでも無かったわけだし、知らないか
……。

「じゃあ鈴木さんも手伝いに行ったら良いんじゃないですか？」

虎谷がいきなり意味不明なことを言い出した。

「あ！それ良いわね！」

上田もそれに乗っかる。なんでそんなノリノリなんだ!?

「だいたい俺は生徒会に入ってないのにダメだろ」

「あら、ボランティア的なのは募集してるし大丈夫よ♪」

「それ誰が参加するんだよ……」

「ほとんど参加者はいないわね……文化祭に参加する部活とかだと、自分のところで精一杯
杯みたいだし」

確かに言わんとすることは分かるが……。

「それにほら、大人たちの陰謀で生徒会役員でまともにやる気ある人が……」

「あつ……」

「どうやら、俺に拒否権は無いらしいということを観察する。」

「それに困ったときは……？」

「お互い様だな。よし、じゃあ前日は準備を手伝うことにするよ」

「ありがとう♪」

「いいぜ。今は文芸部の手伝いをしてもらってるわけだしな。」

よく考えれば俺個人としては拒否する理由も無いわけだしな。

文芸部の方が前日に準備出来ないという点はあるっちゃあるが……。

「今日、全部製本するんでそれは大丈夫ですよ」

虎谷はきっぱり言い切った。確かに異様にハイペースな虎谷を見ると行けそうな気はしてくるな。

しばらくして下校時間は過ぎてしまったが、予定していた分が完成した。

「これまでに見たことのない冊数だ。」

「お疲れ様！」

俺の声に2人はパチパチと拍手する。

「これだけあると壮観ね〜」

「これ売り切れれば存続の道も……!」

「見えるかもしれないわね!」

上田はいつも通りににこやかに返してきたが、さすがに売り切れれば門前払いされる現
状は打開できるだろう。

「じゃあ私は生徒会の方を覗いてから帰るから!お先ね!」

上田はそう言つて生徒会室へ向かつていった。俺たちは帰るとするか。

と虎谷はいつものように最速で下校せず残つて話しかけてきた。

「ねーねー。あれで良かったですか?」

問いかかけの意味が分からず、聞き返す。

「はい?何が?」

「上田さんに手伝つてもらつたお礼の件」

なるほど。そのことか。

まあ本人が困るくらいなら俺が手伝いに行くくらいナンボでも……つて感じだな。
なんなら虎谷も来るか?

「いえ、私は邪魔をする気はないので」

「邪魔？ いやいや虎谷の能力ならまさに百人力だろう。」

「フフツ……じゃあお疲れ様です」

虎谷は意味深な笑いを残して帰っていく。

出会って半年になるが、やっぱり何を考えてるか掴めないときはあるなあ……。まあいいか。俺も帰ろう。

【36話】 やったか……!?

そしてやってきた文化祭前日だ。明日から2日間の文化祭が始まる。

まずは文芸部に行き、明日の動きについて確認する。そして同人誌を……

「はい、あとはやるときますんで鈴木さんは生徒会の手伝いに行ってくださいホラ」

虎谷はそう煽ってくる。まあ生徒会の手伝いも大事かもしれんが俺は文芸部員だ。

優先すべきはこつちだと思う。

「私1人で出来ますからホラ、早く向こう行ってください。」

なんだかえらく急かしてくるな。

「『お手伝い』が大事でしょ。それにだいたいの準備は昨日までに終わらせてますから。」

そこまで言われると、素直に引き下がった方がいいのか……?

まあ虎谷の言うとおり、準備はほとんど片付いているしな。

「分かった。じゃあ行ってくるから明日の朝、よろしくな。」

「はい。」

淡白なのに強情な虎谷の見送りを受けて俺は生徒会の手伝いに行く。 って言ってもどこにいきやいいんだ?

「とりあえず生徒会室に行くと、貼り紙があり不在にしている体育館にいらしたことだ。」

で、体育館に向かってみると、だだっ広い体育館で上田がパイプ椅子を並べている。体育館は明日からクラス劇などに使われるので、そのための客席作りだろう。

ただ気になるのは作業している人員が明らかに少ない。

俺に気付いた上田が手を振りながら笑顔で駆け寄ってくる。

このシーンだけ切り取ればなんとも微笑ましい胸が高鳴る瞬間なんだが、現実はそのも行かないんだろうなあ。

駆け寄ってくる上田以外に2人が俺のところへやってきた。

誰かと思えば石橋先生と水原だ。

サブキャラ大集合かよ。

「お疲れ〜来てくれてありがとう〜」

上田が手を振りながら言うがまさか作業してるのってこの3人だけか。

石橋先生は素の表情で話しかけてくる。

「お疲れ。文化祭設営の手伝いに来てくれたんやな?」

「ええはい」

「助かるわ。ほんならとりあえず、俺が椅子出していくから、それを並べていってくれ」

「並び順とか間隔はどうしたら……?」

「適当でええで。こんなもん並んでたらええんやから。」

えらいむちやくちやだな……。

「ま、そういうことだから頑張つていきましょ!」

上田はそうやって明るく話しかける。

「N700系普通車のシートピッチは1040ミリだからそれくらいだとかなり余裕があると思います」

水原が何か言ってるが、一切何言ってるか意味が分からない。

「というか人数これだけか?」

「これだけね!」

俺の質問に上田は笑顔で答えるが、目が笑ってない。

やる気のない生徒会役員が大半という以前の話も思い出し、察してしまふ。

なんなら何故かいる水原も生徒会の人間じやないはずだしな。

石橋先生が体育館のステージの下に収納されたパイプ椅子を引き出し、それを3人で手分けして並べていく。

もつと上田とダベリながらのんびり作業したいところだったが、どうやらそれは叶わないらしい。数が多すぎる。椅子を引き出し終えた石橋先生が俺たち3人に手招きを

する。

「野郎3人で椅子を持って行くから上田はええ感じに並べてくれ」

石橋先生のその号令で完全に役割分担されてしまった。

まあ確かに女の子に椅子を運ばせるのも申し訳ないしな。

そうこうしているうちになんとか体育館全体にイスが並んだ。

綺麗な観客席の完成だ。

俺の気持ちとしては「やったか……!?」って感じなんだが、これはフラグだ。

つまりまだ作業はあるらしい。

石橋先生が俺たち3人に言ってくる。

「俺と水原はこれから、音響とかのセッティングがあるんやけど鈴木は分かるか?」

残念ながら、機械類はほとんどわからん。ましてや専門的なのは完全にダメだ。

「アカンのか……上田は?」

「キカイハサツパリワカリマセン」

上田も珍しくカタコトだ。

「マジか……ほなもう仕方ないから上田が見回り行ってもらおか。」

どうやら校内で何か変なところがないか、なおしておかなきゃいけないものが出ばなっしになってないかの確認をするらしい。

「鈴木も行ったつてくれるか。不審者でもおったりしたら盾になったつてくれ」

上田の見回りに同行することに異存は無いが、縁起でもないことを言うなよ……。

「分かりました。じゃ鈴木くん、行きましよう」

「了解」

既に日は落ちているし、下校時間も過ぎてている。

さつさと見回りも済ませた方が良さそうだな。

「ちなみに私もあんまり機械よく分かんないんですが……」

水原もそんなことを言ったが

「んなもん適当につないで音が出たらええんや」

と石橋先生に一蹴されていた。

なんか俺たちとも違う扱いを受けているな。まあ石橋先生と水原の関係については

俺には関係ないな。そんなスピノフまでフォローは出来ない。

「じゃあよろしくな」

石橋先生はそれだけ言う。え？懐中電灯とかは無いのか？

確か下校時間は過ぎてるから体育館とか職員室以外は照明も落ちてるよな？

「スマホのライト使えや。ほな、はよ行ってきてな。」

石橋先生はそう言うのと追い出すような仕草をする。

「仕方ないわね。行きましょ」

上田はスマホを取り出しライトを点灯させる。

これ以上、なんか言っても時間の無駄かな。上田が体育館を出ようとするので俺もついて行く。

図らずも2人にされてしまったな……。

電気が消えた夜の校舎というのはなんだか不気味だ。

正直、来たくないと思おう。肝試しとかを学校でやりたがるのも納得だ。

さて、俺も肝試しのような扱いを受けている。

スマホのライトはあるが、あれはどちらかという和一筋の光というような感じで全体は照らしてくれない。

そんな不気味な場所を好きな人と2人で歩くというのはなんとも複雑な心境だ。

「まあ石橋先生はあんなこと言ってたけど不審者なんていないわよ〜」

「そりゃ……そうだけど景色からして不気味じゃないか?」

「まあ確かにそれはね……。」

上田と並んで夜の校舎を見て回る。

教室外に出ては行けないモノが出ていないかと、下校時間を過ぎて残っている生徒が

いないかどうかの確認だ。無言で回るのもしんどいので、上田に話しかける。

「いよいよ明日、文化祭だな」

「そうねえ」

「上田は文化祭の間ってどうしてるんだ？」

「ん？もしかして誘ってる？文化祭でどっか遊びに行こう的なお誘いしてる？」

「ご名答だ。じゃ単刀直入に文化祭、一緒に見て回らないか？」

「良いわよ……と言いたいところなんだけど、生徒会は見えての通りだしゴメン！約束は出来ない」

「そうか……」

「そんなしよんぼりしなくても……あ、うん！どうなるかは分からないから当日に連絡とかでもいい？」

「おう！大丈夫大丈夫。嫌なら無理にとも言わないし。」

「嫌ってことは無いわね。仕事してなきや一人でいると思うし、誰かといた方が楽しいからね」

「こう言ってくれるだけ嬉しくは思うが、そこに深い意味は無いんだろうなあ、とも思ってしまう。」

「ん？ストップ！」

上田は歩みを止める。何かに気付いたらしい。

「人のいる気配がしない？」

言われてみると確かに微かな音というか振動が聞こえる。

「多分、上の階ね。次に見回りに行く場所だわ……。」

まさかマジで不審者か……。

誰だよ、そんな死亡フラグ立てたんは……。

階段までやってきた。ここから上の階に上がるわけだが、もし不審者と対峙するなら、上田にはここに残ってもらった方が安全か？

ただ不審者が複数だったり別の階段から降りてきたりするリスクを考えるなら、上田を一人にしては危険だ。

「どうする？ここで待つか？」

「ん？なんで？見回りって元は私の仕事よ？」

「まあ……万が一、不審者がいたら……。」

「ああ……へえ、鈴木くん守ってくれるんだ？」

「当たり前だろ？」

「じゃあ……。」

ニタニタって笑った上田は半歩下がって俺の服の裾をつまむ。

時々、反則的にかわいいことをしてくるんだよなあ……。心臓がヤバい。

「はい！これで盾になつてね！……なーんて……」

おい、冗談のつもりかよ。

こんな役得、冗談にはしねえよ。

「よし！盾になるかなら行くぜ！」

「えっ……」

驚きながらも、というか驚いたからなのか、俺が歩き出すと上田はその手を離さないままついてくる。

かわいい。

上の階に着くと電気がついた教室がある。

「あれは音楽室ね……」

上田はそう言いながらスマホを取り出し電話をかける。

片手でそれをして、もう片方は俺の服をつまんだままだ。

「もしもし石橋先生？音楽室で消灯漏れが……」

上田が先生に報告してる中、電気が消えた。俺たちの気配に気付いたのかもしれない。……人がいることは明らかだな。

「消灯したので中に人がいるのは確定です。ええ……ええ……不審者なら110番&速

やかに現場から離れて、学生なら臨機応変に。電気が消えて気付かなかつたなら仕方ない。ですね？はい」

通話が終わった上田は改めて俺を見て言う。

「聞こえてた？」

「ああ。俺一人で見ているよ？」

「ここでカッコをつけなきゃ男が廃る。」

「……………行く。私も行く。」

上田はそう言って裾をつまんだまま離さない。仕方ない、このまま行くか。

こっそり音楽室を覗くと何やら人がいるが息を潜めている感じに見える。

スマホのライトで照らしてみると、どうやらバンド演奏の練習をやっている途中で慌て隠れたような雰囲気だ。

上田は俺に隠れながら後ろから窓を覗き込む。

「あら？軽音部さんじゃない？」

安心したのか俺からスツと離れて音楽室のドアを開け、躊躇なく電気をつける。

「やばい！生徒会が来たぞ!!」

軽音部の元気そうな女子がそうやって言う。

上田は呆れたような安心したような笑顔で応える。

「はいはい。で、何やってるのよー?」

「見てわからんかー!?練習だ!練習!」

「今、分かってる?下校時間過ぎて、かなり経ってるのよ?」

「わーってるよ!でもこーゆー徹夜で作業とかが楽しいんじゃない!」

生徒会長に食い下がる軽音部の女子。

なんか本来ありそうな姿だな。

ちなみに上田はそう食い下がる軽音部員を尻目にスマホを取り出して電話をかける。

「そんなあ〜……お代官様ああ……」

「もしもし?石橋先生?音楽室の件ですが私の気のせいでした。はい、異常なしです。」

何!?私(上田)の気のせい!?

「はい。私たちは何も見てないから。鈴木くん行きましょ。音楽室の電気は気のせい

だったわ。」

「上田……なんで?」

「私は生徒会長。生徒の味方だから。それに悪いことしてる自覚があるならバレないよ
うに出来るでしょ?」

上田の言葉に、5人の軽音部員たちは目をキラキラさせている。

「じゃあ明日と明後日、楽しみにしてるからね!」

そう言いながら、上田は音楽室から立ち去ろうとする。俺も一礼してここから離れるとするか。

「さつきはありがとうね」

上田は急にお礼を言ってきた。

「ん？何がだ？」

「さつき。一人だったら多分、心細かったから。一緒に来てくれてありがとう。」

俺としては役得くらいに考えていたから、なんとも言いづらいな……。

「さ、他も見回りしましよ。ほかにも残ってる生徒がいるかもしれないし」

「いたら、また見逃すのか？」

「相手次第かな？意味もなく悪気もないっていうのは帰ってもらうかな？」

「なるほどな……生徒のための生徒会長。残ることがためにならないなら帰すというとか。」

「そういうこと。明日の文化祭も楽しんでもらうために私はやつてるのよ。」

「えらいな……」

「へへへ」

上田の笑い顔は真つ暗な校舎でよく見えなかった。どういう表情だったんだろうな。

【37話】一杯いくか?

「校内は異常なしでした」

「お疲れ、こつちもようやくと終わりそうやわ。」

上田と石橋先生が報告しあっている。どうやら体育館の作業も終わりそうみたいだな。

「一杯いくか?」

え?! いや待て、先生がそれ誘っちゃいかんذار。

「はいはい! 行きます!」

上田はノリノリで返事をする。おいおいマジかよ……。

と言いながらも上田が行くなら俺だって、と手を挙げる。

「水原はどうする?」

「私は今晚は配信があるので遠慮しておきます。すいません。」

「おっしや分かった。ほな3人で行こか。」

どういふ状況なのかよく分からないが、こうして上田と俺と石橋先生の3人でどこか

に行くことになる。

やってきたのは駅前の居酒屋だ。そのまま石橋先生に連れられて入店し席に案内される。

「ほな俺、生中とお前らは？あつソフトドリンクにしろよ。さすがに酒頼んで知らん顔してくれはナシやからな」

「じゃあ私はオレンジジュースで」

「あーカルプスオメガで」

ある意味、ホツとした。さすがに学校の先生がアルハラ強要とかは無くて良かったぜ。

とりあえず乾杯し石橋先生が話す。

「明日からの文化祭がんばっていきましょう！あと上田はこれまで俺の無理難題に応えてきてくれてありがとうな。」

「へえ先生、無理難題のつもりだったんですね。」

「ま、上田ならイケると思ってるんけどな。とにかくあと少し、頼むわな。」

「はい！」

「で、鈴木はなんで手伝いに来たんや？」

「え？まあ頼まれたから……」

「ほーん……」

「私が呼びました!」

上田は渾身のドヤ顔を見せる。

「弱みでも握ったんか?」

石橋先生はクリティカルでヤバいことを言うなあ。

弱みじゃないが秘密は握ってるしなあ。

「さすがに先生でもそれは言えませんよ」

「ほーん……ほな直接、体に聞いてみたらるか」

石橋先生はそんな風に言いながら指をポキポキ鳴らす。

「アハハツ……先生それしたら色々マズいですよ。鈴木くんがちゃんと証拠残してくれますよ?」

上田は笑いながら受け流す。

石橋先生は偽物の不快感を表しながら俺に話しかけてきた。

「お? なんや? 鈴木は俺の味方やな?? おおん? 上田の味方をするんか?」

「先生スイマセン。俺は上田の味方をします。」

「ええ度胸やなあ。まあ今日は見逃しといたろ」

なんだか答えを言ったようなもんな気もするけどな。

「ほんならさ、まあ教師から立ち入られたくないやろうけどさ。最近どないなん？」
急に質問の意図が分からんな……。

「上田はホラ、こないだ浮気男に振られたやん？」

「ちよつと先生〜！ズバツと言いますね」

「それからどないやねん？つて、まあ今は聞くんはやめとこか。今日は鈴木の話の聞か」

「おいおい！俺かよ!!」

「誰が好きなんや？言うてみいや」

「単刀直入にエグいこと聞いてくるな、この先生。」

「先生、そんなざつくり聞いちやおもしろくないじゃないですか。つてか鈴木くん
けつこう真面目かもしれませんよ？」

「まあ真面目なら真面目なりな話は聞くで。ほら話してみいや」

「そんな生中片手に語られてもなあ……。」

「とはいえ上田がいる手前、嘘をつきたくもない。」

「……いますよ。」

「おつ!!誰や？俺から担任に聞いたるで。同い年か？うちの高校か？」

「普通に笑いながら結構、踏み込んでくる。」

まあこの関西弁モードな石橋先生なら信用してもいいか……。

「そうっすね。……うちの高校の同い年っすね」

なんなら今は俺の隣に座つとるわ。

「マジか。え？付き合つては？」

「いないんですよ……残念ながら」

「振られたん？」

「いや、振られた訳では……」

「いつから好きなん？」

「まあ……今年の始め？2年生の終わりくらいから……」

俺の中途半端な回答に石橋先生は次第に真面目な顔になっていく。

ちなみに上田がどんな表情で聞いているのかは恥ずかしくて見る事が出来なかった。

「まあお前のことやからな、好きにしたらええんやけどな。もう半年経つわけやろ？行くだけ行つて当たつて砕けてもそれも経験や。大人になったらセクハラとか言われて出来ひんようになるからな。」

「俺の想いは、相手には伝えてますよ。」

「そうなんや!!ほんならこれ以上は今聞かんとこ。相手がある話になつてるんやつた

「俺から言うことは無いしな。」

石橋先生はそれだけ言うが残った生中をグイツと飲み干す。

「すみません生でー!……上田、今の話聞いてみてどう?」

石橋先生は飲み物を注文してから今度は上田に話を振る。

「……………」

「上田!?!」

「えっ?! ああごめんなさい。ちよつと考え事してました」

「ぼやつとしてるなんて珍しいやんけ。今の鈴木の話聞いてどう思う? まあ相手にどう思われるかは別として」

「そうですね! 言ってもらえるのはとても嬉しいことだから、それはやつぱり伝えてくれてありがとうってところはありますよ」

「おく聞いてへんかった割にはメチャメチャ深いこと言うやん」

「エヘツ」

「あつ、コイツ考えとつたな」

「まあ私ほどのスーパーパーな人間になると、先生の考えることはお見通しですよ」

上田は得意げにドヤ顔を決めている。

「ほんなら今、俺が考えてること分かるか?」

「うーん……鈴木くんの想い人が誰なのか?ですか」

「ちやうな。答えは……すみません!勘定で!」

そうきたか……!

石橋先生の突然の締めにより、今日の飲み会は御開きとなった。

ちなみにお会計は石橋先生が全額払うという太っ腹を見せつけてくれた。

なんだかんだ良い先生だと思ってしまうあたり、俺もチョロいな……。

【38話】文化祭の日がやってきた。

翌朝、文化祭の日がやってきた。

登校して職員室にいた石橋先生に昨日のお礼を伝えてから、クラスの教室で出欠確認を受ける。

その後はすぐに部室へ。作って箱詰めした同人誌を体育館近くのスペースに持つて行く。生徒会が用意した販売スペースだ。並びには3年生の飲食店があり人通りも多い好立地だ。

まあ浮いているのは否めないが、どこでやっても同じこと。

なら徹底的に浮いているのを利用しようと言うことになったのだ。

一般開放と最初のプログラムが始まるまでの30分で一気に準備完了！あとは文化祭が始まるのを待つばかりとなった。

「いよいよ来ましたね〜」

初めての文化祭でしかも自分の書いた作品でお金を取るというなかなか状況にもかわらず、虎谷はいつも通りの余裕な表情だ。

「すいませんー！一冊ずつくださいー！」

「はい、ただいま！」

「こんなすぐ、いったい誰だと見ると上田だった。」

「ねえねえ一番乗り？一番乗り？」

「ああ一番乗りだな」

「やったー！」

なぞのはしやぎ具合を見せる上田。コレを見るだけでも頑張った甲斐があつたね。

「200円です。はい、ありがとうございます。」

虎谷が会計を淡々と済ませる。彼女の堂々たる雰囲気には救われるぜ。

上田が立ち去ると虎谷が話しかけてきた。

「店番ってどうするんですか？」

「あつとそう言われてみれば……。去年までは無料配布だったので極端な話、店番をしなくても良かったんだが今年はそういうわけにはいかない。決めてなかったな……。」

「いけるときにどつちが来て、最悪どつちの都合もつかない時は閉めるか。」

「分かりました。では早速ですいません。午前中はクラスの方があるので行ってきていいですか？」

「おう。」

虎谷はスタスタと消えていく。

あんな部活に力を入れていのに、クラスの方でもちやんとやってるのかと感心してしまう。

ま、虎谷ならわけなく出来そうだよなあ。

さて、困った。

横の食べ物の模擬店は大声で呼びかけているしその方が活気もあつて良いというものだが、文芸部はイメージ的にそれをするのも微妙だよなあ。

「へい！へい！へい！へい！へい！へい！へい！へい！へい！へい！へい！へい！へい！」とか言わないよなあ……。だいたいそのかけ声は恥ずかしいから嫌だな。

「すみません、1冊ずつください！」

「あ、はいただいま……。つて水原かよ」

購入第2号がほぼモブに近いキャラなんて悲しいぞ

「水原かよとは失礼な。お客様だぞ？へへッ……。まあ冗談は置いて、そんなしみつたれた顔してたら売れるもんも売れねえよ？」

「うるせえ！」

「うわあ過去のゴーストライターに厳しいなあ……」

「まあ水原の言うとおりかもしれない……。どうすりゃいい……。初めて過ぎて分からん……」

「隣みたいに大声出すか!？」

「それは合わんだろ……」

「じゃあとにかく話しかけて買わせるとか?」

「お前、何言つてんだよ……」

「祭りだあゝ!つて雰囲気を最大限利用すんだよ!例えば……」

水原はキョロキョロしてから近くを通りかかった生徒を捕まえて話しかける。

「すいません、例えばなんですけども、桃太郎が極悪で鬼が石橋先生みたいな話とかどうすか?」

「はい?」

「まあそんな話がねゝあるんですよ」

「はあ……石橋先生が鬼?」

「正確には石橋先生みたいな人ね。そのあたり権利的にめんどいから。で、そんな話が入ってるのがコレなんですよ。去年の文芸部の本。まあもらってっつて〜」

水原はそう言いながら半ば強引にどこからか出した去年の文芸部作品を見ず知らずの学生に渡した。

「とまあこんな感じ。」

「強引じゃねえか!つてかやるなら今年のを売り込めよ!」

「だって今年のはまだ読んでないし。今年の書いたなら出来るだろ。じゃ頑張れなく」
水原はそれだけ言って立ち去る。まったくとんでもない話だなあ……。

と15秒くらい考えたが、何もせずよりはマシかと思いつ。

その時、誰かの保護者と思わしき大人の女性が通りかかった。

何も生徒に売るだけが能じゃない。大人の方がお金も持つてるはずだしな。

「文芸部でーす」

俺の声に保護者は一瞬立ち止まる。ここしかない。

「すみません、1冊どうですか？」

「いやあ……」

「ああ……じゃまあ……青春とかどうですか？今の学生の恋愛とか気になりませんか？」

「んんー……まあちよつとは……」

「ちよつとそんな話も入れてみたんです。買ってつてください！」

「………はい、分かりました。いくらですか？」

「1冊100円です。ただ恋愛の話は2冊に分かれてるんですよ……」

「はいはいじゃあ2冊ともください」

「ありがとうございます!!」

半ば強引に押し込んだ気もするが売れた。身内票ではないちゃんとした売上だ。

文化祭という雰囲気を利用して、このままやるか。

……

「まあ浮気とか最悪ですよねえ」

「でしょー。ただまあ浮気してる側って言うのがどんななか。そういう視点も見てみたくないっすか？」

「うーん……基本、浮気してたら燃やすつもりだからなあ……。」

「燃やしたら話できないし、まあ話したくもないだろうけどw」

「それなw w w w」

「つてことで、浮気した側の思考がいかにクズか書いたんで読んでくださいや」

「……………なんでそんなこと書けるの？」

「文芸部なので！……………つてのは冗談で、実際に俺の好きな人の好きな人は浮気というか三股やつてるやべえ話だったもんで」

「そこが元ネタ？」

「ええ……………」

「文芸部のお兄さんも大変だね。じゃあお兄さんはその三角、あ、四角関係に」

「入ることすらできなかつたね。あ、これはここだけの話で。」

「はいはい。なんかかわいそうだから2冊とも買ってあげるよ」

「ありがとうございます！」

見ず知らずのJKと舌戦をしながら、また2冊売れた。

おしゃべりしてから売るまでこぎつけるから時間はかかる。

ただ売れた実感があるのは嬉しいな。

「お疲れ様です」

虎谷が戻ってきた。もうすぐ昼だ。意外に早いなあ。

「どうですか？売れています？」

「まあまあつてとこだな」

「ですねえ……多分、これペースだと間に合わないですよね？」

「うっ厳しいこと言うなあ……例年、明日の方が客が多いからと樂觀視してるんだが

……」

「そうなんですか？」

「今日は金曜だから……明日は他校の人が遊びに来たりするだろ」

「ああ……まあ。そうですね、いけます？」

「正直、難しそうかな……」

「はいはい。じゃあ鈴木さん、お昼行って良いですよ。私代わります。」

「お、おう」

虎谷に促されるまま、一旦文芸部から離れて腹ごしらえに行くことにする。

確かに売れたことに手応えはあったが、このままじゃ全部はさばけないよな……。

とりあえず俺は適当に焼きそばを2つ買って文芸部に持ち帰る。ちなみに片方は虎谷の分だ。

というところで数分で文芸部に戻ってきた。

目の前で同人誌が売れていくのが見える。ポツポツだが売れているのが嬉しい。

「お疲れ。どうだ？」

「まだ数分ですよ。お昼食べてきたんですか？」

「買ってきた。ほい虎谷の分」

「あ、ありがとうございます。いくらですか？」

「いや、いいよ。それより売れてるか？」

「まあまあですね。」

虎谷はまあまあとか言ってるが、どうやら俺が1時間かかって売った数が、ものの数分で売れたように見える。

「なんか魔法とか使ったか？割と売れてるじゃねえか」

「立ち読みを許可してみました。みんな数分後には買って帰るんですよ。」

「なんだと……？」

言ってる意味がよくわからない。するとまた一人通りかかる。

虎谷はちよつとちよつと、と手招きをする。

「立ち読みしても良いですよ。」

そう言つて差し出すのは俺が買った作品の後半が載つた方だ。

確か主人公の想い人の恋人が浮気しているという場面だつた気がする。

「どうです?」

「これつて続き?」

「はい、前半はこつちですね。立ち読みします?」

「立ち読みで良いんですか?」

「私は良いですけど。まあ帰つても読めますし、今読まなくても……」

「ああそつか。体育館で待ち合わせしてるんだつた。ほなとりあえず買つて帰つて読めます。」

「ありがとうございます。2000円です」

強引な気もするが、俺みたいに舌戦を繰り広げたあげく買つてもらえないとかよりはコスパも良さそうだな……。虎谷だから出来る技なのかもしれないが。

虎谷は俺から焼きそばを受け取つてちやつちやつと食べる。

その間は、俺が店番だ。つつても虎谷みたいな技は使えないしなあ。

「私、ここにいてるんで売り歩きに行ったら良いんじゃないですか?」

「なるほど、その手があったか。確かにブースはここだが、歩いて売りに行くつてのはアリだな。」

俺も焼きそばを食べながら終わったらその作戦を使わせてもらおう。

店の方は虎谷に任せた方が良さそうだしな。

さて、とりあえず何冊かずつ適当にエコバックに入れて店から離れる。

俺には水原がやってたようなやり方しか思いつかないし、知らない人と話すのはプレッシャーもあるが逃げてられない。よこしまな考えかもしれないが、結局は上田に良いところを見せたいから廃部も阻止したいわけだしな。

最低限、そこはブレたらいけないと思う。

「あら? 鈴木くん?」

おっと噂をすれば影だな。上田が声をかけてきた。

「どうしたの? 休憩?」

「いや、出張販売だ」

「あら? またすごいことしてるわね」

「虎谷のアイデアだけどな。」

「ホントあの子すごいわね……分かった。私も何か協力しようかな。」

「マジか!?無理はしないでくれ。これは文芸部のことだからな」

「大丈夫!大丈夫!それにもととは私が持ち込んだ話だしね!ちよつと待つてて」

上田は駆け足でどっかに行き、少しして戻つてきた。

首からかけるタイプの板つぽいヤツに文芸部と書かれた紙が貼られている。

さながら駅のホームの弁当屋みたいな雰囲気だ。

「ほら、これでまず『売つてる』つて雰囲気が出てくるでしょ?エコバックだけじゃ電子たばこのセールスみたいだしね。」

「上田つて時折、変な知識を披露するよな」

「えへつ。あ……あとコレ」

そう言いながら、文芸部と書かれた紙に文言を付け足す。

「無料悩み相談……?なんだこれ?」

「相手から話しかけてもらいやすくするためよ!悩み相談に来た人に答えてあげて、ついでに本を売rinaさい!」

「サラツと大変なことを言うなあ」

「鈴木くんなら出来るつて思うから。じゃあ頑張つてね!」

謎の信頼だな……まあ応援もされたし行くつきやねえなあ。

上田と別れて俺は人の多そうなところへ向かう。

【39話】一緒に

そして早くも一日目が終わる時間がやってきた。

悩み相談作戦はうまく行つたと言えばうまく行つたのかもしれない。

持ち出した冊数はすべて売れた。

お客さんの話を聞いて真面目に考えて話をしていたもんだから回転率は悪かつたがな。でも俺が店番してても回転率は悪くなるからこつちの方がいいのかもしれない。

「どうですか？売れました？」

「持つて行つた分は売れたぜ」

「お〜！」

「そつちは？」

「まあまあまあまあ」

そう言いながら虎谷の手元を見ると在庫はほとんど残っていない。あと数冊だ。マジかよ……。

「補充はしてないんでまだ部室に残ってますけどね」

それはそうなんだけどな。実はまだ部室に全体の6割近い在庫はある。

「一般がない今日、全体の4割弱売れたなら上出来だろう。と俺は思うが……」
「まあ……そうですね」

もちろん明日は今日より売らなきゃならないわけだが、ある程度の満足をしたってバチは当たらないだろう。虎谷は不満そうな顔をしているのが気になるが……。

「明日の方が人は多いし今日より売れるって」

「そうですねー……」

そんな風に話していたところに上田がやってくる。

「お疲れ様々鈴木くん探したよ」

「俺か? どうした?」

「出張販売うまくいった?」

「おおうまくいった! あの悩み相談の貼り紙だから話しかけてもらいやすかったし助かった!」

「おおう!」

なんだかニコニコと上機嫌になる上田とそれを見てちよつと虎谷が不機嫌そうな顔になる。

「鈴木さん、私への感謝は?」

「そうだったな。虎谷が出張を言いだしてくれたんだもん。ありがとうな。」

「フフツ」

なんか感謝しろと言う割に真面目に感謝を伝えると鼻で笑われた。出会って半年になるがやっぱり掴みにくいなあ。悪い子じゃないのは間違いないんだが。

もう一歩だけ押すかな。

「よし、何かスイーツでも食べようか？おごるぜ？コンビニで良いかな？」

「あーチーズケーキ食べたいです。コンビニ行きましょ。」

おごられるのはちよつとと断ることも多い虎谷が珍しくアツサリ受け入れたな。

案外、慣れないこと続きで疲れているのかもな。

「いつてらっしやい〜」

上田が笑顔で手を振るがちよつと待てよ。

「上田は来ないのか？」

「え？私は文芸部じゃないけどいいの？」

「いつも助けてくれるし、感謝してるって意味じゃ虎谷だけじゃなくて上田にも感謝してるぜ？用事がなかったらせつかくだし来てくれよ。」

「う〜ん……じゃあごちそうさまです！すぐに帰る準備するわ」

「よしー！」

つい声にガッツポーズが出てしまったが、まあそれはともかく3人でコンビニに向か

う。

コンビニでチーズケーキを買ってから3人は解散して帰る。妙に疲れた雰囲気では話は少なくケーキを買ってお礼と挨拶だけで帰る。

俺も帰宅すると何ともいえない肩こりに襲われる。知らない人に話しかけ続けたストレスが一気に来たんだろう。

しんどくなつてゴロゴロとしてっていると、着信音が鳴る。

メッセージじゃなくて電話か……。珍しいな。

誰からだろう、と画面を見るとなんと上田だ。突然のことに慌てて出る。

「もしもし、鈴木くん？今、大丈夫？」

「おう大丈夫。」

「今日はチーズケーキありがとうね。美味しくいただきました。」

「おう良かった良かった。」

「このお礼を言うために電話をかけてきたのだろうか？」

「それでね、一昨日の晩の話覚えてる？文化祭でどっか回ろうよって話なんだけど。」

「お覚えてる覚えてる。」

「その件なんだけどね。ちよつと時間が作れないのよ……。」

あ……。

そりや俺にとってでは非常に残念だが、あの生徒会の様子なら無理もないのか……。それとも俺を避けているのか……？

後者は考えにくいし考えたくもないが……。

「本当にごめんね！それでね、いろんなところを見て回るのには出来ないんだけど……」
ん？上田の話には続きがあるのか。

「私ね、明日の午前中は2年のクラス劇を観なきやいけないのよ。優秀賞とかそういうのを決めるためにね。」

「へえ……あれ、生徒会で決めてるのか」

「ホントは先生と生徒会が話し合って……なんだけどね。多分、他の人はそんなことするつもりが無いみたいなのよね。で私1人で多分決めると思う。」

「ひえっ……寒気の話だな……」

「でね、もし明日の午前中にヒマだったら一緒に2年のクラス劇、観ないかな？さすがに1人では決められないし」

俺としては嬉しい誘いだ、元演劇部員とただの素人じや、俺には能力不足じゃないかな？

「お芝居は楽しませたまん勝ちだから、元演劇部とか関係無いわよ。それに……」
「それに？」

「鈴木くんの文化祭を一緒に回ろうって誘いを断ってるわけだしね。埋め合わせ……には、ならないと思うけど……鈴木くんが良かったら一緒に観劇くらいはどうかかな？つて」

「そうか……」

上田が俺の軽い誘いにそこまで向き合ってくれていたのか……。

なら俺の回答は一つだな。

「分かった。じゃあ明日の午前は2年のクラス劇を観に行くよ。あんまり舞台のことはよく知らんからお手柔らかに頼むな。」

「ありがとう！よろしくね♪」

「こっちこそ、よろしく！」

これにて通話終了。俺にとっては最後の文化祭で好きな人と過ごせる時間が作れた。色んな出店を見て回ったりは出来ないが、クラス劇を観るのもなかなか面白そうだしな。

明日が楽しみだ。

【40話】クズな俺と今カノと元カノ（未来形）

夜が明ける。今日は文化祭2日目だ。

上田との約束はあるが、その前に文芸部の準備をしないとな。

まずは部室に行つて残つた同人誌を下の文芸部ブースへ運ぶ。せつせと運んでいると虎谷もやつてきた。

そうだ、午前中は不在にすることを謝っておかねば……。

「おはようございます。昨日はありがとうございました」

「おう。それとな、すまんのだが今日の午前中、店番頼めるか？」

「良いですよ。何かあるんですか？」

「ちよつとな。2年のクラス劇でも見ようかと。」

「分かりました。楽しんできてください！」

「おう！じゃあ悪いけど頼むわな！」

虎谷に在庫を託して俺は体育館に向かう。虎谷なら大丈夫だという信頼もある。

体育館に着くと入口の近くに上田はいた。

「おはよう！ごめんね呼び出しちゃって」

「んん、こつちこそなんか気を遣わせたかな？ごめん」

「大丈夫！さつ適当に席見つけて座りましよ。どこか希望とかある？」

「特には……上田のオススメ席は？」

「無いかなあ。お芝居はどこから観ても楽しいからね！」

そう言つて笑う上田を見ると、どうやらやっぱりまだ舞台は好きなんだなあと思
う。

「じゃ、一番後の席でいい？」

「OK！ちなみにその心は？」

「一応、私は今回、優秀賞とかの審査をしなきゃいけないのよ。だから他のお客さんの反
応も見たいし」

「なるほど……真面目だなあ」

「まあ仕事だし、それに2年生の皆が遅い時間まで練習してるのも見てるからちゃんと
評価しなきゃ。ホントは私なんか評価できる立場じゃないんだけど」

「そうかな……俺は上田ほどの適任者はいないと思うけど」

「そう？夢も無理つてなつて部活も辞めちゃうような人間よ？」

「俺はそこよりも、ちゃんと生徒を見て、しっかり評価も出来るし一番信頼出来ると思
うんだけどなあ。」

「ふふっ。おだてても何も出ないわよ。」

「そうかい。まあ上田が適任だとは思うぜ」

「ありがとう。ちよつと自信は出た」

そんな風に話をしているとブーとベルが鳴る。気付いたら席もかなり埋まつてきた。放送部員が司会をする。

「おはようございます。文化祭2日目を始めます。まずは2年3組『走れメロヌ』です。」
そのアナウンスでスイッチが入ったのか上田は普段見ないほど真剣な眼差しになる。
どこからかノートを取り出し、メモを取る準備すらしている。

普段の朗らかさと、たまに見せる真剣さに俺は惹かれていったんだろうなあ。

俺も真面目に舞台を観るとするか。

数十分で1つ目の舞台が終わる。

俺の感想は、面白かった。

くらいしかないんだが原作が分かりやすいのと、声が後の席までよく聞こえたこともあつて面白かった。

「鈴木くん、どうだった?」

上田は俺に感想を求めてきたので、そんな風に伝える。

「やっぱりそうよね。話が伝わることって大事よね。」

「それはそうと、そのノートは？」

「ん？ああこれは秘密♪私の自習ノートだから気にしないで。」

まあそう言っているものを無理に見ようというつもりはもちろん無いが、自習ってことは本当は役者の夢も諦めていないんじゃないかなあ、なんて邪推をしてみよう。

この後、舞台を見ては軽く感想を言うだけの時間がしばらく続く。

俺としては寂しいような気もしたが、この真剣モードの上田が見れるからいいか。

気付くと、2年生の劇は最後のクラスが終わった。

「これで終わりね。どうだった？鈴木くんはどこが最優秀賞、優秀賞がいいかな？」

「俺に聞くのかよ！？いやいやここは上田先生のご意見賜りたいところだが……。」

「先生って……。」

なんだか満更でも無さそうな笑顔を見せる上田。

「まあ俺も一応聞かれたから答えると、俺は3組と6組が好きかな……完全に俺の好みだが」

「あら、奇遇ね。私も好みは3組と6組よ。バカバカしいところも含めて吹っ切れて好きだわ。ただ生徒会長の立場として、自分の好みで選ぶのはどうかと思ってね。1組な

んで良い話だった気がするのよ。よくセリフは聞こえにくかったけど……」

「難しい話だなあ。ただセリフが聞こえにくかったというか俺にはほとんど聞こえなかつたしなあ……」

「うん、相談に乗ってくれてありがとう！私は私の演劇部員時代に習ったことも思い出して答えを出してみる。」

「おおそりや良かった！」

「私から呼び出したのにあんまりおしやべりできなくてごめんね！」

「そこは気にすんな！劇観るのもなかなか無い機会だしな。」

「じゃあ私はちよつと生徒会室で考えて石橋先生に案を提出するから。鈴木くんは文芸部？」

「そうだな。虎谷に任せてきたからな。文芸部に戻るとするよ。」

「そう……虎谷さんによろしくね！鈴木くんも頑張つて!!」

「おうよ！」

クラス劇が終わり体育館は次の準備が始まる頃、上田とは一旦解散する。

さて楽しい時間を過ごしたわけだし、文芸部に戻つて上田を喜ばせるために俺に出来ることをやるかな。

「お疲れ様〜」

文芸部ブースで本を売る虎谷に声をかける。さすがに売り切ってはいないみたいだが、朝より数は明らかに減っている。

「お疲れ様です。」

「調子はどうだ？」

「まあまあですかね……」

「おなか空いてない？交代しようか？」

「お願いします。」

虎谷と事務的な会話をしながら、店番を交代する。

ブースを改めて確認すると「占い 無料」という貼り紙もある。

これはもしかしたら、昨日の俺……というか上田のアイデアを使ったのか。

何も考えていないように見えて、しつかり考えて行動してるんだなあ、と謎の親心のようなものさえ芽生える。

「すいません、占いつてやってくれますか？……あれ？かわいい女の子が占つてくれるって聞いたんだけどなあ。」

そんな風に話しかけてくる男子が現れた。かわいい女の子じゃなくて悪かったな。

ってかそんなに噂になってんのか？

「とりあえず、何を占ってほしいですか？」

「んん……まあ恋愛運的なのをね……」

「ラッキーだ。この客ならうまくごまかしていけそうだぞ。」

「なるほど……見える！見える！」

「マジっすか!?!水晶玉とか手相も見ないのに何が見えるんですか!?!」

意外に鋭いなあコイツ。

「まあなんとなくは分かりますよ。」

俺はこの後、適当なことを言い続けてなんとか同人誌を売りつけた。

「後はコレ読んで勉強します！」

謎の信頼は得たみたいなのでヨシとしよう。

「おう、次は俺の話聞いてくれや」

そう言つて声をかけてきたのは石橋先生だ。何か悩むことでもあんのかよ。

「あるわ。まあ聞いてくれ。上からは廃部させろとか色々言われて、下からは納得でき

ひんと文句言われてどないしたらいい？」

割とがちなヤツじゃないか……。

とはいえ、この件は俺が文句を言つてる側だからなあ。

なんとも言いづらいので俺は雑に打ち返す。

「これ読んで先生が自分で考えてください」

そう言つて俺は同人誌を売りつける。半ば強引だが、舌打ちをした後、先生はちゃんと購入した。

「覚えとけよ」

「毎度ありがとうございます」

俺が過去にないくらいやらしい笑いを浮かべてやる。

まあある意味では俺は石橋先生のことにも信頼しているのかもな。

石橋先生と入れ替わりで虎谷が戻ってきた。

「今、石橋先生来てました？」

「ああ来てたな。」

「石橋先生に売れました？」

「ああ売ったぜ」

「おおう」

虎谷が音を出さない拍手をする。そんなにすごいことなのか？

「虎谷はこのあと、文化祭観るか？俺はここで店番しておくが」

「私もやりますよ。占いとか鈴木さん出来ました？」

「俺は無理矢理、押し切った。さすがに占い師は難しく出来ないうぜ。」
「ですよね。」

俺は自然と虎谷に席を譲る。占い師が立っているのはなんとなく変な気もするしな。そしてこのあと、俺はえげつない光景を見る。

虎谷が座り数分すると、チラホラと女子が集まってくるのだ。

それもうちの高校だけでなく私服の中学生や他校生など、おおよそ虎谷の知り合いでも無さそうな人も多数見受けられる。

どういふことなのか聞き耳を立ててみると、虎谷の占いがどうやら謎の評判を呼んでるらしい。なんでも「当たりそうな気がする」という不思議な評判だ。

そしてそんな当たりそうな占いをする虎谷が書いた作品が載っているということもあり、同人誌も昨日の比では無いレベルで売れていく。

俺は完全にレジ担当になっていた。

とまあ、なんとも俺の立場がない恥ずかしさと、同人誌はパタパタと売れていく忙しさに満足していると上田がやってきた。

「繁盛してるわね〜」

「おおそうだな。」

「そんな鈴木先生に朗報よ！」

「先生??」

「ほら、文芸部で色んなところに応募してたじゃない? その中の一つが入賞したらしいわ」

「マジか!?!」

「それも鈴木くんが書いた『クズな俺と今カノと元カノ（未来形）』で、なんと審査員特別賞だそうよ!」

あんな黒歴史作品が入賞なんて複雑な気分だが、上田が喜んで教えてくれたわけだし、こっちは喜んでおこう。

「一応、これだけ速報ね! 全校集会で賞状も渡すから楽しみにね!」

「お、おう……」

「何? 嬉しくないの?」

「いやあ……恥ずかしいなあって」

「何言ってるのよ! こんな機会滅多に無いわよ! それに廃部を阻止するタネにもなるしね!」

そういうえば、そうだな。廃部という結論からはまた一步、遠くなったのかもしれないな。

「じゃあ、また後で！文化祭ラストスパート頑張つてね！」
そう言つて上田はどこかへ行く。

忙しい中、わざわざ伝えに来てくれたんだなあと少し感動。本当にいい子だなあ。

「鈴木さん、お客さん！」

「おつとすまない！2000円です。」

「はい。そういえば何か入賞とかつて」

「俺が書いた作品でどっかの出版社に応募したヤツが入賞したらしいです」

「へえ〜!!すごい！入賞だつて!!」

余韻に浸るのは虎谷が許してくれなかったがな。

たださっきの会話を聞いたお客さんが割とデカい声で言うおかげで近くの人がざわついた。これも噂になつて追い風が吹けばいいなあ。

【4 1 話】後夜祭

ふと気付くと日が傾き始めている。時間的には体育館で最後の予定である吹奏楽部の演奏会をやつてる頃合いだな。

流石に文化祭のメインかつビックイイベントである吹奏楽部の時間は誰も来ない。在庫はあと数冊だ。

ああそうだ。忘れちゃいけないことがある。

「虎谷、いいか?」

「なんですか?」

「俺も1冊ずつ買う。ほい2000円」

「ありがとうございます……つて別に部員は持つて帰つて良いんじゃないですか?」

「まあ良いんだけどな。ある意味で記念だからな。」

俺は2000円を虎谷に渡して同人誌を取る。これは思い出だな……。

結局、俺が最後の客となり体育館から拍手の音が聞こえる。どうやら吹奏楽部の演奏会が終わつた合図だな。

「残りでしたね……」

虎谷は何やら悔しそうに言うが残ったのは手で数えられるくらいだ。

「俺はこれでもすごいと思うぜ。虎谷のおかげだ。ありがとうな」

「私、何もしてませんよ」

「いやいや出張販売やら占いやら色々手段を考えてくれたろ。それに作品だっていっぱい書いてくれたしな。虎谷のおかげでここまで来た。ありがとうな。」

「フッフ」

俺の謝辞を虎谷は鼻で笑って流す。

まあ悪気があるわけじゃなくて、虎谷なりの感情表現なのかなと今なら思えるが。

「これにて文化祭のすべてのプログラムが終了しました。」

放送部がそんな放送をする。クラスルームで出欠確認して後片付けという段階だな。

幸いたくさん売れたもんでほとんどブースをほとんど片付けるだけで終わりだ。

これなら一人で出来るだろう。

「じゃ後は俺が片付けとくから虎谷はクラスの方にも行ってこい。」

「良いんですか？ 私片付けますよ？」

「俺の最後の仕事だ。任せてくれ。」

「分かりました。ありがとうございます。」

こうして虎谷と俺は解散する。

ホームルームを終えて俺はまず売上金を事務室に持ち込む。

ここで金額を計算し明細を発行してもらう。売った数と金額はバツチり合ったので精算はこれにて終了。

次はブースの机や何やらを部室に戻しに行く。これも量が少ないので2往復もしたら終了だ。

すんなり終わって俺は体育館に向かう。確か後夜祭があつたはずだからな。

体育館に着くと、イスの片付けなどが始まっていた。

準備をした時は上田と俺とその他2名だったが、今回は大勢が片付けを手伝っている。

「お疲れ〜」

俺の姿を見かけた上田が駆け寄ってきて挨拶してくれる。

「お疲れ様。何をすればいい?」

「イスの片付けをお願い!今回は後夜祭に参加する人全員に片付けをお願いしてるからすぐ終わると思うけど……」

上田の言葉通り、みるみるうちに片付いていく。俺も加勢するかな。

どれだけ後夜祭を楽しみにしてる人口がいるのか分からないが、一致団結したら早いものだな。

俺もポツポツとイスを片付け、15分もすれば土足用のマットを直す作業までたどり着いた。

この作業だけは多人数でするわけにもいかないの、俺たち関係のない加勢組は体育館をいったん出る。

ここは生徒会と石橋先生の出番だ。

その間に俺は教室に戻って帰り支度をしてから、再び体育館へ。

体育館では入り口で待ち構えていた上田が何やら棒を渡してくれた。

なんだこれ。

「折ったら光る棒よ。サイリウムっていうのかしら。これは石橋先生からのプレゼント」

なんだかんだ気の利く先生だなあと思いつつ、そのサイリウムとやら受け取って体育館に入る。

どうやらサイリウムは後夜祭の観客全員に配っているらしいな。気前が良すぎて不気味だ。

「何が不気味やねん。」

「おっと、石橋先生からツツコミが……って心を読まれた!？」

「声に出とるわ。普段、学生には色々と無理強ひさせとるしな。俺のせいちゃうけど」
「分かりました。先生ありがとうございます」

「俺も出るから、サイリウムはありがたく使えよ」

「はい……はい?？」

石橋先生はそれだけ言い残すとステージの方に向かう。

しかもどこからかマイクを取り出して。

そしてしゃべりながらステージに飛び上がった。

めっちゃくちゃなことをするなあ。

「おっしやあー！後夜祭始まりや!!お前ら持つてる棒を折れ!!!」

これまた見たことのないタイプの顔を見せる石橋先生。

言われたとおりに棒を折ると、確かに発光し始めた。

そしてどっかで聞いたことのある曲が流れ始める。

「ほないくぞ!!」

そう言つて石橋先生はどっかで聞いたことのあるノリのいい曲を歌い出した。

多分、幼少期に見ていたアニメの曲だろうなあ。

「サンキューー!」

歌い終わるとノリノリで挨拶。そして別の曲が流れ始める。

「見てるか!!みんな!!」

その馴染み深い声に心が躍る。

石橋先生がステージから飛び降りると舞台の裾から上田が飛び出してきた。

「1・2・3・GO!!」

上田が聞いたことはないものとてもノリのいい曲を歌う。

演劇とは違うが、そもそも上田が舞台に立つ姿をなんだかんだ初めて見るが、とても生き生きしているように見えるなあ。

「一緒なら So Beautiful world!!……ありがとうございませす!!
生徒会でした〜!次は軽音部さんです!」

上田はそう言うもって持っていたマイクをステージのマイクスタンドにセッティングし
裾へ戻っていった。

1曲だけだったか……。もっと聞いていたかったな……。

【4 2 話】近いうちに結論が出る

「ああカミサマお願い二人だけのー」

軽音部がかわいい歌を演奏している中、上田が俺の元にやってきた。

「お疲れ様ー。まさか上田が歌うなんて思ってもなかったぜ。」

「私も急に言われてさくどうだった？どうだった？」

「すげえ輝いてたな。いつも輝いてはいるが、あんなイキイキした顔見たこと無いぜ。」

「そ、そう？なんか思ったよりまともな感想でビックリだわ。てつきり音痴とか言われたらどうしようかと……」

「言うわけないだろ。つてか普通に歌うまいじゃん。」

「ホント!?!」

「上田は時々、自分のことを過小評価するよなあ。もつと自信を持つて良い。つて俺は思うぞで」

「へへへっくそうく？」

上田は嬉しそうに笑う。やっぱり舞台上で何かをして、それを誰かに見てもらいたいんじゃないかと思う。

まあ本人が諦めたというのに俺が深入りするような話でもないかもしれないが。

上田はちよつとだけまじめな顔になって俺の方を向く。なんだろう？

「鈴木くん、聞いていい？」

「ん？改まってどうした？」

「一昨日さ、石橋先生と飲み会で好きな人がどうこうつて話つてさ。あれ私のことよね？」

「ああ」

「2年生の終わりの頃からってアレもホント？」

「マジだ。」

「じゃあさ……鈴木くんはそう思っていないながら……アイツ……あー庄司さんとの件を見てたの？」

「正直、そういうことだな。」

「ふーん……正直、どんな気持ちだったか聞いても大丈夫？」

「正直、しんどい部分はあつたさ。でも上田が幸せなら俺は俺で別に幸せを見つかりゃいいか。なんて思ったりもしていたかな。」

「そうだったんだ……」

「まあ最終的に別れてしまったとも聞いたから、諦めきれずという感じかな……とりあ

えず伝えるだけ伝えたい気持ちもあつたしな」

「ふふっ……そつかあ。ごめんね。変なこと聞いて」

上田はそれだけ言おうと、この話を終わらせる。

ええ……返事はもらえないのか……。

一瞬、そう思ったが、さすがに後夜祭で騒がしい中で返事をもらうのも変な話か。

騒がしいとはいえ、誰が聞いているかも分からないしな。

軽音部の演奏が終わると入れ替わりに今度は有志が出てきて漫才を始める。

「後夜祭良いわね〜これって生徒会もあえてノータッチだから何が出てくるか私も知らないのよね〜」

「へえ〜」

「だからいきなり歌うことになったんだけどね。とりあえず出たがりな人たちが何かしら披露して満足したら終わり。なかなかない、ゆるさよ〜」

「大人たちがよく許容したなあ」

「一応、表向きは石橋先生が進路指導セミナーをやっていることになってるわ。」

「ちよっおまつ」

「いいのよ。文句を言うべき大人たちは私たちのことなんて見てないから、本当に進路指導セミナーをやっているとってわ。」

「いいのか……」

「いいのよ。一応、進路指導セミナーっぽいのも用意したし。私が編集したのよ？」

何のことだ？とステージを見ると漫才が終わりステージにプロジェクターから映像が流れる。

それは「今でしょ!？」でお馴染みの予備校のCMをパクった映像で先生たちがモノマネをしながら面白いことを言ってるムービーだった。

「依頼文をどう読んでくかと言うことー」

石橋先生も出演していた。実際はノリノリな先生なんだなあ。

「この依頼文って大人の事情による依頼にどう対抗するかを教えてくれてるんだって」

上田が楽しそうに言う。この動画は上田が編集したらしい。

「人に何かを見せるのが好きなんだな」

「まあね。役者になりたかったときもそうだけど人を笑顔にしたいっていうのはあるわね」

「ホント楽しい性格だな。正直、尊敬するレベルだ」

「ふつつ褒めても何も出ないわよ」

そんな風にしゃべりながらステージを見る。CMが終わると次はまた別の有志が出てきてバンド演奏を始めた。まとまりはないが、これが普通に楽しいことだけやってい

るような感じで良いな。

1時間半ほどの後夜祭は始まるのが突然だったように終わるのも突然だった。

誰もステージに出てこないと思つたら上田が「終わりね」とつぶやきゴミ袋を持って体育館の入り口に向かう。

使用済サイリウムの回収らしい。

俺も手伝うことにして、上田の持つゴミ袋ではなくその辺に捨てられたサイリウムを拾い集める。拾い集めたサイリウムは上田の持つゴミ袋にポイだ。

「ありがとうね！生徒会でもないのに手伝ってくれて！」

「これまで文芸部員でも無いのに色々やってもらったからな。そのお返しだ。」

「そっかあ。でもありがとう♪」

「どういたしまして。」

そんな風に言葉を交わしていたら石橋先生がやってくる。

「お疲れー。ほなもう遅いから今日は解散やー！」

「分かりました。先生！」

そう言つて、話は終わる。高校最後の文化祭はいつも以上に色々やったが、おかげでいつもにはない充足感があつたな。

上田と2人で下校する。ただし校門前までのすごく短い時間だ。

「じゃあ今日はありがとうな。お疲れ様。」

俺がそう言うとう上田は立ち止まる。そしてほんの少しだけ迷ったような顔を見せてから、意を決したように言った。

「文芸部の件、近いうちに結論が出ると思うから、覚悟しててね。」

その表情は良い答えが返せるか分からないからなんだろうな。その気持ちは痛いほど分かる。

現実 is 厳しいかもしれないしな。

だから俺は声にこそ出さなかったが言いたいことがあった。

「そっちかい!!!」

【43話】一旦、保留

文化祭から数日後、明日は生徒会長の選挙という形だけのイベントが待ち受けている。

つまり上田が生徒会長でいるのも明日までということだ。

思えば上田が生徒会長になって、生徒会室に呼び出され、文芸部の廃部方針などを聞かされてから1年が経つのか……。

ちなみに俺は文化祭をもって文芸部引退ということになり、いまは虎谷が1人で部活をしている。

といつてもまだその体制も始まって数日なんだがな。

そんな今日は上田から生徒会室に呼び出された。

呼び出しは俺個人ではなく文芸部あてだ。つまり文芸部の廃部問題に結論が出たのだろう。

俺は引退してるし、虎谷1人で行ってこいと言うべきなのかもしれないが、俺も結果は気になる。こればかりは俺も生徒会室と一緒に行くことにする。

さて、虎谷と2人で生徒会室の前にたどり着き、俺はここで深呼吸。

「入らないんですか？」

「入る………入るけど………つてか緊張しないのか」

「まあ」

良いのか悪いのか虎谷はいつも通りだ。

まあこの顔を見ると、俺は先輩なんだしドンと構えて行かなきゃな、とは思う。

生徒会室の扉をノックすると、中から上田の声が聞こえ入室を許可される。

入るといつものように上田がいて、他には誰もいない。

「いらっしやい♪まあ座って座って」

なんか逆に怖くなるようなノリの軽さだな。

虎谷は普通に促されるがまあ近くの席に座る。なんでそんな堂々としてられるんだよ。

まあ今さらジタバタしても遅いわけで、俺も破れかぶれ、虚勢でしかないがドシッと構えて近くのイスに座る。

座ったことを確認して上田は話し始めた。

「今日は来てくれてありがとう。もうお察しかもしれませんが、改めて。今年の文化祭

までの活動記録などを基に文芸部の廃部撤回などを求めて抗議をしました。そして先生方から一定の回答が出ました。今日はそれをお伝えするために文芸部を呼び出しました。」

上田は過去になくもつたいぶってくる。

この妙に堅い言葉を並べてくる感じはさながら初期状態の石橋先生みただな。

「で判決は？」

「判決って、そんな大げさじゃないわよ。じゃあ言つて良い？」

「ああ言つてくれ」

「落ち着いてちゃんと最後まで聞いてね……………文芸部は廃部」

マジか……………やっぱり大人の事情には一切勝てなかったのか……………。俺は上田の発言で肩を落とす。

「……………が一旦、保留となりました。」

はい？保留？

「だから最後までちゃんと聞いてねって言ったじゃない♪」

「聞いてますよ。」

「虎谷さんじゃなくて鈴木くんに言ったのよ。過去最高にわかりやすい顔してたから。」

「ふふっ」

「なんだか女子2人が俺をディスってる気がするが……。」

「とりあえずちゃんと説明するから聞いてね。文芸部の廃部方針は変わらないもの。時期が今年度末から来年度末まで保留されることになりました。」

「全部の部活が？」

「いえ、文芸部だけよ。やったじゃない！文芸部は文化祭のアンケートとかでも評判が良かったのよ。あと売上金もあったし。さらに文化祭以外でも鈴木くんが書いた『クズな俺と今カノと元カノ（未来形）』が賞を取ったのもあるわ。そういう多数の目に見える活動実績が廃部決定をひっくり返したのよ！」

「おめでとうございませう。」

かなり朗らかに笑いながら説明してくれる上田と、何故か淡々と祝う虎谷。

まあ、でもこれで俺もちゃんとした形で後輩にバトンを渡せたことになるかな。

「虎谷さんなら大丈夫と思うけど、一応言っておくね」

「なんですか？」

「今回は廃部が保留になった。大人たちはまだ廃部にするのを諦めた訳じゃない。来年も今年と同じかそれ以上のレベルを求められるからそのつもりでね」

「分かりました。」

虎谷は淡々と答える。まあ俺よりも有能な虎谷のことだから大丈夫だろう。

「それと鈴木くん、ありがとうね」

「んん？何がだ？」

「廃部を阻止して！って最初に言い出したのは私だからさ。今回、保留ってことだけで事実上、廃部は阻止できた。本当にありがとう。」

「ああ……いやいや、こっちこそ上田の協力あってこそだからな。ありがとうな。あと虎谷も、俺についてきてきてなんなら引っ張ってもくれて」

「ふふっ」

このあと3人で数分程度、雑談をしてこの会合は終わりとなった。

「さあ私の生徒会長としての仕事も終わったわ！明日からは新しい会長になるし！」

「そうだったな。上田も1年間お疲れ様！」

「上田さん、お疲れ様でした。じゃあ私は部活に戻りますね。」

虎谷が先にスイツと生徒会室を出る。続いて俺も出て帰ろうとする。

「あ、鈴木くん。ちよつと待って。私も帰るから。」

「ん？おお」

上田に呼び止められ一旦、止まる。上田が身支度を整えて出てきた。

「ちよつとだけ話がしたいんだけど時間ある？」

上田がそんな風に言う。なんだか珍しいことを言うなあ。

「ちよつとついて来て」

上田からは、そんな風に言われて一緒に校門を出る。するとお互いに帰る方向ではない方に向かう。

どういうつもりなのだろうか。

・・・いや何となくはわかるんだが・・・

【44話】 ゆっくりゆっくり

上田に連れられ数分歩いてたどり着いたのは公園だ。閑静な住宅街の中の普通の公園だ。

公園のベンチに上田は腰を下ろして、俺に隣に座るように促す。

「改めて、文芸部の件ありがとうね。」

「ん？んん。俺こそ、上田に言われなきや何も出来なかったわけだしな。」

「怒らないで聞いてね。私さ、あんなこと言っただけけど正直、廃部になると思ってた。最初はそんなことも無かったけど、石橋先生からそもそも廃部ありきで話が進んでると聞いてもう無理かかって。」

「俺も正直、あの時は無理だっけと思いはしたさ。石橋先生は何言っても機械的に同じことばかり言うし。」

「でもそれを鈴木くんはひっくり返してくれた。頼んだ私が聞くのも変だけどさ、なんで諦めたり投げやりになったりしなかったの？後輩の虎谷さんがいるから？」

「まあそれもあるっちゃあるがな。一番は上田だよ」

「私？」

「上田に良いところを見せたい。希望を叶えたい。もちろん大人の勝手に振り回されるのも嫌なんだが、一番はそういう……まあ下心だな。」

「ふふっ下心って……。ある意味すごいわね。それでこの1年？」

「そうだな。年明けたくらいからだな。」

「諦めなかったの？」

「諦めそうになった時はあったが、やっぱり諦めきれなかった。」

「そう……」

ここで会話が一旦、止まる。周りには誰もいない。上田は俺の気持ちも知っている。待ってくれと言われた文化祭も終わった。俺は改めて上田の方に向き直る。

「上田……」

「ん？何かしら」

何を言われるのかを察したように彼女は笑う。

「俺……上田のことが好きだ。付き合ってほしい。」

「しょうがないなあ。そこまで言うなら付き合ってあげるわよ」

上田は笑いながらそう答えてくれた。

この答え、考えてたな……。

そう思いながらも、やつともらえたい返事に俺も自然に顔が綻ぶ。

「そんなに嬉しいんだ……鈴木くん意外と純情なのね」

「うるせえ！……はははっ……今日ほど清々しい気持ちなことも滅多にないぜ」

「そう……早速で悪いけど、私からのお願い聞いてくれる？」

「ん？ どうしたんだ？」

「私たち、受験生だから受験が終わるまで遊びに行ったりとかは出来ないけど良い？」

「それはもちろん。」

「後もう一つ。大事にしてくれる？」

「ああもちろん。」

「じゃよろしくね！」

上田はそんな当たり前のお願いだけ言うとうィンクをひとつ。かわいい。

「あ、あとひとつ。いい？」

「ん？ なんだ？」

「私のこと、名前で呼んで。」

「……江美。これでいいか？」

「鈴木くん……あー……いや、善治くん。これすごい恥ずかしいわね」
「……だな。」

上田の顔がみるみる赤くなる。

「善治くん、顔赤いわよ?」

「江美、そらお互い様だ。」

そんなことを言つて笑いあう。なんだろう、この幸せは……。

このあと、俺たちはそれぞれに帰路へ向かう。

このままどつかへ遊びに行つたりするのは受験生という身分が許してくれなかった。
まあそういうことは受験が終わってからすればいい。

ここに至るまで長かつたんだ。この先も長くて良いだろう。

ゆつくりゆつくりと歩んでいけばいい。

【45話】夢

こうして江美と俺は付き合うことになった。

しかしまあ分かつていたことだが彼女は根はとてもまともな性格だ。

初詣は一緒に行ったが、それ以外には学校で会うくらいしかない。

SNSでやり取りするのは付き合う前からやってたしな。

まあそれも時期が時期だし仕方ない。

学校が自由登校になると、いよいよ会うこともなくなってきた。

まあこれだけの甲斐もあり俺は地元の大企業に就職した。

俺たちの通う高校はなんちやって進学校だしFラン進学して後で詰むよりは、たまた

まああった大手企業とのご縁を選ぶことにした。

そして今日は江美の第一志望の大学の合格発表だ。

本人の強い希望で俺も一緒に発表を見に行くことになった。

朝、駅で待ち合わせる。

「おはよう 善治くん」

「おはよう……うわつきこちない！」

「そ　そん　なこと　な　いわ　よ」

半月ぶりに会う江美はなんだかすべてがカクカクした動きをしている。

「善治くん　は　緊張　しない　の？　仮にも　彼女の　第一　志望よ？」

「緊張するが……まあ俺は受かつてるって信じているしな」

「ふふっ……なんかそれ聞いて安心して緊張が解けたわ……行きましたよ」

そう言いながら彼女は目的地と反対に行く電車に乗ろうとするので手を引いて止める。

緊張解けてないじゃないか……。

「ほら、そっちじゃないだろ」

俺は江美の手を引いて連れて行く。そしてちょうどやってきた電車に乗る。

「江美、本当に大丈夫？」

「ちよつと大丈夫じゃないかも……今思うとあの問題とあの問題と……」

ありや……こりや相当ナーバスになつてゐるなあ。

しばらくして大学の最寄り駅に着いた。

「降りるぞ。ほら」

「善治くん……」

「ん? どうした?」

「手握ってて……」

「はい」

俺は江美の手を握って、そのまま電車を降りる。手が冷たい。相当だなあ。

「手めっちゃ冷たいけど大丈夫か?」

「1人じゃ無理……」

「分かった分かった一緒に行くから。」

俺はあくまで大丈夫と信頼しているからな。こうなったら俺が引つ張っていくしかないだろう。

そうしてなんとか、番号が掲示される近くまでやってきた。番号のところは人が群がっている。

「善治くん、ここで待ってて……」

「1人でいけるか?」

「大丈夫……ここまで来たら平気……」

いつになく笑顔も元気もないまま江美は俺の手を離すとそのまま番号の方へ向かっていった。

体感にして数十分、実際には数分して江美は戻ってきた。

俺が元の位置から動いてなかったことを確認してから駆け出して俺に飛び込んでくる。

急に積極的に来たなあと思うと俺に抱きついてきた。

こんなことは初めて過ぎて戸惑ってしまふ。

「善治くん……ここは抱きしめ返すところだよ……」

「お、おう……」

そうは言っても江美は普段はそこまでには見えないものの案外、華奢で力を入れたらポキッと折れてしまいそうだ。最大限、優しく手を添えるレベルで抱きしめる。

「あつた……あつたよ。受かってたよ……」

「おめでどう……」

数十秒、その体勢のあとは自然に離れてお互いにとびつきりの笑顔でハイタッチ。

「イエーイ!!」

うん、やっぱり江美はそっちの笑顔の方がよく似合う。

「ちよつと親にも言つてくる。」

そう言つて江美は一旦、少しだけ離れて報告の電話を入れた。

江美が報告を終えてから俺たちは近くの喫茶店に入る。

第一志望の試験が終わつた後も、まだ滑り止めがあるとかで勉強していたため、ひさびさにゆつくりおしゃべりという感じだ。

「合格おめでとう」

「ありがとう〜！」

「つてことで善治くんには言つておきたいことがあるんだけどね。」

「どうした？改まつて……」

「私さ、昔は夢があつた話つて覚えてる？」

「役者になりたいつていう話か？」

「そうそう！そのことなんだけど」

「もう一度目指してみたい……つて話か？」

「えー！先に言つちやうの！？つてかなんで分かつたの！？」

「まあ諦めたつて言つても舞台上に立ったりするのが好きなんだろう？文化祭、後夜祭で

それはよく分からせてもらったしな」

「そう……大学入ったら、勉強もちゃんとするわよ。でもその中で劇団のオーディションとかに参加したりしてもがいてみようと思うの。」

「なるほど。」

「でも善治くんが『ダメだ。おまえに才能は無い』って言うなら……」

「言うわけ無いだろ。江美の人生なんだからさ。才能云々は分からないが、江美はもつと自信を持つて良いと俺は思うぜ？」

「そうかな……。じゃあさ、じゃあさ。善治くんは応援してくれる？」

「もちろん！」

「……ふふつ。言質はとったからね」

「ああ。頑張れよ」

江美は新たな人生の第一歩を歩むことを決めたわけだな……。

俺も4月から社会人だしな。どんなことが待っているのやら。

「ちなみに、私が夢を諦めなかったのは、どっかの誰かさんが諦めない大切さを見せてくれたからよ♪」

「なるほどな……。だったら、なおさら俺は応援する立場だな。」

そう言つて笑い合ひながら時間は過ぎていった。

いつまでもこんなまつたりとした時間が続くことを祈りたいもんだな。
そしてこう笑いあえる幸せをずっと持つて生きたいもんだ。

「改めてこれからもよろしくね！」

「ああ、よろしくな！」

おしまい